

幻想転生記

黒崎竜司

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

よくある妄想転生小説です。短い上に駄文ですがよろしく願います。

批判コメは作者が泣いてしまうのでやめてください。作者は豆腐メンタルです。

2／9トリコタグ追加。3DSのゲーム知識なので、アニメでありえない事がおきてるかもしれません。勘弁してください。お願いします。

6／6原作キャラ死亡追加（古代編の戦闘が大体命のやりとりなため、保険として追加しました。極力死なせないようにはします。）

目次

古代編

第1話	第2話	第3話	第4話	第5話	第6話	第7話	第8話	第⑨話	第10話	第11話
1	6	11	15	22	28	32	38	43	49	54

第12話	第13話	第14話	第15話	第16話	第17話	第18話	第19話	第20話	第21話	第22話	第23話	第24話
59	68	74	82	89	98	103	111	118	122	129	138	148

第34話	第33話	第32話	第31話	第30話	第29話	第28話C	第28話B 2	第28話B	第28話A	第27話	第26話	第25話
225	221	216	212	204	193	186	183	176	171	166	161	157

特別編4話	特別編3話	特別編2話	特別編1話	竜也の転生	第42話	第41話	第40話	第39話	第38話	第37話	第36話	第35話
293	289	279	274		268	261	256	252	248	244	238	231

キャラ設定	337
リハビリ話	327
特別短編	315
その他	
2話	310
1話	305
亮君編	
特別編5話	298

古代編

第1話

俺は川神臨人。どこにでもいる学生…といたいけど

「ど…ど…ど…」

見渡す限り真っ白な空間にいた。

「いやーすまんすまん。お主はわしのせいで死んでしまったw」

「え…」

いきなり出てきた老人に死亡宣告されるってどういうことなの…

「死なせてしまった詫びじゃ、転生して新たな生を歩ませてやろう。」

「いや、あんたは誰だよ。」

「わしは神じゃ。というかお主、ずいぶんと落ち着いておるな。」

「まあ…ね。」

「この空間に神…ということとは…」

「小説によくあるやつか。」

「察しがいいのう、その通りじゃ。」

知ってはいたがまさか自分が転生者になるとは…

「そういえば何で俺は死んだんだ？」

「わしのミスでな。」

「そこもテンプレか…」

「まあまあ、最後まで聞け。」

「どうせ魂の管理の仕事中に何らかのミスをして、そのミスで俺の魂に影響が出て俺が死んだってところだろ。」

「そこまでわかってたなら聞かんでほしいのう…」

「マジか…」

「テキトーに勘で喋ってただけなのに正解とか…にしてもそんなにミスって出るのかな…」

「結構出るぞい。」

「心読むなよ。というか読めるんだったらさつきから会話しないで心読めばよかつただろ。」

「それじゃおもしろくなくての。会話であれば相手の性格が少しじゃがわかる。」

「そんなもんなのか。」

「そんなところじゃ。」

なるほど…そんなことまで考えてたのか…

「まあ、そんなことはどうでもいいわい」

「どうでもいいのか…」

「ちなみに、おぬしの世界での死亡理由は心臓麻痺じゃ」

「心臓麻痺で…」

某ノートに名前でも書かれたかな…ありえないとは思うけどw

「話を戻すとしよう。転生の話じゃが」

「そういえば、そのためにここにいたんだっけか。」

いろいろと雑談してたせいで忘れてたが、転生させるためにここに呼ばれたんだっただけか…

「どこの世界にする？」

「どこでもいいのか？」

「どこでもよいぞ。」

「なら、東方 project の世界にしよう。」

「東方 project の世界か…時代はいつにする？」

「古代しておくか。」

「最後に、物語開始からどれくらい前にする？」

「それはテキトーに決めてくれ。」

「そうか。」

「あれ？特典は？」

「特典はこつちで決めておく。何、嫌というほど付けてやるから安心せい。」

ちよつと安心した。東方の世界（古代）は生身だと開始数秒で死ぬからな…

「もう確認することはないな？」

「ちよつと待つてくれ。俺の親友はどうしてる？」

「お主の親友…星影竜也のことか…」

星影竜也、俺の親友でいつも一緒に行動してた相棒といえる存在。そいつに何も言え

ずにここに着たから気になったのだ。

「そうそう。あいつは元気か？」

「安心せい。元気に過ごしておる。」

「そうか。」

安心した。あいつが元気なら言うことはないな。

「しかしあ奴、あのままでは異世界にいつてしまうかも知れんな」

「嘘だろ…」

あいつ、異世界に行つてみたいとか言つてたからな…

「なら、行く前に願いがある。」

「何じゃ？」

「こんな事言うのは変だが…」

「もし、もしもあいつが現世を離れたら、俺の行く世界に送ってくれ。頼む。」

「そういつて頭を下げる。」

「わかった。わしのミスで死なせてしまった者の最後の願い、叶えよう。」

「本当ですか!?!ありがとうございます！」

「後悔してないな？」

「もちろんです！」

「よかった…本当によかった…」

「では、送るぞ。」

神がそういうと、俺の足元の穴が開き、落とされた。

「え?うわああああああああああ」

「こうして俺は転生した。」

第2話

「うわああああああ」

どうも臨人です。ただいま落下中。

「落ち着いてる場合じゃねえ！このままだと死ぬ！」

〔転生後の死因：落下死〕とか笑えねえよ。

「ダメ元で……」

転生特典に期待するしかない。頼む…丈夫な体であつてくれ…

「ぐっ……」

体勢は悪いが、一応体が地面についた。

「よっ……と」

とりあえず立ち上がり、周囲の状況を確認する。

「森……か。」

どうやらここは森らしい。周囲の状況確認が終わったので自分のことを確認しよう

とする。しかし、

「自分がどういいう格好なのかわからん……」

森の中なので、鏡の代わりなどない。しかし、もし何も着てない状況で森の中を歩き回ったとしたら、もう変質者だ。そうはなりたくない。

「とりあえず、触つて確認してみるか…」

自分の体に触れてみる。そこにはちゃんと布の感触があった。

「よかった…」

とりあえずこれで、変質者のようなことをしなくていいと分かり安心である。

「ん？何だこれ？」

服の中に入っていたものつぼいな…とりあえずとりだしてみる。

「手紙？」

一通の手紙だった。

「宛名は…俺宛か。」

俺宛であることを確認して開く。そこにはこうあった。

『元気にしとるか？わしじや。神じやよ。今のお主の状況をまとめておいた。今のお主の状況は物語開始の数時間前じや。特典は

・筋力と戦闘力はほぼ最強クラス

・不老不死

・能力は『出す程度の能力』

・家事スキルMAX

の四つじや。技はお主が記憶していた物をほぼすべて使えるようにしてある。

まあ、今は生活に慣れてくれ。じやあの。

P・S親友の件は任せておけ。』

「なるほど…転生特典を伝えたのか…」

しかし、俺の見た目が分からん。さつきから独り言をいろいろ言ってるから、声で男というのは分かる。というかもうガチートやないかい。

「まあいいか。とりあえず、拠点を探そう。」

森の中では生活するのは厳しいから、どこか水のあるところに行こう。そう思っ
て移動を開始すると、

「グルルウウウ」

「んっ？」

気になって後ろを振り返ると後ろの茂みから虎の頭、熊の体、鎌のような手、節足動物の足と、合成生物みたいな生物が出てきて、こちらに襲い掛かってきた。

「マジかよー！」

どうしよう…

「ガアアアア」

こつちがどうするか考えてる間にも相手は攻撃を繰り返してくる。

「やるしかない…か」

戦闘は慣れてないが、やらなきゃやられる。

「とりあえず剣を出すか」

俺はそう眩き、剣を出現させる。

「やってやる！」

「ガアッ！」

化物はどンドン鎌で攻撃してくる。それを避ける。

「そこだっ！『帰燕』！」

化物の隙を突いて燕返しでの反対の順番で斬りつける。

「グギヤアアア！」

それを喰らい、化物は断末魔をあげ、倒れる。

「ふう…何とかなつたな…」

この戦いを経て学んだことは、この体のスペックがえげつないということだ。もしさっきの戦いを生前(?)の体でやったら1秒もしないうちに負けてただろう。

「まあいつか。とりあえず拠点探しをしよう。」

また拠点を探し動こうとした。だがその時、
「キヤアアア」

遠くのほうから、女の人の悲鳴が聞こえた。

「人の声!?!助けに行こう!」

俺は声のするほうへ走った。

第3話

俺は声がした方に向かった。すると、黒髪の女の子が狼のような化物に襲われてるところを見つけた。

あのままでとやばいな…

「助けるか…」

化物を倒すために剣を出し、走る。

「グルオオ！」

化物がこつちに気づき、標的をこつちに変える。

「計画通り」

とりあえず女の子から標的を変えることに成功した。後は倒すだけだ。

「ガアアア！」

化物は俺を噛み殺そうと噛み付いてくる。

「見え見えだっ！」

難なく躲す。

「お返した。『閃光の連撃』！」

そう眩き光の反射の如く連撃を浴びせた。

「ギャアアア！」

化物がバラバラになる。

「ふう…」

勝ったか…しかし、戦えば戦うたびこの体のスペックが異常なことを思い知らされる。

「あの…ありがとうございます。何かお礼がしたいのですが…」

「いえ、礼には及びません。」

「私の家に来てください。そちらでお礼を…」

「俺は大丈夫ですから。」

「でしたら、私を家まで守ってください。」

そうきたか…

「なら、安全な所までは送ります。助けた人が帰り道でまた襲われたらたまりませんから。」

「ではきまりですね！行きましょう！」

女の子はそういって俺の手を引つ張って歩く。

「おっとつと、急がなくてもいいじゃないですか。」

「早く行きましょう！いつ妖怪が出てくるか分からないから！」

こうして俺は女の子の家まで女の子を護衛するという形で連れて行かれた。

数十分後・・・

俺は女の子に手を引かれ近未来的な町の前に来ていた。

「ここからは安全そうだし、君だけでも大丈夫だよね。」

「ダメですよ。ちゃんと家の前まで守ってください。」

そういわれても、あれでは部外者は門の前で追い払われるのがオチだろう。などと考
えている間に門の前に来てしまった。

「少し待たれよ」

ああ、定番の奴だ：門前払いか：そういうえば拠点探さないと：

「これはこれは輝夜様。ご無事でしたか。そういうえば、そちらの方は？」

さて、さっさと離れますかね：

「私の命の恩人です。」

「では門番さん、俺はこれで：

「何言ってるんですか。入りますよ。」

「そつちこそ何言ってるんですか。部外者である私が入れるわけないじゃないですか。」
こんな嚴重な防御体制を敷いてる所では部外者を入れるわけがない。そう思ってたが、

「この人を都に入れてもいいわよね？ 門番さん？」

「大丈夫です。輝夜様の命の恩人であれば拒む理由がありません。」

あるえ〜？ おつかしいぞ〜？ 俺部外者だよ？ 大丈夫なの？

「さ、行きましょう。」

「え〜…」

こうして俺は、輝夜に手を引かれたまま都に入ってしまった。

第4話

なんやかんやで都に入ることになった。都に入り、周りを見渡すと外が森だったというのが信じられないくらい人工物が多い。そんなことを思いながら輝夜に連行(?)されてすこししてから、とても大きな屋敷(?)の前に着いた。すると輝夜が、

「ここが私の家です。」

そういつて屋敷を指差す。こんなに大きな屋敷に住んでるといふことは、輝夜つて名家のお嬢様なんじゃないの?等と考えていたら中から左右で赤と青二色が分かれる特殊な配色の服(上の服は右が赤で左が青、スカートは上の服の左右逆の配色をしている)を着た銀髪の人が出てきた。

「輝夜様!いくら勉強が嫌だからとはいえ、毎回毎回脱走するのはお止めください!今までは都の中で見つげられたからよかつたものの、今回都の外に出て行ったときかされたときは心配しましたよ!」

「あはは…」

どうやら輝夜が外にいたのは今回が初犯じゃないみたいだ。しかし、何故今回も都の中ではなく都の外にしたのだろうか…?

「何故都の外に出たのですか!?!外は妖怪も出るし危険だと教えたはずですが…」

「だって都の中だとすぐ見つかるし、都の外の景色が気になったんだもの」

確かに、この都は外との繋がりを絶つように壁や兵器が配置されている。こんなところにいたら外がどういふものなのか気になるのも仕方ないと思う。少なくとも俺は何年もここにいて、外を見てないと外が気になる。というか、あの女性の方俺にまったく気付いてない?等と思いをめぐらせていると、

「とここでそちらの方は?」

やつとかい!やつと気付いてもらえたよ!

「私の命の恩人よ。」

輝夜が自信たっぷりに答える。輝夜:君が胸張っていえることじゃないでしょう…

「そうでしたか…:ありがとうございます。」

銀髪の女性が深く礼をする。

「いえいえ、大したことはしてないですよ」

当然慌ててそんなことを言う。目の前で人に死なれたくなかったから助けただけなので、礼を言われるような立場じゃないと思う。

「この人は妖怪を軽くやつつけて、ここまで守ってくれたのよ!」

輝夜が軽く説明する。そういえばあの化物って妖怪だったんだ…:とすると、俺が最初

に会ったあの化物も妖怪なのか？

「妖怪を!? 本当にありがとうございます…あなたが来なかったら輝夜さまは今ごろどうなっていたことか…」

銀髪の女性がさらに感謝の言葉を重ねる。

「先ほども言った通り大したことではないですから。」

「それでも…何か御礼をしなければいけませんね…」

ダメだ…これあの時と同じだよ…

「いえ、本当に大丈夫です。」

「でも…」

化物倒して女の子に連行(?) されただけで礼をもらうなんてそんなことはしたくない。

「第一、俺は目の前で人が死ぬところを見たくなかったから助けただけです。それに、本当はここまで来る気もなかったんですから。」

俺は思ってたことを言葉にする。今更だが輝夜の家まで来る気はなかったのだ。

「それに、俺は部外者ですし、すぐ出ないと…」

「え、もう行っちゃうの？」

俺が都を出ようと思ってる旨を伝えると、輝夜が名残惜しそうにそう行ってきた。

「そうですか…では仕方ありませんね…」

銀髪の女性は渋々といった感じだが納得してくれた。

失礼ながら、なんとか拠点探しができそうだと思っていると急に輝夜が

「あなたの家はどこにあるの？」

マズイ…答えられない質問が…どう答えよう…

「何故家の場所を聞くのですか？」

銀髪の女性が輝夜に質問する。すると輝夜は

「ここでお礼を受けてもらえないなら、家まで届けばいいじゃない。それに、家の場所を聞いておけば遊びに行けるでしょう？」

「それは名案ですね…後の言葉がなければ最高でしたが」

なるほど…でも俺には家がない。故に今、答えを必死で探している。もし、家がないことがばれたら絶対この二人…というか銀髪の方が俺のために家を必死で探すだろう。それはまずい。無関係…ではないが、他人のためにこの人に苦勞はかけられない。等と考えていると、答えない時間が長かったのか輝夜が

「まさか、家がないの？」

グサツ！ まさか核心を突いてくるなんて…

「なら、こつちで家を用意しよつか？それなら臨人も住むところができるし私もお礼で

きるし一石二鳥だよね！」

輝夜がそう言う。非常にマズイ……このままだと話が勝手に進んでしまう……どうにかしないと……

「いえ、俺はこのあたりを旅をしてるので今日はこっちへ明日はあちらへといった形で一箇所には留まらないんですよ。」

届け！俺の必死な言い訳！

「そう言われても、この辺りで人がいるのはここぐらいしかありませんよ？」

銀髪の人がそんなことを言う。

嘘だろ……ってそりやそうか……都の中にいたせいで忘れそうになってたけど今古代でしたね……

「だからここでゆっくりしていつてよ。」

「そうですよ。ここ以外の人がいる場所は見つけられないですし。」

二人して畳み掛けてくる。なら、一か八か賭けるしかない！

「家の土地とか用意できるんですか？家作りとかも大変だと思えますし」

これで諦めてくれるだろう。

「やっとその気になってくれたんだね！」

「それなら大丈夫ですよ。私の手にかかればすぐに手配できます。」

え…嘘でしょ…

「永琳！すぐにやりましょ！」

「ええ。少し待っていてください。」

やってしまった…

「でも、今日の臨人さんの泊まる場所は…」

「私のところでもいいじゃない。何を迷っているの？」

「よろしいのですか？輝夜様？」

あ…あの…

「そうすれば少ないかもしれないけどお礼になるし。」

「輝夜様がそうおっしゃるならそうしましょう。」

なんか一気に決まっちゃった…やっぱり賭けはまずかったか…

「ではそういうことですので、ゆっくりしていただくさい。」

銀髪の方がそういつて奥のほうへ入っていった。

「決まりね。さ、あがって頂戴。」

「い、いや俺は大丈夫だから。」

「ほら、はいるわよ」ガシッ

「ま、待って」ズルズル

こうして俺は輝夜の家にお邪魔することになった。

第5話

輝夜の家に泊まった次の日、俺は永琳さんに案内され、用意された家の前まで来ていた。(輝夜の家で永琳さんとはお互い自己紹介しました。)

「ここが臨人さんに用意した家です。」

そう言われて永琳さんに指さされたほうを見る。すぐく…大きいです…(家が)
見た感じ三階建てで一般人が住むにはあまりにも大きすぎる家である。

「外観は気に入っていただけでしょうか？」

一応気に入ったけど、これはさすがに…大きすぎないか？考えてほしい。俺は国のお偉いさんではないし有名人でもない。それに、この街には来て数日しかたつてない。そんな人間がこんな大きな家に住んでいていいのだろうか？等と悩んでいると、

「中のほうを紹介します。」

そういつて家の中に案内された。中に入って思ったことは、中はとてもきれいだということ。また、家具や家電が完備されているということだった。部屋を一通り見てまわり、

「いかがでしたでしょうか？」

永琳さんがそう聞いてきた。どう答えよう？ 正直俺には過ぎた家だと思いが、気に入ったのも確かだ。そう考えて俺はこう答えた。

「いい家だと思います。こんなに大きな家を用意していただきありがとうございます。」
正直な感想を言う。ここで断つたらいらぬ勘違いをされて更に大きな家を用意されそう。永琳さんならやりかねない。というかこれ以上大きなものを貰う訳にはいかない。

「気に入っていただけで何よりです。ほかに何か必要なものはありますか？」
「いえ、大丈夫です。」

あ…生活するにはたぶんお金が必要だよね…仕事とか探さないと…まあその辺は自分でやらないとマズイ。

「では、私はこの辺で。困ったことがあったらなんでも相談してください。」
そう言つて永琳さんは輝夜の家の方へ行つてしまった。

「さて、家に入りますか…」

家に入る。さつき部屋の場所は教わつたので部屋の場所はわかっている。とりあえず、昨日借りた服を洗濯するために風呂場に行く。さつきはよく見てなかったが、風呂場に鏡があった。鏡に移つた人をよく見る。たぶん写つてる奴は俺なんだろう。よ

く見てみる。自分の容姿が気になっていたので鏡があつて助かった。文字に表すとこんな感じである。

・髪の色 紫

・髪型 くせっ毛っぽい

・目の色 青

・目の形 少々吊り目

・肌の色 少し白め

・体型 割と背が高く体は細め

こんな感じである。ん？この姿、どっかで見たような…まあいいか…

俺は鏡で自分の容姿を確認した後、風呂場の前においてあつた洗濯機に着ていた服を入れて洗濯し、最初に着てた服を着る。そういえばこれ以外に服をもつてないな…そう思ったが気にせず自分の部屋（この家には自分しか住んでないが）へ行つた。自分の部屋に入つたら、なぜかさつき置いてなかつたキャリーバックが手紙とともに置いてあつた。何だこれ？と思ひながら手紙を取り、手紙を見てみた。そこには

『久しぶりじゃな。儂じゃ。神じゃ。そういえば転生させたときお主の身一つ送つてしまつたからのう。今頃、「最初に着てた奴以外服がない！』などといつてこまつておるとおもつての。テキストに服を選んで送らせてもらった。活用してくれ。後、この部屋の

ドアの反対側の壁の裏にお主の為の武器と能力の使い方に関する説明をまとめた説明書のようなものを置いてある。それもすっかり使ってくれ。じゃあの。

神より

p. s これからも何通か手紙を送るとともに支援させてもらうつもりじゃからそのとこよろしく。』

と書いてあった。

いろいろベストタイミング過ぎるだろ！というか能力って訓練して制御するんじゃないの!?後、これからもこの怪奇現象あるの!?結構びっくりしたんだけど!?

考えてみてほしい。部屋を案内された時無かった物が数分後部屋に入ったら出てくるなんて現象が起きたらビビらないはずがない。ビビらない奴がいたら見てみたい限りだ。

そんなことはどうでもいい。起きてしまったものは仕方ない。キャリアバックをあけて中身を確認する。

「すごいな…」

キャリアバックの中には歴史の教科書で見たような服からこの都市に合わせた服まで色々入っている。でも、ギザギザしたボロボロのコートとタンクトップと灰色のズボンはいらないと思うんだよねあ…でも、これで服が一着しかないという問題は解決し

た。とりあえず、キャリーバックの中にあつた服を部屋の備えられていたクローゼットに入れる。そして、手紙に書いてあつた壁をどんでん返しの要領で回す。すると見事回り、武器庫のような小部屋に來た。

「え……」

そこには○国無双で見たさまざまな武器と雑誌くらいの大さの本があつた。武器はテキトーに確認し、本のほうを手に取り、開いてみた。そこには能力の使い方が軽く書いてあつた。どうやら、『出す程度の能力』は記憶にあるものを出すことができるが、記憶に無いものは出せないらしい。それを知つて、武器を送つてきた理由がやつと分かつた。つまり、

『この武器の形と名前を記憶させてやるからこれを使つて戦え』

と言う事だ。しかし、近接武器しかないのは嫌がらせだろうか……武器の名前は俺が生前無双廃人みたいな人間だったので、大体覚えていた。ちなみに、この状況は俺にとつてすごい感動モノである。なにせ、俺が憧れていた武將が使つていたものとまったく同じ武器が並んでいるのだから。とりあえず形を見たり、少し持つてみたりする。早くこれを振りたいという欲求が自分の中に沸く。その欲求を抑え、この部屋を出る。部屋を出て、あることを考える。

「仕事どうしよう……」

こうして、俺は興奮を抑えて仕事探しを始めるのであった。

第6話

俺はあれから、職探しに奔走していた。やはり、街に来て間もない人間なのであまり信用されてないようだ。さすがにこればかりはどうにもできない。この町で俺が知ってる人なんて永琳さんと輝夜ぐらいだ。

「なかなか職に就けない…」

このままではニートまっしぐらである。それだけはどうしても避けないと…

なんてこと考えていると、普段聞くことのない警報が街中に鳴り響いた。

「妖怪の侵入を確認。ただちに避難してください。繰り返しです。妖怪の侵入を確認。ただちに避難してください」

妖怪の侵入か…あれ？これってチャンスじゃないか？ここで妖怪と戦えることを知ってもらえば、護衛の仕事ぐらいは貰えるのではないだろうか？

「そうと決まれば行ってみるか。」

こうして俺は、妖怪相手に喧嘩を吹っ掛けに行った。その道中で永琳さんと輝夜に会った。

「あ、臨人さん。早く避難しましょう。妖怪に襲われては危険です。」

「臨人へ入ってきた妖怪もさっさとやつつけちゃってよ。」

永琳さんと輝夜の反応が真逆だ：永琳さんの反応はごもつともだが、ここは輝夜さんの期待に応えようと思う。

「今妖怪はどのあたりにいますか？」

妖怪のところへ行くとうと場所を聞く。勿論危険は承知だ。でも、何としても職に就きたい俺はこの機会を利用しない手はない。

「危険です！この都に入れる妖怪というと、かなりの力を持っています！いくら臨人さんでも勝てるとは思いません！」

永琳さんから忠告される。かなりの力を持った妖怪か：なおさらチャンスだ。討伐はできなくても撃退でもできれば仕事に就ける！

「忠告ありがとうございます。でも、心配しないでください。絶対死にませんから。」

忠告してくれた永琳さんに礼を言う。でも俺にはこれしかチャンスがないので、戦いに行く。

「その妖怪ならあつちのほうにいたよ。」

輝夜が妖怪のいる方向を教えてくれた。どうやら妖怪は街の入り口近くにいるらしい。

「都の軍が対処してるので行く必要はないと思うのですが……」

永琳さんが再び避難させようと説得してくる。

「輝夜、ありがとう。ちよつと行つてくるよ。」

永琳さんの説得を無視して妖怪と戦いに行く。やつと能力を使った戦いができる。というより、これでやつと武將の武器を振るうことができる。それが楽しみでたまらない。

しばらく入口のほうへ走つていくと、一人の女の人(?)に蹂躪されている軍隊っぽい人たちを発見した。あれが都の軍だつたら都も大変だな…

そんなことを思いながらその場所に近づく。

「この人間って弱いわね。つまらないわ。」

向かってくる人間を斬り飛ばしながら、女の人(?)はいかにもつまらなそうにそんな事を言っていた。恐ろしいな。あの人。

少し遠くから、いかにも侵入者である女の人(?)を観察する。

その人(?)は、金髪でスタイルが良く、全体的に黒めな服を着ていた。その人(?)は闇のような真つ黒な剣を振るっていた。返り血とか気にしないだろうか…

俺は軽い観察を終えて、その女の人(?)と軍隊(?)の間に入る。

「あら、軍隊を救うヒーローのつもりかしら?」

金髪の女の人はそんなことを言ってきた。

それを聞いて俺は、あの人たちが軍隊の人間であることを理解した。

軍隊ならもうちよつと戦えないんですかね…女性一人に軽くあしらわれるようじゃ、辛いと思いますけど…

なんてこと考えてるうちに、向こうは臨戦態勢に入っている。

「あら？間に入っただけで、怖くて動けないのかしら？」

なんとも安い挑発をしてくる。よかろう。そつちがお望みなら、俺の力を見せて徹底的にぶつ潰してやる。

「はあ？怖い？調子乗るのもいい加減にしとけよ？」

「へえ、威勢がいいわね。」

（出でよ。滅麒麟牙）

俺は滅麒麟牙が出るように念じて武器を出して構える。

「行くぜ。覚悟はいいな？」

「そつちこそ大丈夫かしら？」

どちらも啖呵をきりながらぶつかり合った。

第7話

どうも臨人です。前回俺は、侵入者が都に入ったという放送を受けて、撃退しに行こうとして、挑発されたので、思いつきり戦闘しています。戦闘開始から数十秒くらいたつて、

「なかなかやるわね。」

そういつてきたので、

「こんなん小手調べにもならねえよ。」

軽い挑発を入れてみる。これで冷静さを欠いてくれればラッキー、といった感じだ。

「へえ、言ってくれるじゃない。だったらこれならどうかしら？」

そう女性が呟くと、女性の持っていた黒い剣の大きさが一回り大きくなり、背中からこれまた闇のように真っ黒な羽が生えてきた。

「さあ、遊びは終わりよ。ここからは本気で行くわ。」

なんて言ってきた。

本気になるの早すぎませんか…まあいいか。早く本気になってくれればそれだけ消耗も早くなる。

「なら、こっちも気を抜けないな。」

しつかり本気だというアピールをする。実際はぜんぜん力入れてないけど。

なんて思ってたなら、向こうは武器をこっちに向けて振り下ろしてきた。

「甘い」

なんていいながら軽く躲す。躲した後、自分がさつきまでいたところを見ると、軽い地割れが起きていた。

「あれを躲すなんて…やるわねあなた。」

女性がそんなことを呟く。え？あれくらい簡単によけられますけど…

「これならどうかしら？」

そういつて、剣を二本に増やしてこっちの急所を狙い、神速の如く攻撃を仕掛けてきた。

このぐらいならまだ避けれるけど、少しやりたいことがあった。俺は相手の攻撃をすべて弾けそうだと思い、攻撃に対応する。そうすると、思ったよりも楽に動き、相手の攻撃を全て弾いた。

「まさか全て弾かれるなんて…予想外だわ…」

女性がそう呟く。結構向こうは力を入れてたみたいで、弾かれたことに驚いている。

「今度はこっちの番だぜ？『無双連撃』！」

相手の攻撃を全て弾いた後、今度はこつちから攻撃を仕掛ける。無双連撃と喋っているが、単純に連続で動きが見えないくらい速い斬撃を加えているだけである。これと喋って特別なことはしていない。ただ、これは疲れる。なぜかという、両手持ちの剣で高速の動きをしているため、体全体が動いてしまうのである。

「くっ…キツイわね…」

向こうは結構ギリギリの様だが、容赦はしない。

「さあ、速度を上げさせてもらおうとするか。」

さらに攻撃速度を上げて、こつちの剣筋が完全に見えなくなるくらいまで動作速度を上げる。

「まだまだ…」

もう剣筋はこつちからすら見えていないのに、それでも相手の女性は八割ぐらい防いでいる。そろそろこつちは決めたいので、相手の剣めがけて大きく武器を振った。

「キヤアアア」

相手は防ごうとして両手に持っていた剣を構えたが、俺の攻撃の威力で二本とも吹き飛んでいった。そして、

「降参か？」

俺は剣先を女性に突きつけ、降参を促す。

「降参よ…煮るなり焼くなり好きにすればいいじゃない…」

女性があつさり而降参の意を示す。

「そうか。なら速く逃げな。俺は挑発にイラついて戦っただけだしな。」

俺は女性に逃げるように促しつつ、建前を言う。本音は口が裂けても言えない。

「あら、何もしないのね。ならお言葉に甘えさせてもらうわ。」

そういうと女性は都の外に行こうとする。都から出る前に、こちらに振り向き、

「あなた、名前は？」

と聞いてきたので、

「川神臨人だ。」

と軽く答える。

「そう、臨人ね。私はルーミア、妖怪よ。戦えて楽しかったわ。じゃあね。」

と言いつ残して去っていった。やっぱり進入してきた妖怪だったか…にしても、妖怪の中にも人間そっくりなのがいるんだな…と思った。

「ふう〜疲れた。」

とりあえず、一息ついて、武器を消す。にしてもあれ、一目じゃ妖怪とわからんのだろ…これじゃ妖怪と人間を間違えそうだ…なんて思考を巡らせていると、軍隊の人たちが起き上がり、

「妖怪はどこへ行った!？」

「街の中を探せ!」

と妖怪を探す声がした。この人たちが軍か…不安だな…なんて考えていたら、隊員の一人が、

「ここは妖怪が来ていて危険だ。街の避難所へ」

と言ってきたので、

「その妖怪なら俺が片づけておきましたよ。」

と答える。すると、その隊員が、

「本当か!？我が束になってもかなわない妖怪を一人で!？」

と喋ってうろたえる。その隊員をほっといたら、別の隊員が

「妖怪はどんな奴だった?」

と聞いてきた。

こいつ…敵の姿も見れずにやられたのか…弱いな…と思いつつ見た通りの姿を説明する。すると、

「あんたスゲーな!あのルーミアを一人でやっちまったのか!」

と賞賛してきた。

どうやら、ルーミアは俺がこの街に来る前にも何回かこの街を襲撃したことがあるら

しい。今までは、住民が避難所に逃げてる間に軍人が足止めする。という形で被害を食い止めていたという。

「あんた軍に來ないか？もし來るなら、俺が推薦してやるぜ。」

と軍人さんが勧めてきた。これでやつと職に就ける…

そう考え、

「なら、よろしくお願いします。」

こうして、俺はやつとの思いで職に就けたのである。

第8話

どうも皆さん、最近独り言が多くなつた気がする臨人です。あれから俺は、ちゃんと言にはいることができました。そのことを永琳さんと輝夜に報告に行つたら、

「軍に入ったのですか。臨人さんなら大丈夫でしょう。とういふか職探しをしてたのなら、頼つていただいてもよかつたのですが……」

「臨人が軍に入ったなら安心だね。」

と、二人とも俺が軍に入ったことについてうれしいお言葉をくれた。でも、永琳さんは職探しのときに少しでも頼つてほしかつたようで、ちよつと不満がもれている。

「今日はその報告に來ただけですので、失礼します。」

そういつて、俺はいつたん家に歸つた。

報告した日から数ヶ月が過ぎて、侵入してきた妖怪を一人で撃退し続け軍の大將になり、都で安定した暮らしをしていたときに、永琳さんに呼び出された。どうやら、とても大切な話があるようだ。階級が高いつて辛いな……こういふ會議に出なきやいけないし……

ちなみに、俺はこういふ會議は好きじゃない。結構雰囲気がいり、その癖に議論が

何も進まないからである。面倒だな…と思いつつ会議の場所へと向かう。

数十分で会議場に着いた。会議場は、ドームみたいな形をしており、中にはかなりの人数が入れる。会議場の中に入り、いつも通りテキストに聞き流そうと思つて席に着いたが、今回は会議の出席者の顔つきが違う。どいつもこいつも真剣な顔つきで入ってくる。そうして数分間待っていると、参加者が全員揃い会議が始まった。

「今回の会議では、月移住計画について話そうと思う」

議長がそういうと、会場内は呼吸の音が聞こえるのではないかというくらい静まり返った。その静寂を破るように、議長が計画の説明に入った。

「今回の計画は、妖怪の持つ穢れが人間の寿命を創り出すものと考え、穢れの無い月に移住すれば人間は寿命を恐れずに生きていけると思い、決行するものである。」

月への移住か…酸素とか大丈夫なのか？

「今回の計画を実行するに当たってこのように作戦を展開する」

議長が話を続けつつ、立体映像で街の地図を出す。

「ここにロケットを置き……」

立体映像を用いて、どこへ住民を誘導するか、また、もし妖怪が攻めてきたらなどを解説する。

「以上が本作戦の内容だ。何か申し立てのあるものはいるか？」

解説を終えて、議長が意見を求める。

「議長。」

「何だね？」

俺の後ろのほうに座っていた軍部の奴が質問する。

「妖怪が来た場合、住民の誘導は誰がやるのですか？」

そんな質問をする。そういえば、軍の人間が妖怪の対策に駆り出された場合、住民の誘導は誰がやるのだろうか？ どうせお偉いさんは保身のためにすぐ逃げるだろうし。

「それは、妖怪の侵攻が来てから決める。」

「そうですか……」

議長にそう言われて、そいつは引き下がる。おいおい、決まっていってどういうことだよ……それに、来てから決めたら遅い気がするんだけど……まあいいか。もし来たら俺以外の軍人を誘導に回して、俺一人で妖怪を無双するだけだし。

「ほかに何かあるか？」

議長が再び回りに確認をする。ほかに質問のある奴はいないようだ。

「ならこれで会議を終了する。では、解散！」

議長が号令をかけると回りの人間が一斉に立ち上がり、それぞれ帰っていった。

「はあく疲れた。」

会議場を出て、軽く伸びをする。やっと終わったよ…

「お疲れ様。それにしても、何故妖怪の対策について発言しなかったのかしら？軍の大將様なら軍の行動については気になるんじゃないかしら？」

永琳さんがそんなことを言いながら近づいてきた。やっぱりおかしかったか…軍の行動がはつきりしてないのにそれをほつとくなんて…

「退屈すぎて忘れてただけですよ。」

軽い口調でそう答える。さすがに、「俺が一人で無双して、ほかの人を誘導に回す」なんていえないからな…

「そう…ならいいわ。でも、少しは軍のことも考えておいて頂戴。もしものことに対応するのが軍というものですもの。」

永琳さんからそう言われる。

「まあ、その辺はちゃんと考えておきますよ。」

ええ、ちゃんと考えますとも。どうやってほかの奴を住民の誘導にやらせるかをね。

「でも、無茶はしないで頂戴。もしあなたがいなくなったら輝夜様に綿月姉妹も悲しんでしまうので。」

永琳さんに無茶しないように釘を刺される。

「善処します。」

お茶を濁すような回答をする。

ちなみに、綿月姉妹とは都の名家の娘さんで、輝夜の友人である。姉の豊姫は頭がよ
く、妹の依姫は運動神経がよい。また、姉はボードゲームで、妹は剣術で腕比べをする。
二人とも俺に勝とうと躍起になっている。どちらも戦歴は俺の全勝です。やっぱこの
体すごいわ。転生前だったらきつと、どっちも全敗だもん。

「あなたはいつも無茶をするから釘を刺しておこうと思っただけど、善処するならいいわ
ではまた。」

そういつて永琳さんは帰っていった。いつも無茶をする…か。さすがに仲間を一人
も連れずに妖怪の巣に突っ込んだのはまずかったか…

「さて、俺も帰りますかね。」

そう独り言をこぼし、家に帰った。

第⑨話

どうも臨人です。あの後、家に帰って荷物の整理を始めておこうと思つてあの武器部屋に行こうとしたら、部屋があつた壁に手紙が貼つてあつた。ああ、またか。次はなんだろうか……そう思つて手紙を手にとつた。

『久しぶりじゃの。わしじゃ。そつちの世界でお主が武器と能力を使いこなしたのを確認したからのう。この武器庫は撤去させてもらった。もしまた必要なら、棚の上の腕輪に気を流してくれ。じゃあの。二度目の生をしつかり謳歌してくれ。』

と書いてあつた。あの神は……でも、生前の知識も合わさつて武器の形と名前はもう完全に一致するので、能力で出せる。一応、保険としてその腕輪は持つておくか……

手紙の確認を終えた俺は、部屋の棚を見た。そこには、だいぶ前からあつたかのように青い腕輪が置いてあつた。

「とりあえず着けるか。」

青い腕輪を手に取り右腕に着ける。着けていても違和感がない分、さすが神の贈り物だ。

それはそれとして、荷物どうしようか……そう思っていると、急に転生の時間聞いた声

聞こえてきた。

(久しぶりじゃのう。儂じゃ。)

(この声…神か…)

このセリフ、実は一回言ってみたかった。

(そうじゃ。しかし、驚かないんじやな。)

(この都市で暮らしてる間に超技術なんかいくらでもみてきたからな。)

都の技術にはいつも驚かされてばかりだった。会議に参加するようになってからもらった端末で永琳さんに連絡しようとしたら、端末から某カードゲームのアニメの如くソ○ツドビ○ヨンみたいなやつで永琳さんが出てきた時が一番ビビった。

(ほう、月に引越しか。なかなか面白いこともあるもんじや。)

(面白いつて…)

(お主、別の世界に引越してるんじやぞ?)

(そりやそうだけどさ…)

転生つて考え方によっては確かに引越したな。

(月に行くときの荷物について悩んでおるのか?)

(そうだよ。あんな荷物になるとは思ってたんだよ。)

(なるほどのう。なら、その辺は儂が何とかしておこう。)

(できんのか?)

(農に任せよ。)

(わかった。)

これで、不安だが荷物の問題は何とかなった。

(ところで、この交信つてどうやったら解除できるんだ?)

(必要ないとお互いが思えば勝手に切れる。)

(そうか。)

何ともテキトーな感じである。

(じゃあ今回はもういいかの。)

(そうだな。)

(じゃあの。)

こうして、神との交信が途絶えた。

「さて、荷物の問題もどうにかなったし、外回りでも行くか。」

荷物の問題が思ったより早く終わり、時間が余ってしまったのである。なので、暇つぶしついでに軽く仕事をできればいいな、なんて思ってる。

「そうと決まれば準備するか。」

外に出るため準備をする。

「秘封倶楽部はどうなったんだろう…」

俺が生前入っていたサークルだ。オカルトに興味のある宇佐美蓮子とマエリベリー・ハーンの二人でやっていて、俺と竜也も何回か一緒に活動させてもらっていた。

「なんで転生の時、思い出せなかったんだろう?」

なぜ今になって思い出すのが疑問だが、思い出せないよりはマシだろう。じゃなくて、なんであの瞬間に思い出せなかったんだろう?

（それは、転生の時は他人についての記憶が薄くなるからのう。）

（そうなのか。）

神がいきなり交信をONにした。

（転生の時に他人についての記憶を持っているのはとても珍しくての。）

（あんたは俺以外の人間を転生させたことってあるのか?）

少し気になったので聞いてみる。

（もちろんあるぞい。）

（そーなのかー）

（もう少し反応してくれんかのう…）

（いや、半分予想がついてたから）

（嘘でも驚いてほしかった…）

(この世界にあんたが送ったのは何人だ?)

これは聞いておかないとあとで苦労する。

(他の奴はおらんよ。この世界では今はお主だけじゃ。)

(何…だと…)

(これで驚くのか…)

(今はってことは後で何人か来るのか?)

(お主…転生の前に自分で言ったことを忘れておるのか?)

(竜也か)

(その通りじゃ)

(他は?)

(他は特にないのう。)

(ないのか…)

(用はそれだけかの?)

(おう。じゃあな。)

再び神との交信を切って準備を再開する。それにしても、転生の時には他人についての記憶ってなくなるのか…なんかそれって寂しいな…

「考えてたって仕方ない。過ぎたことは戻ってこないんだから。」

準備が終わり、そう呟いて外に向かった。

「元気にしてるといいな…」

小さく呟いて外に出た。

「このことももう少しでお別れか…」

そんなことを口に出してしまう。月に移住したらもうここには戻れないだろう。俺だけが戻れたとしても、この風景は見れないだろう。町の人が買い物をしていたり、甘味処のようなところで笑い話をしながら甘味を食べていたりという日常の風景が見れるのもあと数日なのだ。

「さて、行きますか…」

あと何回できるか分からない外回りに出発した。

第10話

あの後、外回りに行つて帰つてきてから数ヶ月が過ぎ、計画の決行日が刻一刻と近づいてきていた。

「そろそろか……」

そう思いながら街に出る。すると、ルーミアが来たときと同じような警報が聞こえてきた。

「またこれか……そろそろ決行日なんだから勘弁してほしいぜ……」

もう何回目になるか分からない警報を聞きながら都の門に向かう。あんまり妖怪が来すぎると月移住計画に支障をきたすから、そろそろ落ち着いてほしいんだけど……。

「あら、大変そうね。毎日毎日妖怪の対処で。」

永琳さんがこつちに来てそう話しかけてきた。

「確かに大変ですよ。もう何日連続かわかんなくなつてきてる位ですから。」

「そうね……月移住計画も近いのにこれだけ来られたら計画も……。」

「計画のときの防衛ならお任せください。妖怪一匹通しませんから。」

「それは分かつてるわ。でも、ここまで頻繁に来られると人々が恐れてしまうわ。」

「そうなんですよね…。」

二人して少し愚痴をこぼしてしまう。この人たちの肝っ玉の小ささは結構なものである。妖怪一匹侵入してきただけでも大騒ぎになるレベルである。一般人は仕方ないが上層部が我先に逃げようとするのはどうかと思う。おかげで俺の仕事が増えるのだ。まあ、避難誘導は全部部下に任せているのだが。

「上層部がこれに対してどんな政策を行うのかしらね。」

「そうですね…。」

上層部の勝手に移住の日が変更になる可能性もあるので非常に不安である。

「計画については私が何とかするわ。あなたは引き続き妖怪の撃退をお願いするわね。」

「もちろんです。」

「じゃあ、今回もよろしくね。」

「では、行ってきます。」

会話を終え、撃退するためにいつもの戦闘域に向かう。ちよつと会話に時間をとってしまった気がするので急いで向かう。

「やっと着いたか…。」

全力で走って戦闘を行っている門の前に来た。

「少し遅かったですな。臨人殿。」

「すまん。」

「まあ、これだけ絶えず襲撃が来ては一日ぐらい遅れる日があるうな。」

「俺としたことがな…。」

「やっぱ遅れてたか…」

「後は俺に任せろ。」

「では、私はいつも通り離脱させていただきますぞ。」

「ああ。後は任せろ。」

遅れたことを突っ込まれつつ、先に戦っていた奴らを離脱させる。

「さて…行つたか…」

味方が全員離脱したことを確認して、妖怪の勢力の確認をする。

「うわ…どれも強くなさそうだな…」

「どいつもこいつも弱そうだ。最近は何の骨のある妖怪が少ない。最近の妖怪は集団であるが、一体一体が弱い。」

「じゃあ、やりますか。」

「いつも通り小さく呟く。」

（出でよ！鉄騎尖！）

俺は標準的な柄だが穂先が三段構えのようになってる槍を出す。

「さあ、かかってきやがれ！」

大声で啖呵を切ると、一斉に妖怪が俺に向かってきた。なんとも単純な…妖怪の一匹が俺を殺そうと腕を伸ばす。

「ふんっ！」

伸びてきた腕を躲し、穂先で突き刺す。突き刺した直後に石突きを利用して死体を突き飛ばす。その後、周りの妖怪を吹き飛ばすように一回転しながら槍で払う。払った直後も油断せず片手で槍を振るう。

「はっ！せやっ！」

迫ってくる妖怪を何体も殺し続ける。久々に槍を使ったが、やっぱり槍の方が戦っていて楽しい。それに、大勢の妖怪が一気に来ても対処しやすい。

「やっぱり槍の方がいいな…」

小さく呟く。転生前から遊びでよく槍を使っていたがやっぱりしつくり来る。そんなことを考えていたら妖怪の殲滅が完了したようだ。

「ん？もう終わりか。」

少し名残惜しいな、と思いつつ構えを解く。すると奥のほうからルーミアが現れた。

「お見事ね。前会ったときより強くなってるんじゃないかしら。」

「ルーミアか。何だ？お前も襲撃に来たのか？」

「そうじゃないから安心して頂戴。」

「そうか。」

襲撃に来たわけじゃないらしい。

「あなた、今なんで妖怪が連日都を攻めてるか知りたくない？」

「知ってるのか？」

「ええ。でも簡単に教えるわけにはいかないわ。」

「教えてくれりや楽なんだが…」

「じゃあ私と戦って頂戴。」

「何故？」

ルーミアが戦闘を挑んできた。何故だ？お互いにメリットは無いぞ？

「リベンジよ。」

「面倒な…」

「その余裕、無くさせてあげるわ。」

「やるしかないか…」

向かってくるルーミアを迎え撃つために鉄騎尖を構え、突っ込んだ。

第11話

俺だ。臨人だ。絶賛ルーミアと戦闘中だ。

「やあああああ！」

ルーミアが闇の剣を両手に持ち、突撃してくる。

「うらああああ！」

それに対して鉄騎尖を構えて突っ込む。槍の届く範囲になったら、一撃を狙い鋭い突きを繰り出す。ルーミアは楽々躲して俺を振り払うように剣を横に払う。俺はそれに対して出していた槍を引いて剣を阻む。

「やるわね……」

ルーミアが何か言っているが、無視して槍を突き立て、それを中心に回転蹴りを繰り出す。ルーミアはそれを飛んで躲し、後頭部を狙って剣を突き出してきた。

「危ねえ！」

間一髪で避けて突き立てていた槍を抜いて剣を弾く。それを読んでいたかのように、ルーミアはもう片方の腕に持っている剣をこっちに向けて振り下ろしてくる。それを槍の石突きを使って弾く。

「弾いてばつかじや勝てないわよ?」

「うるせえ…なつ…と」

前回に比べてとんでもなく強くなっている。

「ちよつと本気で行くか…」

少し危なくなってきたので、今までつかつてなかつた連続技に手を伸ばす。

「行くぜ? 気を抜くなよ?」

「いいからかかつてきなさいよ。」

ここからは一気に決めさせてもらう!

「オラオラア!」

槍の穂先で斬るように払ってからその勢いを利用して突きに続けて、石突きを使つて打ち上げるように殴りつけ、上にある石突きを落とすように突き出しその勢いのまま穂先を振り下ろす。振り下ろした後、少し穂先を上上げるように突く。

「くつ…やるわね…」

ルーミアはギリギリで防いでいたが、連続で来る攻撃の対応が厳しくなってきたのか、幾つか傷ができる。

「まだまだあ!」

「くつ…」

槍を上に向けて飛び上がり、それを取って叩き付けるように振り下ろし、着地と同時に槍を少し前方に突き立て、槍のしなりを利用して後ろに回る。

「かかったわね…」

「何だと？」

後ろに回った瞬間、ルーミアの背中から闇の翼が出てくる。間一髪で避けたが少し左腕が触れてしまった。最初から出してなかったのを忘れてた…

「くそっ…」

「ふふっ、触れたわね？」

闇の翼に触れただけでえらそうに…

「何だ…腕が…」

「これでしばらく腕は使えないわね…」

どうやら、あの翼には動きを封じる力があるらしい。

「さて、まだ戦えるというのかしら？」

「当然だ。」

片腕が封じられたぐらいで戦えなくなるわけが無い。鉄騎尖を消し、

(出てこい！ 暁！)

そう念じると、片腕で扱えるような一本の刀が出てくる。右腕でそれを持ち、鞘から

出し、鞘を落としルーミアに向ける。

「槍はもういいのね。」

「片手じゃ使えないからな。」

ルーミアの問いかけに答え、再びルーミアと戦う。片手が使えない分、さつきまでよりだいぶ苦戦させられる。

「これで終わりにしようかしら？ 『宵闇演舞』！」

ルーミアが剣舞を舞うように近づいてきて、一瞬の隙もない連続攻撃を繰り出してきた。右へ左へと翻弄される。

「もう厳しいんじゃないかしら？」

「何言ってるんだか……」

少し見栄を張る。実際のところを言うと結構キツイ。もうこれ以上はヤバイかな…と思っていると、余裕を持ちすぎたのかルーミアに一瞬だけ隙ができた。

「そこだっ！ 『帰燕』！」

一瞬の隙を突き、自慢の剣技『帰燕』を両手の剣に向けてお見舞いする。

「きゃっー！」

ルーミアの悲鳴と共に両手に持っていた剣が吹き飛ぶ。それを見逃さず、すぐにルーミアに接近し、前に戦ったときと同じように剣先を突きつける。

「くっ…」

ルーミアが悔しそうに小さく声を漏らす。

「勝負あり…だな。」

「そうね…」

危なかった…あの一瞬の隙が無かったらまだ続いてただろうな…

「私の負けね…いいわ。私の知ってることを教えてあげるわ。」

「やけにすんなり教えるんだな…」

「他の妖怪がどうなろうと知ったこと無いもの。」

「良いのかそれ…」

「私は強い奴と戦えて、人間を食べられればそれで良いもの。」

「そういうもんなのか…」

ルーミアは他の奴を気にしないタイプらしい。

「実は…」

「なっ…」

俺はルーミアから聞かされた真実に度肝を抜かされた。

第12話

俺はルーミアと戦った後、妖怪が何故連日都を攻めていたのかを聞いていた。

「実は、私達は人間の月移住計画を知ってるの。」

「何だと!？」

なんてこつたい…計画は知られてたのかよ…

「私が言ったわけじゃないんだけど、どこからか情報が入ってきたのよね…」

「そうか。」

ルーミアじゃない…ということは誰だ？都に近づく奴はルーミア以外は知性が無い。

それに、襲ってきた奴は皆殺しにしてるから、ルーミア以外には情報はいかないはずだが…

「都に裏切り者が…」

「それは無いと思うわ。あなたたちの誰かが裏切ったら私に情報を伝えて都を滅ぼしてるはずよ。」

「それもそうだな…」

もし俺が裏切り者だったら、俺が外回りに出ている時間を教えてルーミアを都に向か

わせる。俺がいたとしても、もっと戦略的に攻めてくるはずだ。

「まあ、用心しておきなさい。最近、魔界のほうも騒がしいらしいね。」

「魔界？」

魔界？知らないな…

「魔界については私も詳しくは知らないわ。でも、こつちの世界への進出を考えてるらしいわ。」

「へえ…」

話が多少ずれたが、いい情報を聞いた。しかし、魔界か…警戒しといた方が良くないかな…

「私から言えるのはこれだけね。せいぜい生き残って私を愉しませて頂戴。」

そっくり残してルーミアは去っていった。

「俺も帰るか…」

帰ろうとすると、ルーミアが戻ってきた。

「ん？もう言う事はなかったんじゃないのか？」

「言い忘れた事が二つあったわ。一つ目はあなたたちの計画？の実行日に大量の妖怪が攻め込むわ。対策しておく事ね。二つ目は、私はその時参加しないわ。」

「そんなこと言って良いのか？」

「いいのよ。私も愉しませてくれる人を失うわけにはいかないから。」
「そうか。」

不思議なものだ。妖怪なのに妖怪の有利な状況を崩すなんて…

「今度こそ言う事は全部言ったわ。じゃあね。」

さつきと違い、決め台詞（？）は言わずにさつて行つた。

「今度こそ、帰りますか…」

俺は、人間にとつての不利な情報を持って都に帰つた。

次の日、俺はルーミアから聞いたことを報告するため上層部の人間に会いに行つた。

「失礼します。」

俺はそう言つてから中に入る。

「君か…何か用かい？」

中にいた俺の同期が声をかける。正直こいつは苦手だ。

「急いで会議を開いてくれ。」

今回はさすがにヤバイ。

「どうしてだい？君が会議なんて…」

「どうしてもなにも、ちよつとマズイことになった。」

「分かりましたよ。すぐ手配します。」

奴はそう言つて上層部のいる部屋の奥に入つていった。

そして：

俺は少ししてからあの会議場の前に来ていた。

(俺が自分から進んでここに来る羽目になるとは…)

「珍しいですね。会議に消極的なあなたが会議を開くなんて。」

会議場に入る直前、永琳さんがそう声をかけてきた。俺からしたら何も問題ないのだが、ほかの人にとってはこれは一大事だ。

「少し厄介な事になりました…」

「何があつたのですか？」

「詳しくは会議で言います。」

永琳さんの問いに軽く答えて、会議場に入つていった。

会議場に入り、少ししてから会議が始まった。

「今回集まつてもらつたのは、臨人殿から重大事項があるという事で集まつてもらつた。」

進行役の人が皆に向けて言った。

「重大事項？」

上層部の人間が反応する。

「それについては俺から説明します。」

俺はすぐに伝えないとヤバイと思い、突然立ち上がる。

「臨人殿が…自分から…」

上層部の人間は驚いている。確かに、俺から発言する事はほとんど無いからな…

「これから言う事は、月移住計画にも関係しています。」

「計画に関係しているだと…」

「何かあったのか…」

月移住計画と言っただけで雰囲気が一変する。小声で話すものも現れる。

「静粛に!!!」

進行役の人が浮き足立つ人間を静める。すると、一気に会場が静かになった。

「臨人殿。」

進行役の人が俺に詳細を話すように促す。

「えー、今回皆さんを集めたのは、妖怪の侵攻についてです。」

『妖怪』と聞いただけでまた騒ぎ始める。俺はそれを気にせず話を続ける。

「月移住計画の情報が妖怪側に漏れたらしい。そのせいで、現在のように入侵が激しくなっているようです。また、妖怪は移住計画の決行日も知っているようで、その日に総戦力でせめて来るようです。」

俺が大まかな内容を伝えると、騒ぎが大きくなった。

「心配ありません。」

騒ぎの中、凜とした声が響く。この声…

「妖怪の対策なら組んでおきました。」

会議前に会った同期が声を上げる。

「おお、聞かせてもらおう。」

上層部の人間が安心したように聞こうとする。

「分かりました。では…」

そういうと、あいつは妖怪に対する策をいくつも披露する。妖怪がどこに来たらどう迎え撃つか、ロケットをどう守ればいいかを完璧に解説していく。

「…以上です。」

数十分ぐらいしてそいつの説明が終わった。終わった後、そいつは進行役や上層部を見ずに、俺のほうを向き直り、自慢するような顔を向け、「どうでしょう？ 大将さん？」と言ってきた。

（なんだ…？）

奴の行動を不審に思ったが、俺は「まあ、良いんじゃないか？」と言っておいた。すると、上層部の人間が口々に安心の言葉を口にする。

「ほかに対策のあるものはいるか？」

進行役の人が全員に聞く。ほかに誰も出なかった。

「では、これにて終了とする。解散！」

進行役の人が会議を終わらせたたん、皆が一斉に退出する。皆が退出する中、対策を話していた奴が俺にそばに来て、すれ違いざまにこう言った。

「成功すれば良いですねえ。移住計画……」

そういった後、あいつはどこかに行ってしまった。

「何だったんだ……まあいいや。」

気にする必要も無いだろう。

「さて……帰るか……」

そう呟き、帰ろうとすると永琳さんがこっちに来た。

「本当に大丈夫？あの策、不自然な部分もありましたが……」

そう永琳さんに言われた。確かに、完全とはいえない。でも、ロケットの周りに人員を配置するのも、正面を俺に任せるのも戦力を考えれば当然の事だ。

「大丈夫でしょう。あの対策も不自然とはいえ、当然といえば当然のやりかたでしょう。」

ロケットを守る事が第一目標だし、正面以外に俺を配置すれば戦力が傾く恐れがあ

る。

「そう…でも、無理はしないで頂戴。あなたがいなくなると、輝夜様も綿月姉妹も悲しみますので。」

永琳さんは俺の答えに対して、渋々了承し、忠告をしてくる。

(綿月姉妹…ここですその名前が出てくるか…)

俺がこの都に来て、輝夜と会っていたときに知り合った姉妹である。姉が豊姫、妹が依姫という。この姉妹は輝夜と仲がよく、俺ともよく話をしたりして、親交があつた。俺は二人に護身術や学問を教えていた。そのためもあつて、二人とはかなり仲良くなつていた。

(苦しいな…)

いろいろ思うところがあるが、俺はどのような形であれ月に行く事は出来ない(と思う)ので、永琳さんの言葉に答える事が(多分)できない。でも、それを伝えたら永琳さんは俺が月にいけるよう必死で手回しするだろう。それは心苦しいので、吐きたくはないが、嘘を吐く。

「分かりました。無茶は出来る限りしないようにします。」

「その言葉…信じてもいいのよね…」

涙目+涙声で聞いてくるこれほど心配されるのは初めてだ。でも、本当のことは言え

ない。なので、また嘘を吐く。

「大丈夫です。」

「そう、安心したわ。」

そう言つて永琳さんは帰っていった。

「俺も…帰るか…」

苦しい心持のまま、俺も帰った。

第13話

「警告！警告！妖怪の大群が接近中！」

警報がけたたましく鳴り響く。やっぱ来たか…でも、対策は出来ている。俺は都のパノラマがある軍人の部屋で、兵士をあいつの対策に従った配置につけていた。

「臨人様！兵の配置、完了致しました！」

兵士が一人俺に近づいてそう告げる。

「そうか…」

「後は臨人様だけです。」

「分かった。」

そんな会話をした後、今回配給されたインカムをつけつつ席を立ち、自分の配置である門の正面に向かった。

そこには兵士が数人来ていた。

「本当に大丈夫か？」

「いくら臨人殿とはいえ無謀では…」

兵士が数人、俺に話しかける。

「心配すんなって。俺が死ぬと思うか？」

兵士の心配を笑い飛ばすように問いかける。

「いや……」

「そうは思わぬが……」

兵士がなおも心配してくる。

「俺が今まで妖怪退治を繰り返して、都に近づけたか？」

今度は事実を確認するように問いかける。

「たしか……無かったな……」

「無かった筈ですな……」

「だろ？」

問いかけに答える兵士に対して軽めに返す。

「だから、今回も心配すんなって。」

俺は兵士に対して安心させるように話す。

「わかった。死ぬなよ。」

「承知。ですが、生きて帰ってきてきて戴きたいですな。」

兵士は素晴らしい残して都の奥に入った。

「ふう……」

門の前には俺一人が残った。これで俺は自分のやり方が出来る。

「さて、これで……」

俺は一息ついてから服のポケットに入れてあったボタンを取り出し、それを押す。このボタンは都の兵器を起動させるスイッチだ。これ一つで都の兵器が全て起動するって言うんだから驚きだ。

「後は……」

ボタンを押し、自分の後ろの兵器が起動した事を確認する。これで、俺以外の準備が終わった筈だ。

「よし……」

後は俺の準備をすればOKだ。

（橋……一人……来るのは妖怪の大軍……）

心の中で今回の戦いについての情報を繰り返す。

（不安なのかな？）

（いや、そうでもない。）

神が俺に向かって問いかけてくる。

（怖く無いんじゃない。）

俺の答えに感心したように神が語りかける。（心に）

(そうでもないさ。)

(そうかのう…わしが他に送った奴は皆、普段は強気なくせに窮地に立たされると弱気になつとつたからのう…)

(へえ…)

なんとも情けない話である。

(まあ、死なない程度に頑張る事じゃな。)

素晴らしい残すと、神との交信が途絶えた。

「死ぬわけねえだろ…」

いくら妖怪の大軍とはいえ、ルーミアが来ないのだ。ルーミア以外の妖怪はあまり強いのを見かけてないから大丈夫だろう。

「さて、そろそろ武器を構えるか…」

遠くに土煙が上がるのを見て、俺は小さく呟いた。

??? Side

森の奥で、大量の妖怪の前に一人の男が立っていた。その男は小さく呟いた。

「始まつたな…」

男は五千体ぐらいの妖怪の群れがその場を離れたのを見て笑みを浮かべ、残った妖怪に向けて叫んだ。

「者共！開戦だ！」

妖怪の大軍が男の一声で動き出した。

「川神臨人…必ず殺す…！」

先ほどとは違い、憎悪に満ちた表情で忌々しげに呟き、妖怪の向かった方向に歩みを進めた。

??? Side Out

土煙と共に妖怪が向かってくる音が大きくなってきた。

「やるか…」

戦いが始まる前にもう一度都を見る。もうここに戻ってくる事はないだろう。

（考えてみると寂しいもんだな…）

その考えを振り払い、武器を出す。

（来い！蛇矛！）

橋の上に一人ということ、この武器を出す。ぶつちやけ、この武器以外考えてなかったし。

蛇矛を構えたと同時に妖怪の大軍が目に見えるぐらいまで接近してきた。

「ウオオオオオオオ」

森の木を薙ぎ倒しつつ、妖怪が接近する。その中でも俺に一番近づいていた奴から何

体かずつ切り倒す。その後、蛇矛の本当の持ち主の構えを取り、俺は咆哮を上げる。「さあ、死にたい奴だけかかってきな！」

さあ、開戦だ。

第14話

俺は向かってきた妖怪を何体も切り倒し、戦いを続けていた。強い奴はいないが、い
かんせん数が多い。幸い、都の中には一体も侵入させていない。

「何かおかしいな…」

さつきから、妖怪の動きがおかしい。今回の月移住計画を阻止したいから妖怪は動い
ているって思っていたのに、妖怪たちは都じゃなくて俺に向かっているように見える。
「このままでと月移住計画は成功するぞ？」

妖怪を殺しながら呟く。その呟きの直後に、つけていたインカムから声が聞こえた。

「臨人様！こちら第一部隊！妖怪が来ません！」

「何だと!？」

声が聞こえた瞬間、インカムを起動し答える。

「こちらの兵はどうしましたしょう？」

通話をしている兵士が聞いてくる。こっちはそれどころじゃないっての…

「住民の誘導にまわせ。」

「了解しました。」

妖怪を殺しながらの発言だから、妖怪の断末魔に掻き消されていないか不安だったが大丈夫なようだ。安心していると他の場所からも続々と入ってきた。

「こちら第二部隊、妖怪一匹も見えませんが。」

「そうか。兵を住民の誘導に回せ。」

「了解しました。」

第二部隊のほうにも来ないとは…

「こちら第三部隊…敵影なし…」

「なら、住民の避難誘導を頼む。」

「了解…」

第三部隊まで…ということとは、三部隊分の妖怪がこつちに来てるのか…

「こちら第四部隊。妖怪は来ていない様子。」

「分かった。住民の避難誘導を頼む。」

「了解」

第四部隊まで…これで、都の防衛線が俺一人になった。

(増援呼ぶべきだったかな…)

これで、妖怪軍は全員俺のところに向かっている事になる。

「こちらロケット防衛部隊、妖怪の影も見えませんが。」

「そうか。引き続き警戒頼む。」

「了解しました。」

何か妖怪が俺を殺しに来てるんじゃないかって言うぐらい俺に向かっているらしい。

「ヤバイな……これ……」

いくら俺とはいえ、一对妖怪全体はキツイ。そう考えを巡らせていると、妖怪が何体か戦場から離れたところでこそそそしているのを見つけた。

「何だ……あれ……」

気になったので、妖怪を殺しつつそちらに近づいていった。すると、その妖怪の声が聞こえて、話している内容が聞こえてきた。

「コノタタカイ、カテルトオモウカ？」

「ダイジョウブダロウ。イクラヤツトハイエヒトリダ。」

「ソレニ、アイツモイツテイタダロウ。『ワタシニシタガツテイレバカテル』ト。」

何? 『私に従っていれば勝てる?』それに、俺が一人なことを知っている? そう考えていると、妖怪がこちらに気付いて叫んだ。

「ナゼココニ!？」

「クソツ! ヤルシカナイ!」

「こそこそ話していた二匹が俺に気付き、こちらに襲い掛かってくる。」

「ちっ！これ以上は無理か…」

これ以上の情報は望めなさそうだ。でも、妖怪側に指導者がいる事が分かった。それだけでも好都合だ。

「シネエエエエ！」

「情報くれて、ありがとなっ！」

襲い掛かって着てた奴らを薙ぎ払い、別の奴に向かう。すると、インカムから再び声が聞こえた。

「臨人様！大変です！対策を話していたあの方がいません！」

「何だと!? 本当か!？」

「我等が総力を挙げて探して探したのですが、見つかりませんでした。もしかしたら、臨人様の援護に向かっているかもしれない！」

「それはありえない。俺のほうに来ていないからな。」

「そうですか…こちらでも引き続き捜索を行いますので、そちらもお願いします。」

「わかった。」

あいつがいない…怪しいな…対策の件もある上に、『私に従ってれば勝てる』という言葉も気になるな…

「ナゼダ！アイツノイウコトハウソダッタノカ!？」

「ヤハリニンゲンヲシンジテハイケナカタノダ！」

妖怪の何体かが動揺し叫ぶ。

「まさか…人間って…」

俺が小さく呟いた。すると、妖怪の大軍の奥からあの男が現れた。

「気付いてしまったようですね…」

「お前…」

「私はあなたを殺すために妖怪に身を投じました。」

何故…

「私はあなたを殺せばよかったです。だから、妖怪をこんな無茶な采配で動かしたのです。」

「そんな…じゃあこの采配は…月移住計画の日に攻めたのは…」

聞きたいことがどんどん出てくる。

「この日に都を攻めたのは、あなたを釣りだせると思ったからです。それと、都は傷つかなかったので、あなたを狙うような采配をさせていただきました。」

「じゃあ…」

「もちろん、あなたを妖怪に殺させるためだけの防衛策です。」

「そうだったのか…」

じゃあ、月移住計画は…

「月移住計画は成功させるつもりでした。」

なるほどな…：都は傷つけずに俺を殺そうとしたわけか…

「私はあなたに出世の道を崩された…」

アイツは急に低く呟き始めた。

「あなたがいなければ、私とその席に座っていた…」

「あ…」

「あなたのせいで私の出世の道が途絶えたのです。」

確かに、俺がいなければ別の人間がこの職に就いたかもしれないからだ。

「だから！あなたを殺してから月に行き！私とその席を貰う！」

俺はこの都での生活が誰でも出来るものだと思っていた。でも、並大抵の事では『軍の大將』なんてなれる筈がない。そう思うと、こいつや他の人間に少し申し訳なく思った。

「そうか…」

「行くぞ！川神臨人！」

「良いだろう！『軍の大將』として相手してやる！」

俺が蛇矛を構える前に、奴が光の剣を構えて突っ込んでくる。

「ああああああ！」

「遅い。」

突っ込んでくる勢いを往なし、躲す。

「くそっ！」

「どうした？ 当てられないのか？」

避けた後、蛇矛を構え挑発する。

「うるさいっ！」

奴は挑発にかかり、闇雲に攻めてくる。

（こいつも…必死なんだな…）

ふと考えてしまう。すると、考え事をしていたせいか、奴の攻撃をかわしきれなかったのか、俺の右脇腹に剣が刺さっていた。

「ぐふっ…」

「何故…避けなかったんだ…」

俺だつて何で避けられなかったか分からない。『軍の大將』として相手してたはずが、『一人の人間』として、同情してしまったのかもしれない。

「あなたなら…避けれるだろう…！」

当然だ。ルーミアの攻撃と比べるとあまりにも甘すぎる。速度も威力もルーミアのほうが格段に上だ。

「確かにな…でも…体の動きが鈍っちゃまってな…」

「まさか…手を抜いたのですか…？」

「さあな…」

血を吐きながら答える。死ぬほど痛い。死なないけど。

「そろそろ終わりに…！」

ヒュンツ…

「なッ…」

奴が俺に止めを刺そうとした瞬間、奴の頭を闇が貫いた。

第15話

俺は驚きを隠せなかった。

「グハッ……」

「え……」

奴は倒れた後、息も絶え絶えになりながら俺に話しかけてきた。

「私は……あなたに敵わないのか……実力も……運も……」

「……………」

俺は奴の言葉に答える事ができなかった。そんな俺を嘲笑うように、一陣の風が吹いた。

「何故……あなたは……」ガクッ

言葉を紡ぎ終えることなく奴は息絶えた。その時、インカムから声がした。

「臨人様！ロケットの準備が完了しました。」

「俺は……」

「臨人様!?!どうしたのですか!?!」

「ん?ああああ……悪い。で、どうしたんだ?」

「ロケットの準備が完了致しました！臨人様も避難してください！」

「俺は…ちよつと後片付けがあるから…先に行つててくれ…」

「了解しました！また月で会いましょう！」

「ああ。」

「今地上には臨人様のためのロケットだけが残っています！」

「了解した…ありがとな…」

通信が切れると共に、ロケットが発射した音が聞こえた。

「クソツ！アイツニシタガツタノハヤハリマチガイダツタカ！」

「ソコノニンゲンモロトモアイツモコロシテシマエ！」

計画が破れたと分かった途端、止まっていた妖怪たちが声を上げ、一斉に動き出した。

「ちっ…」

厄介な置き土産を残して逝きやがって…

「あらあら？さすがの貴方もこの妖怪の量は厳しいみたいね。」

「何？」

痛む右脇腹を押さえて残りの妖怪を片付けようとしたら、右のほうから闇のレーザーと共に聞き覚えのある声が聞こえた。

「手助けするわ。雑魚に大きな顔はさせないわ。」

「お前…妖怪サイドじゃないのかよ？」

「私は他の妖怪なんて気にしないって言ったでしょ？」

「そうだったな…」

普通にしているが、会話するのも大分きつくなっている。

「傷が深いようね。」

「ああ…でも、俺がやらねえと…」

「少しでも私に任せて頂戴。その間に、私の居候に治させるわ。」

「良いのか？」

「ええ。それに、その居候は貴方と縁が深い人物かもしれないのよ。」

「俺と…縁のある…」

縁のある人物？

「さて、私を怒らせた報い…受けてもらいましょうか！」

そう言つてルーミアは妖怪の群れに突っ込んでいった。

「グアアア！ナゼルーミアガ…」

「クソツツ！ウラギツタノカ!？」

ルーミアが敵を次々に斬り倒す。

「ちよつと……ルーミア……早すぎるって……」

もしルーミアに殺し漏れがあった場合のために警戒を強めているとこれまた聞き覚えのある声と共に、銀色の髪以外は見覚えのある男がこつちに向かってきた。

「え……」

おい……嘘だろ……あれは……まさか……

「はあ……はあ……やつと追いついた……」

そいつはこつちに気付いていないのか、ルーミアに追いついた事で安心しているようだ。だが、こつちはそれどころじゃない。何故こいつがここにいるのか、そもそもこいつは俺の知ってるアイツなのかなど、さまざまな事で混乱している。

「竜也！そこにいる人間の傷を消しなさい！」

「わ、わかった。」

強い語気でルーミアが指示を出す。竜也……か……

「ちよつと失礼。」

そう言つて竜也と呼ばれた人間……いや、竜也が俺に右脇腹に手を添えた。

「ほいつ……と、これでよし。」

そう言つて竜也は手をどけた。俺の右脇腹を見ると、傷と痛みが綺麗さっぱりなくなっていた。

「サンキュー。竜也。」

「え…ああ。」

いつもの調子で礼を言う。竜也はいきなり起きた事に動揺しながら返す。仕方ないか…初対面の人に名前を呼び捨てにされた上に、知り合いみたく振舞われたんだから…（初対面じゃないけど）

「さてルーミア、後は任せな。」

「何を言ってるのかしら？怪我人に任せるわけ無いでしょう？」

「しやあない。なら、勝手にやらせてもらうぜ？」

「死んでも知らないわよ？」

「大丈夫だって。」

傷が直ったあと、戦闘に復帰する。

「おらあつー！」

戦闘に復帰した後、近くの妖怪を手当たり次第に薙ぎ払う。殺している間に、都からは遠ざかっていっていたが、気にする事もできなかった。

「やあああ！」

ルーミアのほうから声が聞こえる。あつちも妖怪を殺してまわってるんだろう。

「はあ…荒事は好きじゃないんだけど…」

生前聞いていた竜也の声が聞こえる。戦えるのか？

「喰らえっ！『フレイルムライン』！」

竜也がそう唱えると、遠くのほうの妖怪の足元から炎が吹き出てきた。

「マジか…」

竜也…魔法使いになったんだったな…

こうして、三人で数時間ぐらい妖怪を殲滅していた。

「これでっ！」

「終わりよっ！」

俺のほうに来ていた妖怪を全滅させると同時に、ルーミアのほうも、殲滅完了したよ
うだ。

「お疲れ。」

「お疲れ様。」

「二人とも、お疲れ様です。」

俺たちは森だった場所で殲滅が完了した事を確認していた。

「さて竜也、貴方が探していた人物が今目の前にいるわよ。」

「え…」

竜也が驚いたように固まっている。

「おいルーミア…もうちよつと隠してたほうが良かったんじゃない？」

「嫌よ。面倒くさいもの。」

しまった…ルーミアはこういう奴だった…

「まさか…お前が…」

「ハア…バレちゃあしやあねえな…」

さすがに混乱するよなあ…探してた奴が知らないうちに見つかるんだから。

「久しぶりだな。竜也。」

「臨人…本当にあの臨人なのか…？」

…こうして、俺たちは再会した。

第16話

俺と竜也はしばらく再会を喜び合っていた。だが、ルーミアは難しい表情をしていた。

「ルーミア? どうしたんだ?」

「この気配…妖怪じゃないわね…」

「何だと!？」

妖怪じゃない気配…

「まさか…」

「嘘でしょう…」

「何何?!? 何なのさ?!？」

俺とルーミアは予想がつき始めていた。竜也は何も分からないらしく、パニックになっっている。

「魔界の悪魔!？」

「魔界って何さ?」

予想した結果を言うとき、二人で声がそろってしまった。竜也は魔界を知らないらし

く、俺たちに聞いてくる。

「ルーミア…教えとけよ…」

「私も存在は知ってたけど、詳しい事は知らないって言ったでしょ！」

「名前だけでもだな…」

ルーミアとコントのような会話をする。

「仕方ないわね…」

ルーミアが説明を始める。

「魔界って言うのは、大雑把に言うところの世界よりも危険な妖怪や神が住んでいる所よ。」

「へえ〜」

ルーミアの説明に竜也は理解できたか分からないような返事をする。

「それが来るってことは…」

「十中八九侵略目的でしょうね…」

俺たちは小さな声で話す。すると、都のほうで爆発音がした。

「しまった!!」

音に反応して都のほうを向いたら、都があつたはずのところには、何もかもがなくなっていた。

「あらあら〜こっちの世界は物騒ね〜」

都だった場所から女の声が聞こえた。声のした方を見ると、六枚三対の翼を持った女の人がいた。

「あれは…」

ルーミアが青ざめた顔で見ている。

「あら、ルーミアちゃんじゃない。久しぶりね〜」

その女の人はこっちに近づいてくる。

「あら〜ルーミアちゃんったら、こんないい男二人侍らせて、羨ましいわ〜」

その人はルーミアに向かって軽い口調で話しかけていた。

「嘘だろ…都が…」

俺はというと、一瞬で都がなくなっていた事に対して放心状態になっていた。

「神綺…紛らわしいわよ…魔界の悪魔かと思っただじゃない…っていうか、こいつらは侍らせてるわけじゃないわよ!」

ルーミアは赤くなりながら反論する。

「あらら、物は言いようよ。それに、銀髪の子も久しぶりね。」

「お、お久しぶりです。」

神綺がルーミアを少しからかい、竜也に声をかける。声をかけられた竜也は少しオド

オドしながら挨拶する。

「そういえば神綺…あなた、何しに来たの？」

ルーミアは気にせず神綺に要件を聞く。

「今日はルーミアちゃんに会いに来たのよ」

「そうなの…」

「それはそうと、銀髪の子は前もいたけど、貴方のお気に入りかしら？」

「ばつ…そんなんじゃないわよ！」

ルーミアは神綺にからかわれ、少し顔を赤くしながら答える。

「あらら、結構一緒にいるみたいだから、お気に入りかと思っただけ…」

「違うわよ！」

「そう…なら、私が貰っちゃってもいいかしら？」

神綺はルーミアをからかうように続ける。

「それは…困るわね…」

ルーミアは急にしおらしくなり、小声になる。

「あらあら、いい反応じゃない♪」

神綺は楽しそうにルーミアを見ている。

「そういえば、銀髪の子…竜也と言ったかしら？」

神綺の興味がルーミアから竜也に移る。

「あなた、何でルーミアと一緒に入れたのかしら？」

神綺は竜也に質問する。

「いえ、料理を作ったら気に入られて……」

「あら、やっぱりお気に入りじゃない。」

竜也が質問に答えると、再びルーミアをからかう。

「だから違うってば！」

ルーミアが怒ったように答える。

「ルーミアが人間を側におくことってないのよ。」

「そうなんですか!？」

「そうよく。」

神綺はルーミアを無視して竜也と話をする。

「ルーミアから貴方をとる事は難しそうですね……」

神綺がわざとらしく呟く。それに対して、ルーミアが本気で怒ったような気配を出す。

「なんてね♪冗談よ。」

神綺はルーミアが怒った事を見計らい冗談だと明かす。

「さて、私はもう帰るわね〜」

神綺と呼ばれた人が帰ろうとしている。

「待ってくれ!」

俺は、我に返ると同時に神綺に質問をぶつけようとして、神綺を呼び止めた。

「何かしら? 私のところに来たいの?」

「そうじゃない。都に…都に何があったんだ!?!」

若干怒りと焦りの混じった声で聞く。この人に怒りをぶつけても仕方がないのだがな

…

「都? ああ、あの町のような場所なら、『人間の気配なし。月移住計画成功を確認。自爆します。』とかいって、爆発に巻き込まれて無くなったわよ?」

「そう…か…」

「それだけかしら?」

「ああ。」

「そう、じゃあまたね。」

そう言い残すと、神綺はどこかに飛んでいってしまった。

「都の事は…気の毒だったわね…」

「仕方ないさ…起きてしまったことは戻らないから…」

「臨人は…強いよね…」

「強くないさ…」

ルーミアが慰めてくれた。妖怪に慰められるって…

「まあ、仕方ない事なのかも…」

都がなくなつたのは悔しいが、もう戻らない。それに、都があつたとしても、人がいないのだ。それに、月移住計画の後の兵器の自爆は噂になつてたし。本当にやるとは思つてなかつたけど…

「さて、切り替えよう！」

無理やり気分を切り替える。

「ふう…いつもの臨人に戻って安心したわ。じゃあ、私はもう行くわね。」

「待った！」

ルーミアが帰ろうとしているところに竜也が待ったをかけた。

「ルーミアも俺たちと一緒に行動しようぜ。」

竜也がルーミアに対して提案する。

「竜也は臨人と行動する気満々なのね…」

「そりゃあ親友だしな！」

ルーミアが呆れたように呟くと、竜也は俺の肩に腕を寄せ、『当然だろ』とでも言うよ

うに答える。

「どうしようかしら…」

ルーミアは迷っている。

「俺たちだけだと華が無いんだよなー」

「別に良いじゃない…」

「ルーミアが来てくれれば今までよりいい物食べれるのになー」

「くっ…」

あれ…ルーミアさん、まさか揺れてる？

「臨人の料理は俺より美味いんだよなー」

「うう…」

ルーミアがうめき声に似た声を出す。

「ちよつと待て。まさか、ルーミアがある時から都に來なかつたのって…」

「ああ、それか。たぶん俺のせいだな。」

マジかよ！都に來なかつたのって、竜也の飯を食つてたからなのか!?

「ルーミアが人間を食べるって言うから、やめさせようと思つて臨人から教わつたやり方で料理を作つたら、急に人を食べなくなつたんだ。」

「そうだったの!？」

「だってえ…竜也の作るご飯おいしいんだもん…」

「えー…」

何で俺はルーミアと戦ってたんだ…もつと簡単な対処法があったのに…

「で、どうするんだ？ルーミア？」

竜也が、最終確認するように聞く。

「一緒に行かせて貰うわ。」

「よっしゃー！」

ルーミアが折れた。竜也は結構嬉しそうだ。って、これって俺の負担が増えたって事

？

(そういうことじゃな)

神が交信で肯定する。マジか…まあでも、料理好きだから良いんだけどね。

「これから改めてよろしく。竜也、臨人。」

「お、おう」

こんな感じで新たな(?)仲間が増えた。

第17話

俺たちはこれからどうするかを決めていた。

「これからどうする?」

「そうねえ…都もなくなっちゃったし、ぶらり旅でもしましょうか。」

ルーミアが提案する。

「それも良いかもな…」

小さく答える。

「神綺さんの所に行ってみないか?」

竜也が言う。

「え?神綺のところ?」

ルーミアが確認するように返す。

「ああ。今の俺たちが頼れる人ってあの人ぐらいだろ?」

竜也が俺たちに確認を取る。

「そうだな…」

俺は確かにと思い、肯定する。

「ほんとに行くの?」

ルーミアが素つ頓狂な声を上げる。

「あれ? さつきまで仲良く喋ってなかった?」

竜也が軽く聞く。

「え? ええ、まあ…」

ルーミアはばつが悪そうにしている。

「どうした? なんかあるのか?」

俺も気になったので、ルーミアに聞く。

「い、いや、別に、何とも無いといえれば何とも無いのよ?」

無理して隠すようにルーミアが答える。

「ただ…」

「ただ?」

ルーミアが何か言おうとする。

「あの子、すぐ私に『男出来たく?』とか『もうそろそろ恋だの愛だの考えても良いんじゃない?』とか言ってきて、苦手なのよね…」

ああ、さつきも『いい男二人侍らせて…』とか言ってたな…

「私、戦い以外にはあまり興味ないんだけど、あの子は女らしくしろってうるさいのよね

…

「ルーミアは戦う事と食べる事以外は興味ないもんな。」

ルーミアが喋り終えた後、竜也が茶化すように付け加えた。

「う、うるさいわね！良いじゃない！楽しく生きられれば！」

ルーミアが照れ隠しをするように言い返す。

「まあまあ、落ち着け。」

俺はルーミアを止めるため、声をかける。

「とりあえず、俺らが他に知ってる人もいないし、神綺さんも悪い人ではないしな。」

竜也が確認するように情報を整理する。

「そうだな。」

ルーミアを止めた後、俺も同意する。

「だったら、頼ったほうが良さげじゃね？」

竜也が勧めてくる。

「ちよつと待って。神綺の居場所を知ってるの？」

ルーミアが聞く。

「知らね。でも、魔界っぽい場所なら知ってるぜ？」

竜也が答える。

「魔界の場所ですって!？」

ルーミアが驚いたように聞く。俺も驚きだ。俺がこの世界に来てから結構経つが、魔界のような場所なんて見当たらなかったからだ。

「いつ知ったのよ!？」

ルーミアが驚きのこもった声で竜也に聞く。

「この前神綺さんに会ったときに教えてもらった。」

「ええ!？」

竜也が説明すると、ルーミアが更に驚いた。

「だからさ、行ってみようぜ。もし神綺さんに会えなかったらぶらり旅でもすればいいしや。」

竜也がさらに押してくる。

「そうだな。」

俺はその意見に合意する。

「仕方ないわね…」

ルーミアも仕方なしに同意する。

「じゃあ行こうぜ。」

「道案内は任せませ。」

「任された。」

(懐かしいな…この感じ…)

(ほう…お主はこういう風に生きてきたんじゃないな。)

(いつもはもつと酷いけどな。)

懐かしんでいると神が語りかけてきた。それを軽くあしらい、俺たちは魔界に向かった。

第18話

俺たちは都だった場所を離れ、魔界に向かおうとしていた。

「そういえば臨人は飛べるの?」

ルーミアが発前に聞いてきた。

「ああ。一応な。」

飛べる事を伝える。

「そう。」

ルーミアが了承を返す。

「竜也は?」

俺は竜也に飛べるかどうか聞く。

「竜也なら安心してもらってかまわないわ。私が教えといたから。」

ルーミアが俺に伝える。

「そうなのか。なら良かった。」

俺は皆に「飛ぶぞ」と短く伝え、飛び上がった。

「行くわよ。竜也。」

ルーミアも竜也に声をかけ、俺と同じ高度に飛び上がる。
「ちよ、待ってよ。」

竜也もルーミアに声をかけつつ俺たちと同じ高度に来た。

「さて、道案内頼むぞ。竜也。」

改めて道案内を竜也に頼む。

「オーケー。確か…」

竜也は了承を示し、道を確認するように飛び回る。

「大丈夫か？」

俺は小さく呟く。

「大丈夫よ。」

それに対してルーミアは答えを返す。

「こつちだ。ついてきてくれ。」

竜也がこつちだと俺たちに伝える。

「わかったわ。」

ルーミアは竜也の方に向かう。

「まあ、大丈夫か…」

俺もルーミアに続いて竜也の方に向かった。

数時間後・・・

「……だな。」

竜也がいかにも禍々しい空間の前で止まる。

「これが……」

「……か……」

俺とルーミアは思わず声を漏らす。今までこんな場所があるなんて知らなかった。都の諜報範囲の狭さを思い知った気分だ。

「さて、入るか。」

竜也が軽く言う。

「おい待て。ここに入るのか？」

俺は思わず竜也に聞き返す。

「ああ。これが魔界の入り口だったはずだから、ここからじゃないと入れないぜ？」

竜也が俺に説明する。

「魔界……ねえ……」

ルーミアは魔界に嫌な思い出でもあるのか、俺より入る事をためらっている。

「という事で、さっさと行こうぜ？」

そう言うど竜也は、さっさと入って行ってしまった。

「あ、待ておい！」

竜也が入って行ってしまったので、後を追うように俺も入っていく。

「行くしかないのね……」

ルーミアも俺たちを追うように入った。

俺たちの周りにはさっきまでいたところは違い、枯れ果てた木やボロボロの岩などがある死んだ樹海のような風景が広がっていた。

「酷いな……」

竜也が呟く。

「これが……魔界か……」

俺もつい声を漏らしてしまう。想像以上の魔界の景色に度肝を抜かされる。

「ここが魔界ね……何故か懐かしい気がするわ……」

ルーミアが呟く。

「懐かしい？」

ルーミアの呟きの中に気になる単語があったので聞いてみる。

「ええ。私はここに来た覚えも無いのに、何故か懐かしい感じがするのよね……」

ルーミアが答える。

「へえ…」

俺にはよく分からないので、軽く返す。

「さて、ここにいても仕方ないだろ。奥に進もうぜ。」

竜也が奥に行こうぜと言ってくる。

「そうだな。」

「そうね。」

俺とルーミアはそれに同意して奥に進む。しばらく進むと門が見えた。門の向こうには西洋風の町並みが見えた。門の前にはピンク色の髪をした女の人が立っていた。

「あら、お客さん？珍しい事もあるものね。」

門の前にいる女の人が見るなりそんな事を言ってきた。

「貴女は？」

「あたしはサラ。魔界の門番になる予定の門番よ。」

「どうやらこの人は門番らしい。」

「そういうあなたたちは誰よ？客が来るなんて聞いてないわ。」

門番のサラがこっちに向けて怪しむように話す。

「言っていないからな。客が来るなんて。」

竜也がそれに答える。

「確かにそうね。じゃあ、あなたたちは侵入者ってことで良いの？」

サラは俺たちに確認するように言う。

「そうなるわね…」

ルーミアが小さく呟く。

「何？ 進入者？ まあ良いわ。せいぜい楽しませてほしいわね。」

サラはルーミアの呟きを聞くや否や戦闘態勢にはいる。仕方ないので俺たちは帰ろうとしたが、サラが挑発するように俺たちに対して話しかけてきた。

「どうしたの？ 帰るの？ 面白くないわね。」

「いや、ここ入れないんだったら帰ろうかと思つて…」

それに対して俺はあくまで冷静に対応する。

「私に勝てたら入れてあげても良いよ。最近退屈だから、ちよつとぐらい相手してほしいんだけど…」

サラがそんな提案をする。

「分かったわ。なら、私達の代表が相手をするわ。」

「お、貴女は話の分かる人だね。で、誰が代表なの？」

ルーミアが即行で乗った。

「代表はこいつよ。」

そう言つてルーミアは俺を指差した。

「何で俺？」

俺はルーミアに指名されて、戸惑いながらルーミアに聞いた。

「地上ではあなたが一番強いじゃない？」

ルーミアが当然だというように答えた。

「へえ、地上最強…あなたが川神臨人？」

マジか…魔界(?)にも名前が聞こえてるつて…

「そいつは楽しめそうだね。さて、やる？」

サラが俺に戦うか聞く。

「仕方ない…やらせてもらおう！」

俺は勝負を了承する。

「あら、良いの?言つとくけどあたしは強いよ。」

サラが驚いたように言う。

「ああ。異名があるんならそれにふさわしい生き方しなきゃな。」

「いいわね。そういうの。嫌いじゃないわ。」

サラが俺の言葉に答える。

(来い！小霸王！)

そう念じると、俺の目の前にトンファーが出現する。それを手に取り、回しながら装着する。

「あんたの武器はそれで良いの？」

サラが確認を取ってくる。

「ああ。」

俺は短く答え、トンファーを構えなおす。

「ふーん。じゃあ、始めましょうか。」

「さあ来い！」

こうして、俺とサラの勝負が始まった。

第19話

「はっ！てやっ！」

「ふんっ！このっ！」

俺は今、サラと交戦している。サラが出してくる拳を躲しつつ、隙を見つけて拳やト
ンフアーを叩き付ける。

「なかなかやるわね…」

「君もね…」

サラの言葉に戦いながら答える。まだ喋る余裕があるのか…今の俺の力はルーミア
より少し上ぐらいにしている。

「そらっ！」

トンフアーを逆に持ち、腕を大きく振り払うように動かす。

「きやあっ!?!」

サラはいきなり放たれた大振りの攻撃に怯む。俺はそれを見逃さず、地面を蹴り飛ば
すように走り出してサラに接近する。

「かかったわね…」

「何だと!？」

接近する俺の勢いを往なし、俺の動いている軌道から逸れて後ろに回ってきた。

「隙だらけよ!」

「くっ……!」

後ろから繰り出されたサラの拳をギリギリで躲し、サラの方を向く。

「あれでも駄目なの……」

サラは俺に躲された事に少し落胆しているようだった。

「ならこれでっ……!」

サラは俺に接近し、炎を纏った拳を放ってきた。

「はあ!?!マジかよ!?!」

俺は人の手から炎が出てきた事に驚いてしまい、反応が少し遅れてしまう。

「しまっ……」

『ドスン!』という鈍い音と共に俺の左肩にサラの炎を纏った右手が突き刺さるようにヒットした。

「ぐっ……!」

俺は拳の勢いを利用し、回転してダメージを抑える。炎は弱いものだったらしく、回転している間に消えていた。

「お返しだ！」

回転の勢いのまま、サラに向けて右ストレートを放つ。

「なっ……！」

攻撃を喰らった直後に反撃に出る事を予想していなかったのか、サラの反応が遅れている。

「喰らえっ！」

そこを見逃さずに放たれた俺の拳は見事にサラの体に突き刺さった。

「カハッ……」

サラが咳をするように空気を吐き出す。

「ふう……ふう……」

「マジか……」

幾らルーミアより少し上の力に抑えていたとはいえ、クリーンヒットしたのに気を失わないどころか、立っている事に驚きを隠せない。

「キツイ一撃だったわ……」

サラが小さく呟く。もう立っているのも苦しそうに見える

「おいおい……完全に倒したと思っていたんだが……」

「馬鹿いわないでよ……。魔界の住人は地上の生物とは違って丈夫なのよ……」

サラが俺の言葉に返す。

「それに…あたしは門番よ…？門番は万全な状態で来た侵入者を追い返さなきゃならぬのよ…だから…この程度で倒れるわけ無いじゃない…」

息も絶え絶えになりながらサラが俺に対して説明する。

「そうか…」

「さあ…かかつてきなさい…！」

俺が小さく答えると、サラはまだ戦えると言わんばかりに戦闘体勢に入った。

「門番に苦しんでる場合じゃないんだ。一気に決めさせてもらおう！」

俺はサラに応えるように攻撃の構えをとった。だが、それは意味の無い行動に終わった。

「あら、何してるのかしら？」

「え…」

サラの後ろに見覚えのある人が立っていた。

「神綺様！」

突然の神綺の登場にサラは非常に驚いていた。

「サラったら、熱くなりすぎよ〜。」

「で…ですが…」

神綺は微笑みながらサラをからかっていた。

「サラがあのだを使つた気がしたから、見に来てみたらだいたい無茶してるみたいじゃない。」

「そ…それは…」

「あれは未完成なんだから、あまり使つちや駄目よ。」

神綺がサラにやんわりと注意する。あのだ…未完成だったんだ…通りですぐ消えるわけだ。

「あら、ルーミアちゃんに竜也くんじゃない。それに、あの子のかわいい子まで一緒に。どうしたの？」

神綺がこちらを向き、俺たちに問いかける。いくら名前も言っていないからってかわい子って…

「そういえばあなた、ボロボロじゃないのよ。何があつたのかしら？」

神綺は俺の傷に気がつくのと、意地の悪い笑みを浮かべながら何があつたのか聞いてくる。絶対気付いてるだろ…何があつたか…

「それについては私から説明します。」

サラが神綺の前に出て、説明を始める。

「この方たちはこの町に侵入しようとしていたのです。私は門番として止めようと交戦

していました。」

サラはさつきのことを説明する。

「あらく、そうだったの。サラもただ戦うんじゃないで、私に伝えてくれれば良いのに。そうすれば貴女もこの子もこんなにボロボロになる必要なかったのに。」

「神綺様…無茶です…」

サラの説明を聞き、神綺はかなり無理な事を言う。俺でもサラと同じ事するぞ…

「それはそれとして、三人そろってどうしたのかしら？」

神綺が話を戻す。やっぱりこの人と話しているとペースが乱れるな…

「いや、俺たちが寝泊りするところが無くってな（笑）」

竜也が今の俺たちの状態を一言で説明する。

「そうだったの。なら、私のところに来ない？ちょっと働いてもらうけど、いいかしら？」

神綺が俺たちに問う。

「神綺様、いいんですか？」

サラが神綺に問いかける。確かにそうだよな…来てすぐの、それもさつきまで侵入者だった奴をいきなり町に入れるのは抵抗あるよな…。

「いいのよ。この子達、特にルーミアちゃんは私の友達だもの。」

神綺はサラに対してそう答えた。

「で、どうかしら？三人ともまとめお世話してあげるけど？」
神綺は俺たちに対して、再度問いかけた。

「俺は良いけど。」

竜也は真つ先に了承した。

「私も良いわよ。」

竜也に続き、ルーミアも了承した。

「二人とも大丈夫みたいだし、これからよろしくお願いします。」

二人に続く形で、俺も了承した。

「わかったわー。じゃあ、案内するわ。こっちよう。」

こうして、俺たちは神綺の所に世話になるのだった。

第20話

俺たちは神綺の案内で神綺の家に向かっていた。さつきまでとは違い、綺麗な洋風の街並みが広がっている。

「そういえばさ、」

竜也が急に何かを思い出したように神綺に質問しようとした。

「何かしら〜？ルーミアちゃんの弱点でも教えてほしいの？」

「ちよつと神綺！」

神綺の言葉にルーミアが面白い反応を示す。まあ、他人にいきなり弱点暴露されそうになつたらそんな反応もするか…

「いや、この街つてどうやってここまで綺麗に作つたのかなつて。」

竜也が神綺の返しをスルーしつつ疑問を口にする。

「あら、残念ね。」

「良かった…」

神綺が少し残念そうにしている横でルーミアが安心した声を出す。良かったな。

ルーミア。

「確かに…外の景色と見比べるとあまりにも差が大きすぎる。」

竜也の疑問も頷ける。町の外には枯れはてた植物や何の動物のものかはつきり分からない動物の骨が転がっていたりした。もしここに町を作るならそういったものを撤去したりここまで資材を運んでくる必要がある。それを考えると、相当な労力と時間がかかったのではないだろうか。

「この町を作った時…懐かしいわね…」

神綺が心底懐かしそうに答える。相当昔の話なのだろう。

「この町は私とあの子の二人で作ったのよ。」

「え?…」

「私はほとんど何もしてないけど、あの子が資材を運んでせっせと町をここまで作り上げてくれたのよ。あの子がいなかったらこの町の完成はもっと遅くなってたと思うわ。」

神綺が答える。これだけの町を2人で作り上げたというのか?それはだいぶ凄いと
思うが…

「あの子?…」

竜也が神綺の話に出ていた『あの子』についての質問をする。

「あ、名前を言ってなかったわね。確か…神薙亮っていったわね…」

「へえ〜。」

神綺が竜也の質問に答える。その神薙亮って奴…相当凄い奴なんだろうな…

(神薙…亮…うっ…頭が…) フラツ

その名前について考えようとする、急に頭痛に襲われた。

「おい、大丈夫か?」

竜也に心配される。表には出さないようにしてたんだがな…

「お、おう。」

あまりきつい物でもなかった、大丈夫だと答える。

「あまり無理をしては駄目よ〜。あ、もし辛いならおぶっていつてあげましょうか?」

「いえ、大丈夫です。」

神綺からも心配される。神綺の台詞の半分はしっかりスルーする。

「あらく、残念ねえ。でも、無理そうなら言うのよ。」

神綺が俺に対して言ってくる。

「本当に駄目そうな時はお願いします。」

「任せて頂戴。」

一応、ひどくなった時のために保険はかけておく。神綺もそれに対して答える。

(何だったんださっきの…)

さつきの謎の頭痛について考えつつも、引き続き神綺の家に向かっていった。「もうすぐ着くわ。」

神綺が他の建物より一際大きな建物を指差しながら俺たちに到着を伝える。

「あそこが私の家よ。」

「あれか…」

前住んでいた都の建物にも負けないくらいの大きさの館が見えた。

「さて、入りましようか。」

「おじやましまーす。」

扉の前に来たとたん神綺と竜也は先に入って行ってしまった。

「さて、二人もいらつしや〜い。」

奥から神綺が俺とルーミアを呼ぶ声がある。

「それじゃ、失礼して。おじやまします。」

「ええ。お言葉に甘えさせていただくわ。」

そう言つて俺たちも館の中に入っていった。

こうして、神綺の下での生活が始まったのだ。

第21話

神綺の家に入り、生活するにあたって重要な事を話し合いで決めていた。

「さて、暮らしていく上での役割を決めましょうか。」

神綺がそう切り出す。

「あの…私家事出来ないんだけど…」

ルーミアがそう答える。一人の時どうやって生きてたんだ…？

「役割って言っても、何があるんだ？」

竜也が役割の種類を聞く。

「それは、洗濯とか料理とか。」

神綺が答える。

「この館に神綺以外の住人はいるのか？」

竜也が聞く。

「もちろんいるわよ。夢子ちゃん。」

神綺が竜也の問いに答えて、住人であろう人の名前を呼ぶ。

「お呼びでしょうか？」

呼ばれた人であろう女性が一瞬で神綺の裏に現れる。現れた女性は金髪で、赤を基調としたメイド服に身を包んでいる、いかにも上品な人だった。

「この館でこれから一緒に暮らしていく人たちよ。自己紹介して頂戴。」

神綺が夢子と呼ばれた人に言う。

「皆様始めまして。夢子と申します。私は、神綺様の身の回りのお世話をさせていただいています。客人の皆様でしたね。あまりおもてなしも出来ないかもしれませんが、どうぞゆっくりしていただく下さい。」

夢子と呼ばれた人が自己紹介を済ませる。大分礼儀正しい人のようだ。

「堅いわね。もつと軟らかい自己紹介はできないの？」

神綺が子供のようになんげを言う。

「申し訳ありません。仕事の都合上、どうしてもこれ以上は改善の使用がありません…」

夢子が答える。

「仕方ないわね。」

神綺が応じる。

「ところで夢子ちゃん。この館の人員は足りているかしら？」

神綺が夢子さんに聞く。

「足りているかといえは足りていますが、食材確保班と調理班、それと、掃除班がうまく

「回っていません。」

神綺の問いに夢子さんが答える。

「そう…」

神綺が小さく呟く。

「食材の確保ぐらいなら出来るわよ?」

ルーミアが答えた。

「ですが、食材は生きた獣を捕らえて解体して確保しますよ?出来るのですか?」

夢子さんがルーミアに問う。

「これでも地上では、名の売れた妖怪だったの。そんな事、朝飯前よ。」

ルーミアが余裕を持って答える。

「そうですか。なら、お願いできますか?」

夢子さんが勝手にルーミアに頼む。

「ええ、任せて頂戴。」

ルーミアが答える。こうして、ルーミアの役割は決まった。

「さて、残りは調理班と掃除班だけ…」

神綺が仕切りなおすように言う。

「掃除なら俺に任せてくれ。」

急に竜也が名乗り出た。

「これでも、ルーミアの所で何回も掃除の作業はやったんだ。調理は臨人に任せれば大丈夫だと思うし、俺を掃除班に入れてくれよ。」

竜也が俺に調理班を投げってくる。全く…

「分かりました。ですが、この館は広いですよ？体力は持つんですか？」

夢子さんが竜也に聞く。

「大丈夫だ。ルーミアよりもガサツな奴はいないだろう？」

竜也が大丈夫だと伝えると同時にルーミアを軽くデイスる。

「あんたねえ！」

ルーミアがそれに反応する。

「分かりました。竜也さんは掃除班に配置しましょう。」

夢子さんが二人を無視しつつ、決定する。

「臨人さんですが、調理班でも問題ないですか？」

夢子さんが聞いてくる。

「問題ありません。こう見えても、料理には自信がありますので。」

夢子さんの心配を振り払うように答える。

「分かりました。ですが、テストさせていただきます。今宵の料理を一任してもよろし

いでしょっか?」

夢子さんがテストと称して結構な難題を申し付けてくる。

「それなら、食材は私が獲ってきてもいいかしら?」

夢子さんの発言の直後にルーミアが質問をする。

「ええ。問題はありません。」

夢子さんが答える。

「じゃ、じゃあ、ルーミア。食材は任せた。」

俺は、ルーミアに任せる旨を伝え、次の質問をしようとした。

「では、今宵の夕飯を楽しみにしています。」

俺が質問をする前に夢子さんが退室しようとしたので、俺はそれを制止して、ある質問をしようとする。

「ちよつと良いですか?」

「なんでしょっか?」

「テストのメニューは?」

「メニュー?」

俺が質問をすると、夢子さんは何の事か分からないのか、首を傾げつつ聞き返してくる。

「いや、料理の種類とか、メインの食材とか指定とかってあるかな…って。アハハ…」
俺は気になってた事を聞く。もし、テストのメニューも知らずにやったなんてことがあつたら笑い事じゃすまないからだ。

「特にはありません。選り好み出来るほど料理に種類があるとは思えませんので。」
(あらら…)

夢子さんの答えに少し落胆しながら答える。俺としては、こういう苦労人には好きなものを食べてもらいたかったので、少し悲しくなってしまう。

「好きなものってありますか？」

俺は諦めずに、好きなものを聞いてみる。

「特にはありません。」

夢子さんはきつぱりと答えた。

「そうですか…」

俺はその答えに悲しくなった。

(好きなものくらいあつても良いとは思ってたんだがな…)

さつきと同じように落胆しつつ答える。

「以上ですか？」

夢子さんがこれ以上質問は無いかと聞いてくる。

「はい。」

俺は素直に答えた。

「では、失礼します。」

素晴らしい残して、夢子さんはどこかに行ってしまった。

「あらあら、私の出番はほとんど無かったわね。」

神綺が呟く。確かに神綺の出番は無かったな…

「でもこれで、大体の役割が決まったわね。じゃあ、今宵は楽しみにしてるわよ。」

神綺がまとめると同時にどこかに行ってしまった。

こうして、神綺の下での役割（俺は仮採用だが）が決まった。

第22話

「さて、久々の臨人の料理か。楽しみだ。」

竜也がそう呟く。

「さて、竜也が絶賛する料理。楽しみね……」

竜也の言葉の後にルーミアも期待を寄せてくる。

「任せな。」

少し黒い笑みを浮かべながら二人に答える。（意味は無いけど。）因みに、ちゃんとした場所で料理を出すのが久々で楽しみだったりする。

「ちよつといいかルーミア?」

「何よ。」

ルーミアにある提案をしようとした。

「ちよつと狩りについていってもいいか?」

「いいけど……どうしたのよ?」

俺尾提案に戸惑いながら答える。

「いや、料理人として自分で一回見てみないと気が済まないんだ。」

俺は（一応）料理人としてルーミアの質問に答える。

「食材だったら届いてから見れば良いじゃない。」

ルーミアが俺に質問する。

「いや、自然界から得られるレシピもあるからさ…」

俺はルーミアの質問に答える。きつと、ここでは現代とは違う食材を取れる気がするのでもしつかり調理法を考えないとミスりそうだ。

「レシピ?」

聞きなれない単語だったのかルーミアが聞き直してくる。

「いや、なんでもない。」

（今更だが、）古代に俺たち世代の言葉が知られたらやばいと思ったのでごまかす。

「そう…でも、来たいなら来れば良いじゃない。貴方ならそう簡単にくたばらないでしょう?」

ルーミアが言葉の追求はせずに同行の了承を出す。

「まあね。」

俺はルーミアに答える。

「だったら、早く準備しなさい。狩りに行くわよ。」

ルーミアが催促する。

「じゃ、任せませ。」

素晴らしい残して竜也は神綺の所に行ってしまった。

「私達も早く行きましょう。」

ルーミアに言われ、空き部屋を探して準備をし、狩りに出かけた。

門から出て数分したら、だいぶ開けた場所に出た。夢子に聞いて、来た道と違う場所を通ったので、だいぶ違った風景が見られた。少なくとも、ここは生命に溢れていると推測できる。なぜならこちらのほうには湖があり、緑が広がっているからだ。ここは魔界でもあまり知られていない場所らしい。夢子は、俺たちを案内するとそそくさと帰ってしまった。

「さて…どうしましょうか…」

ルーミアが呟く。

「どうすつかな…」

ルーミアに続いて呟く。

「あれ…私達が来た時あんな生物いたかしら…」

ルーミアが指差しながら呟く。指差した先を見ると、ギョロツつとした目に、ものすごく太った青い蛇のような生物が何匹もいた。

「確かにいなかったよな…」

ルーミアに続いて呟く。少なくとも、あんな生物はいなかったはずだ。街以外だと、もつとおどろおどろしい場所を歩いた記憶しかない。

「でもあれ、食べそうだな…」

思わず呟く。外見だけ見ても、脂がのつていそうで美味そうだ。見た目は悪いけど…

「ええ!?!あれが!?!」

ルーミアが驚いたように言う。

「ああ。とりあえず捕まえて焼いてみよう。」

ルーミアに指示を出す。

「分かったわ。」

そう言つてルーミアは闇の弾幕を展開した。

「アアアア!?!」

弾幕に当たった奴等が奇妙な叫び声をあげて動かなくなった。

「さて、試食してみるか…」

俺は動かなくなった生物を前に、試食しようと試みる。

「調理器具は?」

ルーミアが俺に聞く。

「安心しろ。能力で出せる。」

「なら、良いわ。」

軽い会話を済ませて調理に必要なものを出す。といつても、肉を焼くためのものだけだ。

「ルーミアも食うか？」

「いえ、遠慮しておくわ…」

「そうか。」

ルーミアにも勧めてみたが、断られてしまった。確かに、見た目がひどいもんな…
「さて…」

手始めに、串を出して奴の全身を貫通させてから火をおこしてそのまま焼く。

「このくらいで良いか…」

数分焼いたところで火から上げる。

「これで食えるかな…」

不安をつい口にしてしまう。

「まあ、食ってみりや分かるか…」

とりあえず食ってみないと味や食感も分からない。

「ええーい！ままよー！」

掛け声と共に齧り付く。

「ど、どうなの?」

齧り付いた俺を見てルーミアが感想を聞いてくる。

「悪くないな…」

それに対して感想を答える。実際、生前に食っていたものよりも美味い気がする。脂ののりも程よく、あまりしつこくない味わいで結構美味しかったりする。調味料や細工無しでここまで美味しい肉も珍しい。見た目がよろしくないのですが、実際に使うならちゃんと捌いて見た目を変える必要があるが。

「つていうか、結構良いぞこれ。」

あまりにも美味しいもんだから、試食と称して一匹丸々食ってしまった。

「ふう。さてと、最初がこれじゃ、結構期待出来るかもな。」

食い終わってからルーミアに言う。

「そ、そう…」

疑いつつルーミアが言う。

「ああ。これでも良いんだが、どうする?」

ルーミアに軽く質問する。

「もちろん奥に行くわよ。貴方と狩りが出来るのは今回だけかもしれないのよ?このチャンスに引き下がるわけ無いじゃない。」

ルーミアが答える。

「分かった。じゃあ、行きますか。」

「ええ。」

ルーミアの答えに了承の意を示し、奥に進んでいく。

数十分後、食材を集めつつ進み続けたら、なぜか洞窟の奥に来てしまった。

「グガアアアアア!!」

すると、今まで聞いたことも無いような咆哮が聞こえた。

「な、何?」

ルーミアが少し怯えた声で俺に聞く。

「分からん。だが、警戒は怠るなよ。」

ルーミアに警戒するように伝える。

「分かってるわ。しかし、この声の主は一体何なんでしょうね。」

ルーミアが了承と共に聞いてくる。

「この声量…相当ヤバイ奴かもな…」

ルーミアの言葉を聞いてそんな言葉が漏れる。

「グルアアアアア!」

もう一度咆哮が響くと共に、ソイツは俺たちの前に姿を現した。

「うわあ…」

俺はそいつの風貌を見て絶句した。紫色の蛇みたいな体に、何本も生えた短い足、それと開いたままの口、機能しているか分からない目玉、挙げればキリが無いくらい気味が悪い生物だった。特に気味が悪いのは、顔から生えている触角だ。頭から生えているのではなく、顔のちょうど頬の部分辺りから触角が生えているのだ。

「うう…」

ルーミアも奴を見て気分が悪くなったのか、口元を押さえている。

「ガアアアアア!!」

そんな俺たちをよそに、出てきた生物はバリバリの戦闘体勢に入っていた。

「仕方ない…」

戦闘体勢に入っている奴を前に呟いた。

「かかってきな。すぐに捌いてやるから…」

能力で包丁を出しつつ挑発する。

「ガアアアア!!」

挑発された事に腹が立ったのか、紫色の生物はこっちに向かって噛み付いてきた。

「おっと…気の早い奴だ…」

躲しつつ、悪態をつく。

「さて…やりますか！」

こうして、俺と謎の生物の勝負が始まった。

第23話

「おらっつ！」

俺だ。臨人だ。今俺は、見た事無い生物と戦っている。

「ガアアア！」

「おっと……」

相手の噛みつきを躲しつつ、包丁を相手の肌には滑らせる。それを繰り返していると、猛獣は腹を立てたのか、攻めが激しくなった。

「よっ、ほっと。」

連続で噛み付いてくるので、しつかり躲す。一回でも噛まれたらやばそうな音がして、るので、余裕が無い。

「ガアアア!!!」

あまりにも攻撃が当たらない事に怒りの臨界点を越えたのか、口から何かの液体を吐き出してきた。

「危ねえ!!!」

間一髪で躲すことに成功した。その液体は、俺の後ろにあつた壁に着弾した。

「マジかよ…」

着弾先の壁を見てみると、壁の一部が溶けてなくなっていた。

「ヤバイな…」

今まででも被弾したら終わりの戦いを繰り広げていたのに、これからはもつと厳しい戦いになりそうだ。

「ガアアアア!!!」

液体を吐き出したままの勢いで嘔み付いてきた。

「ヤバッ…」

躲しつつ、手に持っていた包丁を喉の部分に突き刺す。

「ギアアアア!!!」

さすがに効いたのか、悶絶するような声を上げる。

「殺ったか？」

思わず確認する。

「グオアアアア!!!」

どうやら、そう簡単にはくたばらないようだ。

「チッ…」

その様子を見て舌打ちしてしまう。結構深々と刺さった感覚はあるのだが…

「ガアアアア!!!」

「これでも喰らえっ!」

持っていた包丁をコピーして、元から持っていた包丁を抜いた直後に目に向かって投げる。

「ギャアアアア!!!」

包丁が目刺さり、さつきよりも強くのけぞりながら悶絶の声を上げながら奴が横たわる。

「今度こそ殺ったか?」

警戒は解かずに確認する。さすがに目を貫けば死ぬだろう。

「大丈夫…みたいね…」

戦いを傍で見ていたルーミアも確認する。

「駄目ですよ。しっかりと止めを刺さなければ。」

「誰だ!?!」

「誰…?」

俺たちが猛獣の生死を確認しようとしたら、凜とした声が響いた。それと共に岩で出来た刃が飛んできて、猛獣の首を刎ね飛ばした。

「これでいいでしょう。」

警戒する俺たちをよそに、声の主は落ち着いて姿を現した。声の主は、青髪の若そうな青年だった。だが、服装や立ち振る舞いは顔に似合わずだいぶ上品だ。

「私は神薙亮。初めまして、ですね。」

声の主は警戒もせずに一礼しつつ自己紹介をする。

（神薙亮……うう……何故頭が……）

相変わらず『神薙亮』と聞くと頭痛が起きる。

（俺は……この名前を知っている……？）

初めて聞いたときもそうだが、初めて聞いた感じがしないのだ。

「大丈夫ですか？」

亮が俺に大丈夫かと聞いてくる。

「あ、ああ。大丈夫だ。」

心配ないと答える。

（何故だ……何故こんなにモヤモヤするんだ……）

解決できない思いが渦巻く。

「それなら良いんですが……」

神薙も納得する。

「ガアア！」

そんな事を思っている間に、神薙亮と名乗った男の後ろから何本も足の生えた超大柄のワニが現れた。

「危ない！」

叫びながら包丁を出して投げようとする。

「やれやれ…おこぼれを狙おうとしたのですか…」

そいつはそう呟くと、風の刃を放ってそのワニを一瞬で真つ二つにした。

「マジか…」

それを見た俺は小さく呟いた。

「気をつけてくださいね。このあたりは油断できませんから。」

「あ、ああ。」

このあたりは結構危険な場所らしい。

「そういうえば、貴方たちの名前を聞いていませんでしたね…」

少ししてから、亮が俺たちに言う。

「俺は川神臨人。で、こっちの金髪がルーミアだ。」

「ルーミアよ。よろしく。」

亮に軽く自己紹介をする。

「川神臨人…ですか…」

亮が俺の苗字を反芻する。

「知ってるの？」

ルーミアが亮に聞く。

「いえ、懐かしい名前だな…と思って。」

「懐かしい？」

亮の『懐かしい』という言葉に反応してしまう。

「ええ。私がここに来る前に何度も聞いた気がするんですよ。」

「そうか…」

亮はそう呟いた。俺は身に覚えが無いので、簡単な答えしか返す事ができなかった。

「何となくですけどね。」

亮が付け加える。

「そ、そう…」

ルーミアが苦笑いしつつ言葉を返す。

（神薙亮…何か思い当たるものは…）

あちらに知られているのなら、当然俺も向こうの事を知っているのではないかと記憶の中を探す。

「少し話しませんか？ 臨人さん。」

亮が話をしたいと持ち出してきた。

「話?」

「ええ。私の中にある疑問も晴らしたいので。」

「分かった。」

亮の提案に乗る。

「じゃあ、私は神綺の所に戻るわね。」

素晴らしい残してルーミアは食材を持って、帰っていつてしまった。

「さて、これで落ち着いて話せますね…久しぶりです。同じ世界に生きていた人と、それも高校が同じだった人と。」

「何!？」

亮の言葉に驚きを隠す事ができなかった。

「私はさっきああ言いましたが、私は貴方をすっかり覚えていますよ…『異常分子』さん。」

「ツ…」

もう驚きを通り越しておかしくなりそうだった。転生した後に生前の（しかも高校の）二つ名を言われるなんて思いもしてなかった。

「貴方に少しですが協力していたあの神薙亮です。本当に覚えていないのですか? 竜也

君の誕生日も共に祝ってあげたのですが…」

亮が俺に聞いてくる。

「ああ！まさか!!」

「そのまさかです。貴方に頼まれてギターをわざわざ担いでいったじゃありませんか
…」

(やつと繋がった…神薙亮は…)

学校では俺とあまり喋らないのに、必要な時にいつも力や知恵を貸してくれる奴だった。2年の時の竜也の誕生日には、家が遠いのにギターを担いでわざわざ家まで来てくれたっけ…

「もしかして、クラスでいつも成績上位に入ってた…」

「ええ。その通りです。久しぶりですね…『異常分子』の川神臨人君…」

そう言つて亮は俺に手を差し出してきた。

「思い出してやれなくてすまん。」

亮に謝罪する。

「良いんですよ。私も人間界で有名になった貴方の名を聞いてから思い出したのですから。」

亮が気にしなくていい、と言つてくれる。

「本当にすまん。でも、本当に久しぶりだな。『機音神』神薙亮。」

もう一度謝罪をしてから、俺は差し出された亮の手を掴んだ。

「さて、もうそろそろ私は帰らせていただきましょう。」

亮が素晴らしい残し、立ち去ろうとする。

「待ってくれ！」

亮に確認したいことがあるので呼び止める。

「何でしょうか？」

亮が声に気づき、足を止める。

「お前は…何故ここに？」

「覚えてないんですよね…気がついたらここにいましたし。」

「え？」

「では、これで失礼します。」

素晴らしい残して、亮はワニを持って立ち去ろうとした。だが、数歩進んだところで急に立ち止まって、

「言い忘れてましたが、ルーミアさんの前での行動は、7割が演技です。では、またどこかで会いましょう…それと、この話は竜也君以外には他言無用ですよ。」

と言いつつ残してそのまま帰っていった。あれが演技かよ…さすが元演劇部…

「俺も帰ろ。」

一人でそう呟いてから、来た道をまっすぐ帰っていった。

第24話

あれから、亮と昔話をした後、俺は神綺の館に帰ってきた。

「ただいまー。」

「あら、遅かったじゃない。」

俺の声にルーミアが反応する。

「そうか？」

正直、時間感覚がなくなっていたので実感が無い。

「おう。お帰り。」

遅れて竜也も俺のところに来る。

「おう。ただいま。」

竜也の言葉に軽く返す。

「とりあえず、採ってきた食材は料理場に置いてきたわ。夢子さんが整理してくれたわよ。」

ルーミアが食材の保管について教えてくれた。

「おう。わかった。」

ルーミアに返事をして、料理場に向かった。

「お待ちしておりました。」

料理場に入ると、夢子さんが出迎えてくれた。

「こちらが料理場です。」

夢子さんはそう言うのと、料理場の案内&説明をしてくれた。

「・・・以上です。」

料理場の説明も終わり、夢子さんはどこかに行ってしまった。

「さて、始めるか・・・」

少年料理中：…（作者は料理が救いようが無いくらい下手で、上手く書けないために料理描写はカットさせていただきます。申し訳ありません。By作者）

「よし・・・」

完成した料理を見て小さく独り言をこぼす。青い蛇のような奴は捌いてから蒸して塩コショウをかけて、紫色の奴の肉はシンプルに焼く。他にとってきた植物類でデザートになりそうにも無い奴等は色合いを気にしてサラダにした。そして、デザートになりそうな物は盛り合わせにしてまとめた。

料理が終わると、どこからともなく夢子さんが現れた。

「臨人様、皆様がお待ちです。」

「え？」

「臨人様が料理を始まられた時に、皆様を集めて食事の準備をさせていただきました。」
「そうなんですか。分かりました。」

「ここを出てから夢子さんが戻ってこなかったのって、皆に食事の時間だと伝えに行つてたのか……」

「じゃ、運びますか。」

「手伝います。」

運ぼうとすると、夢子さんが手伝うといってきた。

「お願いします。」

素直に手伝ってもらおう。さすがに一人で4人分運ぶのはキツすぎる。

「おまたせ〜」

「お待たせしました。」

料理を夢子さんと二人で運んでくると、皆は食器を出して食べる準備をして待っていた。
「腕は落ちてないだろうな？」

料理を並べている最中に竜也が俺に聞いてきた。

「さあな。俺は自分の料理のレベルとか分からんし、こつちに来てから料理はしてたけどそんなに本格的にはやってないから、不安はある。」

「まあ、お前だし、簡単には落ちないだろ。」

竜也に言葉を返しつつ料理を並べ、全員に行き渡ったか確認する。

「これでよろしいですね。」

夢子さんが確認を終えて呟く。

「もう食べてもいいかしら〜？待ちきれないわ〜。」

神綺が子供のように夢子さん聞く。

「少々お待ちください。」

夢子さんが静止する。

「え〜。」

神綺がそう言いながら残念そうな顔をする。さつきから子供っぽいこの人…。

「臨人様、こちらへ。」

夢子さんが俺の席に案内してくれる。とは言っても、食卓には5人しかついてないのだが。

「おう。」

「では、頂きましょう。」

俺が席に着くと夢子さんが食べる合図をした。

少女少女食事中…（食レポって難しくね？by作者）

「「「」馳走様でした！」「」

「お粗末さまでした。」

食べ始めてから三十分ぐらいで全員食べ終えた。

「夢子ちゃんの料理とは別の美味しさがあつたわね〜」

神綺が料理の感想を言ってくれた。

（良かった…）

心の中で安心する。

「これからは、夢子ちゃんと交代でやってもらえるかしら〜？」

「分かりました。」

どうやら合格らしい。

「さて、もう食べ終わった事だし部屋に戻りましょうか。」

神綺はそう言つて部屋に帰つた。

「ふう。美味しかった。それじゃ、私も戻るわね。」

ルーミアも部屋に戻つていつてしまった。

「片付けはお任せください。」

夢子さんはそう言つて全員分の食器を凄い速さで片付け始めた。

「さて、俺らも戻ろうぜ。」

竜也が俺に部屋に行こうと言つてきた。

「そうするか。」

俺と竜也は軽く話しながら部屋に戻つた。

「はあ……」

部屋に戻つてため息をついてしまう。

（下手になつたなあ……）

（料理が、かの?）

心の中で呟くと、神が質問をしてきた。

（うん。昔はもつと上手くできたはずなんだけど、何か上手くいかなくてね……）

（緊張してたからじゃないかのう。何をするにも焦りと緊張は力量を鈍らせる。気をつけることじゃ。）

神が一つの説を立てる。

（確かにそうかもね。これで自分のこれからが決まると思つたら嫌でも緊張するしな。）

（ほっほっほ。まあ、自分を信じてやる事が一番じゃ。）

（そうだな。）

少しモヤモヤするが、神の立てた説を信じて考えるのをやめた。

やる事も無く夜になって、料理の腕について悩んでいた。

「臨人。ちよつといいか？」

竜也が扉を開けつつ聞いてくる。

「どうした？」

「いや、聞きたいことがあってな。」

「何だ？」

竜也…まさか気付いてるんじゃない？

「お前、手抜いた？」

おいおい…

「それは無い。」

「あつちの世界で最後に迎えた誕生日に比べて妙な感じがしたからな。」

「そうか…」

懐かしいな…あの時は竜也に貰った料理道具(包丁とまな板)で作ったんだよな…(特

別短編参照)

「もしかして、あれをあつちの世界に置いて来たからか？」

「それは無いだろ。」

竜也が料理道具が悪いんじゃないかと言うが、そうじゃないだろ…

「でも向こうの世界じゃ、あれ使った時と他の道具使った時だと味違ってたし、少しは関係あるんじゃないか？」

「そうか？」

確かに少し違ってたけど、ここまでじゃないだろ。

「まあ、今更言ってもあれだけがこっちの世界に来る事は無いんだけどな。」

「確かに。」

「まあ、少しずつ腕を戻していくよ。」

「楽しみにしてるぜ。」

竜也はそう言い残すと部屋から出て行った。

「はあ…『道具』か…」

（適当に出したものを使ってたからのう。しかし、道具一つで変わるとは驚きじやのう。）

つい零してしまった愚痴に神が反応する。

（まあ、慣れた道具じゃなかったのも原因じやな。）

（そうかなあ…）

もしそうなら、自分の実力を過信してしまった事になる。

(なに、そう落ち込んでもいい。誰にでも過ちはある。)

(そうだけど…)

(今日はもう遅い。早く寝るがよい。)

そう言い残して神は交信を切ってしまった。

「寝るか。」

考えても仕方がないので、寝る事にした。

第25話

「ふあゝあ。」

あれからすぐ寝て、次の日になった。

「あれ？」

起きて見回すと、枕元に紙があった。

「何だこれ？」

その紙を拾って開いてみた。

『昨日振りじゃな。わしじゃ。神じゃ。昨日お主が言っていた《道具》とやらを揃えておいた。部屋においてあるから確認するが良い。しかし、なかなか良い物を使っておるようじゃな。大事にするんじやぞ。』

神より』

「マジか……」

昨日あんな事を言ってたからか、神から手紙が来てた。何か久しぶりに思ったのは気にしないで置こう。

「とりあえず……机か。」

手紙に書かれている通り、机の上を確認する。

「これか？」

机の上にはおそらく金属製であろうかばんが置かれていた。

「開けてみるか……」

かばんを開けると、元の世界で使っていた包丁とまな板が丁寧に保管されていた。

「また懐かしいものを……」

それを見た俺は感慨にふけりつつ小さく呟いた。

懐かしいものを眺めながら感慨にふけてっていると、ノックの音が鳴り響いた。

「誰だろ？」

扉の前に行ってドアノブを回し、ドアを開けた。

「よっ。おはよう。」

部屋の前には竜也がいた。

「なあ臨人、朝起きたらこんな手紙が来てたんだが、何か知ってるか？」

竜也はそう言つて一通の手紙を渡してきた。

（なんだらうか？）

渡された手紙を受け取り、開いてみた。

『初めまして、でいいかしら？ 私はサリエル。魔界にいる天使です。最近、魔界に新入り

が入ったって聞いて興味を持ち、こうして手紙を書かせていただきました。なんでも、《地上最強》が来たらしいじゃないですか。それに、《宵闇の銀龍》のほうも気になるので、どうです？ 今度手合わせしませんか？ 私は魔界のはずれの洞窟にいます。もし良ければいらしてください。』

「えつと…」

「これは…」

「これにはどういう反応をすればいいのかが分からず、二人して困り果ててしまった。

「どうする?」

「とりあえず神綺に言ってみるか。」

「そうだな。」

とりあえずこの手紙を持って神綺の所に行く事にした。

とりあえず広間に行くと神綺が夢子さんと何か話していた

「おーい神綺、こんな手紙が来てたんだが…」

「あらく、何かしら?」

竜也が神綺に手紙を見せた。

「あら、魔界に天使なんていたのね。知らなかったわ。」

(知らないって…)

「でも、いいんじゃないかしら？」

「この洞窟は……」

「いいのよ。多少危険な場所も慣れてるでしょうから。」

「そうですか……ですが、もしかしたら場所が分からないかもしれないので、私が案内します。」

「そうね。行けなかつたらあの子にも失礼よね。」

「どうやら行く流れになったらしい。」

「では、準備をします。」

「どうやら、行くことは確定らしい。」

「さて、俺らも準備するか。」

「竜也はノリノリらしい。」

「そうだな。」

「こういうときには無駄に口を挟まないほうがいい。」

「じゃ、俺は準備してくるからお前も早くしろよ。」

「こうして、サリエルのところに行く事が決まった。」

第26話

「ふう……」

竜也が部屋を出た後、俺も自分の部屋に戻って準備を始めた。

「サリエル……ねえ……」

手紙には『魔界の天使』と書いてあったが、天使が戦闘をできるのだろうか？ 勝手なイメージだが、天使といえれば神の周りを飛び回ってるだけのイメージなんだが……

「考えても仕方ない……か……」

とりあえず行ってみない事にはわからない。会う前にあれこれ考えるより最善を尽くす事を考えよう。

少年準備中……

「あ……」

これからの事に備えて、もう少し動きやすい服に替えようとしたのだが、服とかはあの時（人妖大戦の時）に神に預けてた事を思い出した。

「まあ……いいか。」

今までもこの服で戦ってきたのだから、気にしないことにした。

(でも、もう少し魔界っぽい服であったほうがいいよなあ…)

今まで着ていた服があまりにも周りとは合わないのでそろそろ着替えようと思ったのだが、まだ返してもらってない事に今更気付いた。

「他には…」

服の事は気にしないで、別のことを考えることにした。

「特には…無いな。うん。」

よくよく考えれば、服と武器以外はテキトーに決めても何にも問題は無かったのに、なんで考えたんだろう。

「これでいいか。」

準備を終えて部屋の片付けをしてから、竜也の部屋に向かった。

「悪いな。遅くなった。」

「いや、俺のほうの準備がまだ終わってなくてな…。」

「そうか。分かった。」

竜也の準備が終わってると思ってきたが、どうやら終わってなかったようだ。

「待たせたな。さ、行こうぜ。」

そうこうしている内に、竜也の準備が終わったようだ。

「おう。行くか。」

二人とも準備を終わらせた後、神綺の部屋に行った。

「神綺ー。居るー?」

神綺の部屋の前で竜也が確認する。

「入っていいわよ。」

神綺の気の抜けた声が聞こえる。

「失礼するぜ。」

竜也はそういわれると、さつきと入って行ってしまった。俺も遅れて神綺の部屋に入った。

「二人とも来たのね。別に、私のところに来なくてもよかったのに。」

神綺が俺たちに対してそう言うてくる。だが、言葉の割には少しうれしそうだ。

「ここに居たのですか。出発の準備が整いました。」

神綺が話を始めようとした時に夢子さんが部屋の中に現れ、準備が終わったことを伝えてくれた。

「おつ、出発か。じゃ、ちやつちやといつて帰ってくるか。」

「頑張つてね。」

竜也が出発前に気合を入れるように独り言を言うと神綺がそれに応え、夢子さんは知らん振りをした。そして、三人で部屋を出て、町の門まで来た。

「あら、三人でお出かけ？珍しいわね。」

門の前に着くと、サラがこちらを見て興味深そうに呟いた。

「ええ。これから《魔界の天使》に会いに行くのよ。」

「へえ。で、その《魔界の天使》に何か用でもあるの？」

「いえ、あちらがこの二人に用があると……」

「その二人に……なんか嫌な予感がするわね……」

夢子さんが《魔界の天使》についてサラと話していた。

「大丈夫だつて。あんまりいろんな事気にしていると、楽しめないぜ？」

サラの言葉に割り込むように竜也が口を挟んだ。

「そうね。それに、もしもの時は夢子も居るみたいだし、心配ないわね。」

竜也の言葉にサラが応える。

「では、私達はもう行きますので。」

「そうね。あまり長話してもしかたないわね。じゃあ、行ってらっしゃい。町は私がしっかり守っておくわ。」

「お願いね。」

二人の会話が終わり、町を離れた。

少年少女移動中…

しばらく歩いてみると、時空の裂け目のような場所を見つけた。

「ここです。」

夢子さんがその前で立ち止まり、この先にサリエルが居るといふ事を教えてもらった。

「……なの…」

竜也は驚きのあまり、いつもの調子を失っている。

「では、行きましようか。」

夢子さんはなんでもないことのように催促してきた。

「行くか…」

俺は、覚悟を決めて（決めるまでもない気はするが）時空の裂け目に入った。

第27話

時空の裂け目に入り、周りを見回してみた。どこを見ても自然の風景や人工の建物は見当たらない。

「なんだこゝ…」

「不思議な空間だな…」

まるでファンタジーに出てくるようないろんなものが歪んだような空間にいた。

「やっとききましたか…お待ちいたしておりました…」

空間を見回していたら、神々しきを含んだ女の人の声が聞こえた。

「誰だ!？」

竜也がそう言うと、俺たちの前に6枚の翼を持った薄い青色の髪の毛の女の人が現れた。

「先日手紙を送らせていただいたサリエルと申します。この度はお越しいただき、本当に感謝しています。早速ですが、私と手合わせしていただいけませんか？」

会っていきなり手合わせって…

「あれ?でも、サリエルだけなら二人呼ばなくても良かったんじゃないか?」

竜也がそう言う。確かに、一人で二人を相手できるようなやつじやなきや俺たち二人

を呼ぶ必要はないはずだ。

「それは…」

サリエルが何か言おうとする前に、大きな紫色の羽を持った長い金髪の女の子が降りてきた。よく見ると、左の頬に星マークがある。

「楽しそう！私も混ぜてよー！」

「この子がいるからなんですよ…」

どうやら、サリエル以外にもここに住んでいる人（？）がいたようだ。

「最近退屈してたのよねー。会う人つて言ってもサリエルしかないし、マガンも最近相手してくれないしー、つまんないのよねー」

金髪の方の子がいろいろ言ってくる。

「エリス！お客人の前で喋りすぎないで！」

サリエルが静止をかける。

「はーい…」

エリスと呼ばれた子が残念そうにシユンとする。

「なるほどな…」

竜也が納得したように呟く。

「この子はエリスと言います。少しやんちゃでして…」

サリエルがそう言った。大分このこのことに関して苦勞してそうだ。

しばらくサリエルと話して、事情を理解した。

「それで、この子の退屈を潰せればいいと思つて神綺に頼んで俺たちを呼び出そうとしたってわけか」

「そうですね。それに、マガンもいますし…」

サリエルが言葉を言い終えないうちに、目玉が五つ集まったような生き物がサリエルに近づいてきた。

「こちらがマガンです。」

その五つの目玉を指して、そいつがマガンだということサリエルが教えてくれた。

「こいつがマガンか…」

竜也が呟く。

「でも、こいつに人間の感覚なんてあるのか?」

疑問を口にする。

「もちろんありますよ?」

サリエルがそう言った瞬間、マガンがきれいな五角形を作るように動いたと思つたら、その五角形の真ん中に黄色の服を着た短い金髪の女の子が現れた。

「ふう、久しぶりに人型になつたわ」

そう言つてマガン(?)は伸びをした。

「これで役者は揃いましたね…では、始めましょうか」

サリエルはそう言つたが、こっちは夢子さんが帰つてしまつたらしく、竜也と俺しかない。

「おいおい、こつち二人しかないんだけど？」

竜也がそう言つた。

「竜也。俺がサリエルとエリスを相手するから、お前はマガンを頼んだ。」

「まあ…いいぜ。」

俺が竜也を宥めると、竜也も納得した。

「大丈夫ですか?二人しかいないようですが…」

サリエルが心配してくる。

「大丈夫だ。問題ない。」

サリエルに応える。

「そうですね…後悔しても知りませんよ?」

サリエルが軽い脅しをかけてくる。

「それなら心配いりませんよ。」

聞き覚えのある声…?

「私が臨人さん側につきましょう。」

「あなたは…まさか!？」

「お前か…」

サリエルと俺がそれぞれ反応する。

「さすがに3対2は見過ごせませんね…」

「魔界の祖がきましたか…」

サリエルは軽く怯えたような声で呟いた。

「亮!来たのか!」

このタイミングで亮が来てくれるとは…

「これで役者は揃いましたね?」

亮が全員に確認するようにそう言った。

「では、始めましょうか…」

こうして、サリエル達との戦いが始まった。

第28話A

亮Side

私は臨人君がサリエルさんに突っ込んで行った後、こちらに向かってきたエリスさんと相対していました。

「あなたが私の相手をしてくれるの？」

「ええ。私でよければ。」

だいぶ好戦的な方なようです…

「やったー！今まで相手してくれる人がいなかったから、退屈だったのよねー！」

こんな幼い見た目の女の子の遊び相手がいないなんて…可哀想ですね…

「じゃあ、始めよっか！」

エリスさんはそう言うのと先端に星型の飾りのついた杖を振り回して、レーザーを乱射してきた。なんとも危険な…できれば、もっと安全で楽しい遊びを教えてあげたいのです…

「それそれ！避けられるかなー？」

なんとも楽しそうに撃ってくる。

「それっ、はっ。」

向かってくるレーザーを順々に避けていく。

「これくらいは簡単に避けられるよね！」

レーザーの量が増える。これでは、なかなか近寄れませんね…

「ほらほら！もつと行くよー！」

向かってくるレーザーの間隔が狭まってきました。これは…弱らせないと厳しいです…

「あまり傷つけないのですが…仕方ありません…」

エリスさんに聞こえないように呟いてしまう。あまり幼い子に攻撃をしたくないのですが…

「あまり気乗りはしません…行きますよ！『聖者の息吹』！」

光の弾が吹雪のようにエリスさんに向かって飛んでいく。

「あはは！面白いじゃない！」

聖者の息吹を受けても平然としているどころか刺激してしまったのか、さらに元気になってしまいました…

「こつちも応えないと失礼よね！」

エリスさんは楽しくなってきたのか、さつきまでよりも全体的に弾幕が濃くなり、非

常に避けにくくなる。

「駄目でしたか…」

これは、下手に攻撃するより体力切れを狙った方がいいかもしれませんね…

「どうしたの？もう終わりなの？」

エリスさんが安い挑発をしてくる。

「その手には乗りませんよ？」

挑発は私に最も通用しない手ですからね…

「でも、避けるのはやめないのね。」

「死にたくはないですからね…」

「もつと私を楽しませてよ！」

エリスさんが楽しませて！と言ってくる。

「わかりました…」

楽しませるのは私の専売特許です。存分に楽しませて差し上げましょう！

「では、開演と行きましようか！」

そう言うと共に考えを一気に変えて、演技をするときのような気分にする。観客（相手）であるエリスさんも私もここからは楽しんでいきましよう！今までは攻撃を控えてきましたが、話を聞いてもらうためには攻撃しないとイケません。ですから一旦、慈悲

もかけない猛攻を仕掛けた方がいよいよです。

「行きますよ！『風神乱舞』！『紅蓮舞踏』！『泰山鳴動』！『夢幻水禍』！」

生前に出た音楽ゲーム大会の課題曲4曲から力を借りて風、火、土、水の4属性の力を弾幕にして放出する。

「キヤアアア！」

エリスさんは避けきれずに被弾する。かなり力を込めたので、だいぶ被害は大きそうです。でも、手を止める気は、あんまりありません！

「まだまだ行きますよ！『聖者の鼓動』！」

聖者の鼓動で弾幕の速度を上げる。

「これで最後です！『神剣物語』！」

小さな聖剣を創造し、敵役の様々な弾をぶつけて大きくしていく。まさに、神の剣と呼ぶにふさわしい大きさになったら、エリスさんに向けて投げつける。

「それっ！」

エリスさんは蝙蝠に変身して避けた。ですが、剣が通り過ぎた時の風圧で蝙蝠になったエリスさんも無事ではなかったらしく、元の姿に戻っている。すかさず神剣を創造し、エリスさんの首元に添える。

「降参ですか？」

「私の負けね…でも、楽しかったわ！」

エリスさんは残念そうに負けを認めた後、はじけるような笑顔で楽しかったと言ってくれた。

「もつといろんな遊びを知りたくありませんか？」

この子にもつと普通の遊びをして欲しいと思つて、提案する。

「楽しいことなら大歓迎よ！さ、行きましょ！」

こうして、エリスさんに無事勝利して、まともな遊びを教えることができました。

第28話B

臨人Side

俺はサリエル達とに戦いが始まると同時にサリエルに向かって突っ込んでいった。

「さあ、始めようぜ！戦いを！」

サリエルに突っ込みながら、豪快に啖呵を切った。

「武器も持たずに突進とは…地上最強が聞いて呆れますね…」

サリエルは残念がっているが、俺は今回武器を隠しているだけである。

「すぐに終わらせて差し上げましょう…」

そう言つてサリエルはありえない量の弾幕を放ってきた。

「甘いっ！」

弾幕の隙間を抜けて、どんどんサリエルに近づいてゆく。

「さすがに足りませんか…」

サリエルはそう呟くと同時に弾幕を厚くしてきた。

「おっと、そう簡単には当たらないぜ？」

厚くなった弾幕も気にせず、距離を詰める。

「なかなかやりますね…ですがまだ本気ではありませんよ?」

「当然だろ!」

サリエルの言葉に応えるように叫ぶ。そのうちにもしつかりと距離を詰めていく。

「そろそろ危険ですね…」

サリエルはそう呟くと、翼を動かして飛び上がると同時に俺を吹き飛ばそうとした。

「そうはいくかよ!」

サリエルと同時に飛行を開始し、吹き飛ばされないように前に傾くように飛んだ。

「やはり効果はありませんでしたか…」

「当たり前だろ!」

「でしたら、これならどうでしょう…!」

ただの弾だけじゃなく、レーザーを織り交ぜた弾幕を放ってくる。

「メンドクセエな…つと」

さつきまでよりも躲しにくくなっている。それに、飛んでいる分地上にいた時よりも小回りがきかない。

「クツソ…なかなかきついな…」

「そろそろ武器を出したらどうですか?」

サリエルが挑発してくる。

「仕方ないか…」

そろそろきつくなってきたので、隠していた武器を出す。

「これでっ！行け！ヒ首！」

服の中に隠していたを投げる。ヒ首はまっすぐにサリエルのところに飛んでいく。

「なるほど…：投擲武器を隠していたのですか…」

サリエルはそう呟くと、軽い動きでヒ首を躲してしまった。

「やっぱ簡単にはいかないか…」

「当たり前でしょう…」

サリエルと言葉をかわす。

「それで終わりですか？」

「終わるわけないだろ！」

正直、これが避けられるとは思ってなかったので焦ってしまふ。だが、俺の武器はそれだけじゃない。準備したものはまだまだある。

「これならどうだ！鴛鴦鉞！」

次の武器である鴛鴦鉞を取り出して投げる。これもまたサリエルの方に向かって物凄い速度で飛んでいく。

「こんなものでは当たりませんよ？」

これもまた躲される。やっぱり普通の武器じゃ無理か…とはいえ、まだ最終兵器を使うわけにはいかない。

「この程度ですか？それなら、今度はこちらから行きますよー！」

サリエルはそう言うのと左右に大きな球体を出して、弾幕をさらに厚くしてきた。

「マジかよ…つと…」

増えた弾幕に気をつけながら左右に飛び回って必死に避けていく。

「幻滅ですね…地上最強などと言われていたので期待したのですが…」

サリエルが心底がっかりしたように言う。

「そんなわけ…ねえだろ！」

そう言って匕首と鴛鴦鉞を両手に4本ずつ持ち、一斉に投げた。狙いはあまり定まっておらず、いろんなところに飛んでしまった。

「無駄打ちはしないほうがいいですよ？」

サリエルに心配される。

「無駄打ちじゃ…ねえよ！」

サリエルが飛んでいった武器たちに気が向いているうちに一瞬でサリエルの前までたどり着いた。

「甘かったな！終わりだ！」

サリエルの前に着いた俺は、左腕を弓を引くように引いて、自分が放てる最大威力の拳をサリエルの腹に叩き込んだ。

「カハツ…」

相当効いたのか、サリエルは悶絶している。

「まだまだ行くぜ?」

さつき放った拳の反動を利用して、右腕で同じところにもう一度拳を叩き込んだ。

「クツ…」

攻撃を受けたサリエルは相当苦しいのか、飛ぶのをやめて地上に降りた。

「どうやら見くびっていたようです…」

息を切らしながらサリエルが言ってくる。

「仕方ありません…本気を出しましょう!」

サリエルはそう言うのとゆっくりと飛び上がり、6枚の翼を全開まで広げてなにやら呪文を唱え始めた。

「ハア!」

呪文を唱え終えたサリエルが一喝のような大声を上げると、サリエルが闇に包まれた。

「なにが起きるんだ…」

サリエルを包んでいた闇が晴れると、サリエルの形をした影が魔法陣に囲まれたように存在していた。

「……………」

さつきまであんなに言葉が発していたサリエルが一言も喋らなくなつた。

「これが本氣つてわけか…」

小さく呟く。これが本氣ということ、今までは手を抜いていたのかと思うと少し悲しくなる。今までもだいたい苦戦してたのに、それ以上ということは間違いなく苦戦させられるだろう。

「……………」

そう思っていると、無言でサリエルはレーザーを撃つてきた。

「あつぶな!」

間一髪で避ける。レーザーの速度が今までとは桁違いだ。

「これは…今まで以上に気を引き締める必要がありそうだな…」

そのつぶやきを最後に、俺も気を引き締めるために自分が最も使ってきた武器を出す。

(来い! 暁!)

一振りの鞘に入った研ぎ澄まされた刀を出す。それを鞘からゆっくりと出し、吠える

ように叫ぶ。

「お互い本気で行くこうじゃねえか！後悔すんなよ！」
大きく啖呵を切って、再びサリエルに突っ込んだ。

第28話B—2

本気を出したサリエルに対して啖呵を切つて突つ込んでいるのはいいが、弾幕の濃さが今までとは桁違いな上に一つ一つの弾が的確に殺しにかかつてきている。俺が言えたことじゃないが、手合わせじゃなかったつけ…これ…

「……………」

「さつきから全く喋らねえな…」

サリエルにどうにかして近づこうとしているのだが、弾幕が濃くて近づけない。それに、サリエルの雰囲気は全く人を寄せ付けないものに変わっている。

「クツソ…なんとかしねえと…」

「このままじゃマジで殺されかねない。

「鬱陶しいな！」

飛んでくる弾幕を躲しながら呟く。

「やれるかな…」

あまりにも弾幕が鬱陶しかったので、弾幕に向かって刀を振るって切ろうとしてみた。すると、弾幕は綺麗に真っ二つになった。

「よっしゃー！これで……！」

弾幕が切れることがわかったので、刀で弾幕を切り裂きながらサリエルのもとに向かう。

「……………」

言葉は発していないが、体(?)の動きで驚きが伝わる。

「この距離なら……！」

サリエルとの距離がかなり詰まってきた。これならあれを当てられるかもしれない。暁を鞘に収め、今の今まで隠してあったある武器に手を伸ばす。真正銘の奥の手だ。

「……………」

武器を用意している間に、サリエルの周りにいろいろな漢字が集まっていくのが見えた。

「クソッ！間に合え！」

何か嫌な予感がする。あの漢字が集まりきったら、超強烈な攻撃がきそうだ。正直、あの攻撃を受けたら耐えられないだろう。

「行け！乾坤圏！」

frisbeeのような円形をした投擲武器、乾坤圏を投げる。

俺が今投げた乾坤圏は、そんじよそこらの圏とかとはかなり違う。仙界最強の武器と

呼ばれた乾坤圈だ。さっきまでの投擲武器とは違い、不規則な軌道を描いて飛んでいく物だ。俺が言っていた『奥の手』とはこれのことである。生前読んでいた漫画では、『この武器を持った者とは戦いを避ける』と言われるぐらい強力な武器だった。だから今回は『奥の手』として使わせてもらった。だが、俺の期待はあっけなく打ち砕かれた。正直、暁を持って突貫していた方が良かったのかもしれない。

「!!」

どうやら一足遅かったらしく、サリエルが放った巨大な闇にあえなく弾かれてしまった。こんなはずじゃなかったんだけどな…

「マジかよ…」

サリエルが放った巨大な闇は俺の投げた乾坤圈を簡単に弾いた後、真つ直ぐに俺の方へ飛んできた。乾坤圈が弾かれたことに対してのシヨックがあまりにも強すぎて、攻撃に対応する気にもなれなかった。やっぱり魔界は桁が違ったか…

（負け…か…）

俺はなすすべもなく闇に飲み込まれた。

第28話C

竜也Side

みんなが各々の相手に突っ込んで行った後、マガンと俺が取り残された。

「やる?」

人型になったマガンに確認を取る。

「ん〜…どうしよっかな〜?」

マガンは無邪気な声で言ってくる。こんなに戦いと無縁に聞こえる無邪気な声を聞いたのはいつぶりだろうか?

「やろっかな〜?でもなあ〜、この姿になるのも久しぶりだしなあ〜…」

マガンはこつちを気にすることもなく、独り言を言う。

「あんまり力を使いすぎると強制的に戻っちゃうしな〜」

姿は完全に自由に変えられるわけじゃないのか…

「あの姿、あんまり可愛くないのよね〜…」

確かに、あれは可愛いとは言いがらいな…ただの5つの目玉だし。

「確かにあつちの姿は便利なんだけどな〜」

だろうな。目玉一つ一つはそんな大きくないし、小回りも効くだろう。

「あなたはどう思う？こつちの方がいいかあの姿の方がいいか。」

いきなりこつちに話が飛んできた。今の今までこつちに気を向けていなかったのに、急に来られると少しだけビクツとなる。

「うーん…」

考えてしまう。もしこれで機嫌を損ねたら、いきなり戦闘にもなりかねない。慎重に選択肢を選ばなければ…

「君の思う方でいいんじゃないかな？」

無難と思われる選択肢を選ぶ。

「それがわからないから聞いてるんじゃない！」

あらら…間違えたか…

「で？どつちがいいと思う？」

もう一度聞いてくる。

「今の方がいいんじゃないか？」

少し悩んだ結果、そんな結末に至った。

「そうよね〜！今の方がいいわよね〜！」

良かった…今度は間違えてないみたいだ…

「でも、この姿をどうやって維持しようかしら？私だけじゃどうにもならないし…」

姿の維持か…ん？あれならいけるんじゃないか？

「誰かいなかしら？そんな魔法みたいなことできる人…」

能力でどうにかなるか？『消す程度の能力』なら、原因だけを消すことで解決できるかもしれない。だが、リスクが高すぎる。もしかしたら、余計なものまで消してしまうかもしれない。これでマガンの感情や力まで消してしまったら、存在が崩壊してしまう。

「どうすれば…」

思わず小さく呟いてしまう。

「何が？」

マガンに聞こえてしまっていたのか、反応が返ってくる。これはヤバイ。あまり下手には伝えられない。

「いや、マガンの悩みの解決法でも見つけられたらな…って思ってたな。」

とりあえず、考えの中心だけを言う。

「助けてくれるの!？」

「まあ、な。」

マガンが嬉しそうに詰め寄ってくる。

「それで、どうやって戻らないようにしてくれるの？」

「それがだな…思い浮かばないんだ…」

「え〜…」

いい案が出ないとマガンに伝えると、がっかりした声で呟いた。

「やっぱり私はこのままなんだ…」

マガンが寂しそうに呟く。

「いや、一つだけ方法がある。」

「あるの!?!」

仕方ない。あの手段を伝えよう。

「俺の能力で、『姿が変わる現象』だけを消すんだ。俺の能力は消す程度の能力でさ、あの程度のものは消せるんだよ。」

「いいねそれ!やろうやろう!」

マガンが嬉しそうに言う。だが、すっかりリスクも伝えなければ…

「でも、これには一つだけ問題がある。」

「問題って?」

「もしかしたら、必要なものまでなくなる可能性がある。」

リスクを伝える。果たしてマガンは乗ってくるだろうか…

「いいよ。別に。多少だったら我慢できるもん。」

「どうやら、マガンは気にしないらしい。」

「そうか……じゃあ、ちよつとこつちに来てくれ。」

「いいよ。」

マガンに来るようにお願いすると、マガンは素直にこつちに来た。

「始めるぞ。」

マガンが来た後、マガンの背中に手を添えて呟く。正直、メチャクチャビビってる。能力の使い方はルーミアに教わったとはいえ、そんなにうまく使えるわけではない。

「……………」

目を閉じて気持ちを集ませる。針に糸を通す以上の精度が必要な作業のため、一瞬たりとも気が抜けない。

「……………」

魔力を流してマガンの体の中にある変化の原因を探す。どこにあるかもわからないので、手当たり次第に探していく。魔力の使い方もルーミアに教わって正解だった。

（これか！）

しばらく探していると、マガンの変化の原因のようなものを見つけた。

（これを消せばいいのか？）

変化の原因と思われる場所に魔力に能力を混ぜたものを流し込む。

（成功してくれ！）

徐々にそれが消えていくのがわかる。

（頼む！）

完全に消えたことを確認し、マガンから手を離す。

「ふう…」

「終わったの？」

俺が手を離して一息つくと、マガンが終わったかどうか確認してくる。

「一応な」

「本当に？」

マガンに終わったことを伝えると、再確認するようにマガンが聞いてくる。

「ああ。試しに、戻ってみようとしてくれ。」

本当に成功したか確かめるために戻ってもらおうとする。

「わかった。」

マガンは俺の言葉に従って戻ろうとする。

「あれ、戻らない？ということは、成功したのね！」

マガンの姿は変わらず、人型のままだ。

「良かった…」

マガンに聞こえないように呟く。

「ありがとう！」

マガンは可愛くこつちに礼をした後、どこかに行ってしまった。

「ふう…助かった…」

戦闘にならなくて良かった…と思っていると、視界の端の方で巨大な闇が放出されるのが見えた。

「あれは…臨人のいる方向！」

その闇を見た瞬間、自分の背中に悪寒が走るのを覚えた。

「もはや…」

臨人に何かあったのかもしれない。

「今回ばかりは間違っなくてくれよ…」

嫌な予感を振り払いながら闇が見えた方向に走って行った。

第29話

竜也 Side

(クソッ！なんだこれは！)

走ってる途中に嫌な予感が増していく。

(もっと早く！)

早くこの妙な感じの正体を知りたくて、加速する。

(無事でいてくれよ！)

加速しながら親友の無事を願う。

「やっとなついた！」

しばらく走って、闇の見えた場所によくやくたどり着いた。そこには、サリエルと思われる存在がいた。だが、そのサリエルは影だけが見えていて、顔は全く見えない。

「マジかよ……」

あれじゃ天使じゃなくて悪魔じゃねえかよ……

「臨人は!？」

一瞬で正気に戻って臨人を探す。

「あれは……」

臨人を探しているうちに一振りの刀が落ちているのを見つけた。まさか……

「刀……？」

刀の近くに行き、拾い上げる。

「マジかよ……これって……」

臨人が生前よく無双ゲームで使っていた武将の刀と酷似している。確かあの時、臨人は蛇矛を使っていた……そうするとこの刀は……

「……………」

サリエルの影がこちらに気づき、こっちに攻撃を仕掛けてくる。

「うわっ！」

刀を持ちながら避ける。これは手放すわけにはいかない！

「……………」

レーザーがいたるところに飛んでくる。危なすぎだろ……

「なんでガチバトルしてるんだよ……」

このレベルでは殺し合いだ。っていうかなんで臨人はこんな状況で刀を手放してるんだよ！

「まさか……」

攻撃を避けながら嫌な結論にたどり着く。一回実際にそれを経験しただけに、俺の中で現実味が増していく。

「……………!!!」

相手の攻撃が強くなり、対処が厳しくなってきた。

「畜生！」

対処が厳しくなったとはいえ、この刀を手放すわけにはいかない。臨人が刀無しで彷徨っているかもしれないのだ。

「……………！」

サリエルの攻撃は止むことを知らないかのように降り注ぐ。

「クッ……」

だんだん被弾ギリギリになっていく。

「仕方ない！『グランドウォール』！」

自分の目の前に土が集まり、巨大な壁のように隆起する。

「なんとかなつたか……」

だが正直な所、一時しのぎにしかならない。

「どうすればいい？どうすれば助かる？」

思考を限界まで加速させる。

「……………」

サリエルの攻撃で壁が軋む。

「ヤバイぜ…このままじゃ…」

この壁の崩壊までにか対策を立てなければ…殺られる。

「第一、あいつはどこにいたんだよ…」

臨人のことを考える。あいつは簡単に殺られるやつじゃないと思うんだが…

「……………」

サリエルの攻撃で壁にヒビが入り始めた。

「ごめんな…信じてるからな…」

このまま探索を続けるのは無理と思い、離脱を考える。

「仕方ない…か…『ウインドワープ』！」

風の力を体に纏い、その場から離脱する。

「また別れかよ…」

一旦探すのを断念して、入ってきた場所に戻った。

亮Side

あの後エリスさんに普通の遊びを教えて別れたのですが、何か嫌な予感がして、臨人君のいた場所に戻ってきました。そこにはサリエルさんの影のようなものがあり、居た

はずの臨人君がいなくなっていました。

「まさか……」

それを見た瞬間、臨人君が負けたという結論に至りました。

「はあ……仕方ありませんね……」

臨人君の仇討をしてあげることになりました……本当に手間がかかるんですから……

「さて、サリエルさん……その暴走、私が止めて差し上げましょう！」

暴走したサリエルさんを止めるため、戦闘体勢になる。

「……………」

サリエルさんはこっちに気づいたのか、攻撃を開始する。

「簡単ですね……この程度……」

サリエルさんの攻撃を避けつつ、攻撃を考える。

（あれは影……ならば有効なのは光……）

「これでいいでしょう……『シューティングスター』！」

目の前に光の塊を作り出し、星型にしてばら撒くように撃ち出す。

「……………」

サリエルさんに何発か当たったが、相手に傷ができたかが全くわからない。

「これではわかりませんね……」

あれに傷をつけるには……どうすればいいでしょう……

「これでどうでしょう……『聖者の息吹』!」

吹雪のように光の粒子が影に降り注ぐ。降り注いだ光は間髪を明けずにサリエルさんに当たり続ける。

「まだ倒れませんか……しぶといですね……」

シューティングスターと聖者の息吹を使っても倒れないとは……

「ならばこれでどうでしょう! 『Got noir forever』!」

天国と地獄を連想させるような赤い闇と白い光が組み合わせり、極太のレーザーとなつてサリエルさんに真っ直ぐ向かっていった。

「……………!!?」

サリエルさんの影はそれに包まれ、もがくように消えていった。

「終わりましたか……」

撃ち終わつた後、一人小さく呟く。

「サリエルさんは無事でしょうか……」

地上に降り、サリエルさんを探す。しばらく探していたが、見つからない。

「やつてしまいましたか……」

どうやら、あの出力に耐えられなかったようです。やはり、影だけを吹き飛ばすのは

無理でしたか…

「これは…どうしようもありませんね…」

耐えられなかったなら仕方ありません。私には戻す力はないのですから。

「それにしても…臨人君と竜也君はどこでしょうか…？」

「これだけ派手に暴れたのに二人とも確認が取れないとは…

「まあいいでしょう。あの二人ならなんだかんだ生き残っていますし、大丈夫でしょう」

二人を探すのをやめて、次の目的地に向かうことにした。

竜也 Side

「戻ってきたか…」

三人でいた場所に戻ってきた。

「臨人のやつ…大丈夫かな…」

戻ってきたが、やはり不安になる。

「あやつなら大丈夫じゃ」

不安になつて俺の前に、かなり老け込んだ老人が現れた。

「あんたは誰だ？つていうか、なんで俺の言葉に応えた？」

「誰だこいつは…いきなり出てきて俺の独り言に応えて…変すぎるだろ。」

「儂か？儂は神じゃ。それも、臨人をこの世界に転生させた…な」

「は?」

「こいつが神?ありえねえだろ。」

「そのようすじやと信じとらんな?」

「そりやあな」

当然だ。いきなり出てきて「私は神だ」などという老人を信じろということ自体がおかしな話だ。

「まあ、簡単には信じてもらえんとは思っておったからの。軽く証明してやろう」

「証明?」

証明って…何をするんだらう?

「お主、星影竜也じやな?臨人の親友で、いなくなつた臨人を大学のサークルメンバーで集まつて探しておつたらこの世界に来てしまつた…と」

「なぜわかる!?!」

「だから言つたじやろう。儂は神じやと」

「どうやら本当のようだ。」

「さて、臨人は無事じやが、再び会うにはこの魔界を離れねばならん」

「魔界以外の世界に行つたのか?」

「そうじや。とは言つても、外の世界に戻ただけじやがな」

「外の世界？」

「お主らがおった世界じゃ。こつちとあつちでは時間の流れがだいぶ違うそうじゃから不安はあつたのじゃが、あの攻撃から守る手段を思いつかんかったから転移させておいた」

よかつた…一応、生きていることは生きているらしい。

「ありがとな。爺さん。臨人を守ってくれて」

「何、儂のできることをしたまでじゃ」

「ははっ、頼もしいな」

安心した。もしかしたらまた死んだんじゃないかと思っていたが、大丈夫そうだ。

「じゃ、儂はこれでお暇させてもらうぞい」

「ああ」

そう言い残して、神と名乗った老人は去っていった。

「さて、臨人も無事みたいだし、帰るか…」

老人が去っていった後、俺もこの空間から外に出た。

臨人 Side

サリエルの出した闇に飲み込まれて気を失ってしばらくして目が覚めると、見知らぬ森の中にいた。

「……は？」

周りを見渡す。どこからどう見ても、魔界の風景ではない。

「あれ？」

自分の体を見ると、サリエルとの戦いでついた傷が全て消えていた。

「何がどうなっているんだ？」

何もわからない……ここがどこなのか？なぜここにいいのか？サリエルはどうなったのか？竜也はどうなったのか？など、疑問が次々に浮き出てくる。

「とりあえず竜也は大丈夫だろ」

竜也のことについて心配になったが、もしものことがあつたら亮がどうにかしてくれるはずだ。

考えてもどうしようもないので、一旦考えるのをやめて再び辺りを見回してみると右腕に違和感を感じた。

「え!？」

右腕を見てみると、今までつけていたはずの青い腕輪がなくなっていた。これがなくたって困ることはあまりないが、今まで肌身離さず着用していたせいですごい違和感がある。

「そういえば、神に聞けば今の状況がわかるじゃん」

なんで気がつかなかったのだろう。あいつならどんな状況でも説明してくれるじゃん。

(なあ、これどういう状況?)

今までと同じテンションで神との交信を入れる。だが、神からの返答はなかった。

(おい。聞いてるー?)

返答がないので、聞いてるか確認を取る。おかしいな…今までだったら答えてくれるはずなのに…(駄目…か…)

いつまでたっても返答がないので諦める。なんで返答しなかったんだろう?

「考えてたって仕方ない…か」

わからないことを考えることはやめて、今の状況を脱却することを考えよう。

「それにしても、ここはどこなんだろうか…」

ここがどこなのか全くわからない。

「とりあえず、歩き回ってみるか…」

このまま動かないと埒があかないので、とりあえず歩き回ることにした。

第30話

見知らぬ森の中を探り探り歩き回って、脱出方法を探していた。

「どんだけ広いんだよこの森…」

森の中をしばらく歩き回ったが、生き物の気配すらない。

「なんか懐かしいな…」

初めてこの世界に来た時も森の中にいたなあ…

「しかし…ここは俺のいた世界なのか？」

歩きながら考える。第一、ここが死後の世界の可能性もある。

「それはないか…」

死後の世界とか言ったらこの世界に来る前のあの空間しか知らないし。

「そこのお前！何者だ!?!」

歩き回っていると、後ろから甲高い声が聞こえた。

「ん?」

振り返ると青い服を着た金髪の少女が立っていた。頭には目が二つついてる特徴的な帽子をかぶっている。

「見たことない顔だな…どこのものだ！」

少女は俺に対して質問してくる。

「俺か？俺は…」

しまった…あの都の名前がわからない…

「怪しいぞ！ちよつと来い！」

いきなり怪しいって…ちよつと町の名前が言えなかつただけじゃん…

「いや、断る」

人のいるところに行けるのはありがたいけど、ついて行く気はないので断る。

「そうはいかん！」

そういうとその女の子は白い蛇を大量に出してきた。

「お？やるのか？」

俺は武器を持たないまま戦闘態勢に入った。

「行け！ミシヤグジ！」

女の子が叫ぶと、白い蛇が一齐に動き出した。

「この程度か…」

こつちに向かつて噛みついてくるミシヤグジ。だが、全く統率がとれていない。確かに不規則な攻撃はできているが、うまく連携していないために避けやすい。

「クツ…」

ミジャグジを向かわせている女の子が悔しそうな声を漏らす。

「これじゃ傷一つ付けられないぜ？」

蛇たちの攻撃が激しさを増す。蛇の動きに合わせて避け続けていると、ついに連携が取れなかった結果が出始めた。蛇同士が絡み合ってしまったり他の蛇に噛み付いてしまったりしたのだ。

「あーあ…」

遠くからそれを眺める。見てて非常に気持ち悪い。大量の白い蛇が一つの球体のような見た目になっているのだ。

「早く攻撃しないか！」

女の子が蛇たちに指示を飛ばしているが、あれじゃ何の意味もない。何せ、全く動けないのだから。

「無駄だ。諦めな」

女の子にそう言い放つ。無駄な戦いはしたくないんだけどな…

「無駄ではない！まだ私が戦える！」

女の子はこつちの言葉に答えるように地面から鉄の輪を二つ出現させ、両手に持ってこつちに向かってきた。

(あれ、今地面から取り出した?)

軽い疑問を抱きつつ、向かってくる相手の対処をするためにこちらも武器を呼び出す。

(来い!滅奏!)

刃が人間一人分ぐらいの長さもある長剣を呼び出し、片手で構える。

「何!武器を創造しただと!」

女の子がそれを見ておどろいている。いや、あんたもやっただろ…

「驚いてる場合じゃないぜ?」

驚いている隙に剣を構えて突っ込む。戦いときは集中しないと。

「オラア!」

一気に接近して横薙ぎに振るう。やっぱり近接格闘のがいいな…あの時飛び道具でやったのは失敗だった。

「くっ…!」

鉄の輪で防がれる。まあ、一発で倒れるようなやつではないか…勝負挑んでくるぐらいいだし。

「まだまだ行くぜ?『燕舞』!」

罅迫り合いをしていた剣を滑らせるように外し、相手の武器の間合いを抜けて相手の

背後に回る。その後、その場所から相手に向かって剣を脇に構えて突っ込み、反対側に回る。そして、その場所から相手に突っ込んで反対ではなく少しずれた位置に止まる。不規則に場所を移動して、反撃の隙を作らせないように攻撃を仕掛ける。

「しまった…」

何度も繰り返すうちに、相手に限界が来てこっちの攻撃を弾こうとして鉄の輪を振るった瞬間鉄の輪を手放してしまった。それを見逃さずに相手の女の子の喉元に刃先を近づける。

「俺の勝ち…でいいか？」

投降を勧める。

「くそっ…私の負けだ…」

女の子が負けを認める。それを聞いた俺は刃先を外して女の子に背を向けて歩き出す。

「待て!」

女の子が俺を呼び止める。

「どうか…どうか民には手を出さないでほしい…」

泣きそうな声で女の子はそう言う。

「民?」

それを聞いて立ち止まる。だが、俺には何が何だかわからなかった。民？ということ
は、この女の子はどこかの国の長なのか？でも、この辺りに国があるとも思えない。そ
もそも、こんな女の子が『民』というものを思うような立場の子なのか？

「私の国の民は私のせいで命の危機に瀕している…だというのに、さらに危機を増やし
たくはない…」

女の子が続ける。相当この子の言う『国』はピンチのようだ。

「どういうことだ？」

この子の話が一旦止まった頃を見計らい、聞き返す。状況が整理できない。まず、こ
の近くに『国』というものがあるのか、ここはどこなのかなど、いろいろ聞きたいこと
があった。

「お前は大和の神ではないのか？」

「大和？」

大和って、歴史の出てくるようなアレのことか？

「違うのか？私のはてつきり大和の神が来たのかと…」

「どうやら、盛大に勘違いされたらしい。」

「俺は大和の神じゃない。というか神じゃない。川神臨人。人間だ」

隙間を見つけて自己紹介をする。また間違えられたら怖いしね。

「川神…というと、人ながら宵闇の妖怪を従えて月移住計画を成功させたというあの『月の英雄』か!」

どうやら、この近くでも有名らしい。というか、あれで成功なんだね…移住計画…

「なぜ生きているのだ! 都の兵器の自爆に巻き込まれて死んだという記録が残っているというのに!」

待て。今なんて言った? 死んだ? 記録?

「ちよつと待つてくれ。なんで記録なんだ? おかしいだろう?」

気になったので聞いてみる。

「おかしくないだろう! 月移住計画といえば、今から1億年以上も前の話だぞ! 記録ぐらしいしか残っていない! むしろお前がおかしいだろう! なぜ生きている!」

い、1億年以上前だと…俺たちが魔界にいる間にそんなに時が経つてたのか…

「なぜ生きているかは分からない。でも、その記録を聞く限りでは俺が『月の英雄』なんだろうな」

どうやらだいぶ時が経って、あの計画は伝説になったらしい。

「なぜ生きているかは分からない…か。当然と言えば当然か。あの爆発に巻き込まれて生き残っていたものはいないと言われる爆発で死なないのだから…」

なんか納得された…

「少しいいだろうか？英雄様」

英雄って知つたら言葉遣い一気に変わったな…

「どうか、私の国を守ってほしい」

まじかよ…普通戦つた相手に任せるか？まあ俺はいいけど。

「わかつた。だが、一つだけ条件がある」

「なんででしょうか？」

「俺は親友を探している。もし親友が見つかつたらすぐに親友のもとに向かうが、それでもいいか？」

「…」

国を守ってくれという頼みに俺は応じた。なぜなら、今の状況をだいぶ説明してくれただから、その恩を返そうと思つたからだ。だが、無条件では戦いを挑んできた相手を信用できないから、条件をつけた。でも、実際に竜也が見つかつたら何処へでも行くんだけどね…

「わかりました。その条件を飲みましょう」

「どうやら、納得したようだ。」

「よし、交渉成立だな」

「こうして、俺はこの子の国を守ることになった。」

第31話

あの後女の子に手を引かれながらあの子の国へ辿り着いた。前もあつたなこんなこと…輝夜ちゃんや永琳さんは元気にしてるかなあ…って、普通だったら死んでるのか…寂しいな…

「……が私の国です」

女の子が到着の旨を伝えてくれる。ここに来るまでも結構話をしていたので、だいぶ口調が柔らかくなっている。その間に、お互い軽い自己紹介をしてみた。この子は洩矢諏訪子という神らしい。この時代は神が国を治めているが、大和の神が侵攻戦争を始めているらしい。他の神はことごとく降伏してしまったが、この洩矢の国は最後まで生き残つてるらしい。

「……」

諏訪子に言われた方を見ると、国というにはあまりにも小さな村が広がっていた。

「……」

そういうと、俺の手を引いて村の奥に入つて行つてしまった。

しばらく歩いてみると、村の奥の神社のような場所に着いた。

「こちらが私の神社です」

そういうと神社の境内に入って行った。

神社の境内を過ぎて、本殿のような場所で諏訪子が神妙な面持ちで一通の手紙を渡してきた。

「この手紙に私たちの国の状況が書いてある。読んでみてくれ…」

「何々…」

渡された手紙を受け取り、読み始めた。

『洩矢の神へ』

・洩矢の神よ。おとなしく我らに信仰を明け渡せ。さもなくば、大和の神々が総力を挙げて貴様の国を滅ぼすであろう。国が惜しければ、我々に従うことだ。賢明な判断を待
つ

大和の神』

「……………」

手紙を読み終わると、諏訪子が悔しそうに俯いた。それを見て、俺は打開策はないかと考え始めた。

(どうにか打開する策はないか?)

「…信仰を失うと神は死んでしまうんだ…明け渡せば、命を掌握されるのと同じだ…」

考えている俺の横で、諏訪子が重々しくつぶやく。神って信仰命とはいうけど、マジで生命線だったのか…

(ヤバイな…このままでと諏訪子は死ぬか大和に生存権を握られることになるのか…)

目の前でこんなことになって黙っているわけにもいかない。でも、俺の力でできることと言ったら攻めてきた神々から諏訪子を守ることぐらいだ。国までは守れない…

(どうする？ どうすればいいんだ？ 俺は？)

こんな時、あいっすらだったらどう考えるんだろうか？ 竜也なら？ 亮なら？

「私はこの国を守りたい。そのためなら命だつて捨てるつもりだ」

迷走する俺をよそに諏訪子は淡々と話を進める。

(クソツ！ こんな子が命を捨てるなんておかしいだろ！)

「とりあえず大和にもう一度話をつけてみる」

「そうか…」

「じゃ、今日はこの件の話は終わり。そっちの話を聞かせてよ」

「あ、ああ…」

諏訪子は笑顔を浮かべてこつちのことを聞いてくる。だが、その笑顔に無理が見えた。

そして…

月移住計画の後に魔界に行ったことを話したら、「本当に人間？」と真顔で言われた。失礼な…人間だよ。

「…と、こんなところかな」

「まずまず人間かどうか怪しくなったね…」

「いや、人間だから…」

また人間かどうか疑われた…なんて思っていると、神官？が一人入ってきて、報告を開始した。

「諏訪子様、大和の神が来ています」

「何だって!」

諏訪子が驚きの声を上げる。まさかこんなに早く来るとは思ってもいなかったのだらう。

「ですが…今までのような高圧的な態度ではなく…妙に焦っているというか…」
「どういうことだ?」

今までと態度が違う?何かあったのだろうか…

「とにかく、見に行ってみよう。俺も行くからさ」

「わかった」

諏訪子連れて、ここに来たという大和の神の元へ向かった。

第32話

神官についていき、来たという大和の神の元へ向かった。

「もしかして、策じゃないのか?」

諏訪子が策略じゃないかと疑っている。

「もし策だとしたら、俺がなんとかしてやる…」

「わかった…」

諏訪子を安心させて、大和の神の前に来た。

「洩矢の神か? 頼む! 助けてくれ! 今はどんな戦力でも欲しい!」

「え?」

大和の神が諏訪子を見つけるなり、助けを求めてきた。

「何があつたんだ?」

とりあえず事情を説明してもらわないことには、何が何だかわからない。

「龍が…龍が暴れているんだ! 銀色の龍が!」

「銀色の龍!」

諏訪子が驚いている。

「銀色の龍が…所構わず暴れるせいで宮殿がボロボロなんだ！」

「そんなに強い龍なのか!？」

「強いも何も、スサノオ様、アマテラス様、ツクヨミ様が挑んでも倒せないんだ！」

大和の神が息を切らしながらそう話す。しかし銀龍か…あいつ…なわけないよな…
『龍』じゃなくて『竜』だし…龍化なんて出来るはずないし…

「そんなやつがいるのか…」

諏訪子が恐怖の中絞り出したような声を上げる。

「もし協力してくれたら、安泰を約束しよう！これはアマテラス様も言っている！」

「どうしよう…」

諏訪子が迷っている…これは、行かせるべきだろう…俺もついて行って、諏訪子を守ればいい。

「行こう…諏訪子と大和の関係はわかる…でも、俺が守るから…大丈夫。なんとって、月の英雄だぜ？」

「そう…だね…」

諏訪子が渋々といった形で了解する。

「協力感謝する！」

大和の神が俺たちに一礼して、感謝を述べる。

「さあ、行こうぜ？大和の国にさあ！」

「わかった！案内する！」

来ていた神の案内により、大和の国に向かった。

「ついたぞ。ここが大和だ」

「ここが…」

案内してくれた神が到着の旨を教えてくれる。

「さて…」

「本当に大丈夫なのか？」

俺が気合いを入れ直していると、諏訪子が恐る恐る聞いてきた。大丈夫だって言った

ろうに…

「ああ、大丈夫だ。そう簡単には負けねえよ」

とはいえ、サリエルに負けだばっかりだから、俺自身も不安なんだけどね…

「協力を頼んでおきながら言うのもなんだが、すまないな…」

「いいってことよ。危険なんだろう？自分らの立場も気にできなくなるぐらい」

「……………」

俺の言葉に神は無言で頷く。大和に対していい感情は抱いてない。でも、ここまで…
誇りを捨ててまで頼ってきたやつを…無視できない…

「さあ、こちらへ」

神は諏訪子と俺を奥へと案内した。

「わかった」

諏訪子はその神について奥に入っていた。

「あなたは どうするのですか？」

「ちよつと待つててくれ。すぐに行く」

「わかりました」

俺の言葉を聞いた神と諏訪子は先に奥に向かつていった。

「ふう……」

さっきまでの神の様子を見ていると昔を思い出す。

『私は、あなたを殺すために妖怪に身を投じました』

俺のせいで妖怪に身を投じたあいつの姿が思い出される。思えば、あいつも誇りを捨てて……『自分の大事に思ったもの』を守るために戦ったんだ……それも、『格上とわかつている奴』を相手に……俺は……そんな『覚悟』が必要なかもしれない。

「考えたって仕方ないか……」

覚悟とかそういうものはすぐにできるものじゃないことはわかっている。でも、そろそろ覚悟を固めなければ……また負ける……ダメだ……切り替えよう……

「さて…銀龍…か…」

意識を切り替えると、親友であるあいつのことが浮かぶ。おそらく、『銀』というワードと『竜』というワードの二つに反応してしまったのだろう。

「もし、その銀竜があいつだったら…どれだけ楽だっただろう…」

思わず呟いてしまう。その銀龍があいつなら、話し合いとかでなんとかできたかもしれない。

「まあ、いろいろ考えたって仕方ないな…いつも考えちゃうけど…」

これは俺の悪い癖だ。考えたってどうにかなるわけじゃないし、考えたところで俺の脳じゃ何も浮かばないのがオチだ。

「ああもう…さっさと銀龍片付けよう！」

もう油断はしない。早く片付けて諏訪子の安全を確立して、竜也と亮を探す旅に出よう。

「さて…やるか…」

俺なりの覚悟を固めて、奥に向かった。

第33話

奥へ進み、本殿だったであろう建物の中に入ると、嵐でも来た後かのような悲惨な光景が広がっていた。どこを見渡しても瓦礫の山、死体の山、血だまりと、魔界でも見たことないような悲惨な光景だ。

「マジかよ……」

相当銀龍が強いのだろう。そこかしの無事だった壁にも、大きな爪の跡や細長い凹みが出来上がっている。

「龍は……どこだ？」

龍を探す。どうやってここまで来たって？ 適当に走って、一番大きな建物目指して走ってきたただけだが？

「おかしいな……神もいない……」

ここにきてから、生存者に会っていない。まさか、考える時間が長すぎて全滅しちゃったとか？

「おい！ そのお前！ ここは危険だ！」

考え事をしていると、この環境には似合わない爽やかな声が聞こえた。だが、声色は

怒りと焦りが混じったようなものだ。

「今は銀龍が暴れている！今は結界で押さえているが、いつまた暴れだすかわからない！すぐにここから離れるんだ！」

爽やかの声の持ち主はすぐにここから離れるように指示する。その声に応えるように振り向くと、屈強な肉体を持ち、どこからどう見ても強そうな男がいた。

「あんたは？」

「今は自己紹介なんてしててる場合じゃない！すぐにここから離れるんだ！」

その男は一刻も早く避難しろと俺に言う。

「離れる？何言ってるんだよ？今は少しでも戦力が必要なんじゃないの？」

「確かにそうだが、一般人がいていい場所じゃない！」

「おいおい…人を見た目で判断するなよ…」

「だが…」

なんとも失礼な…ここまで来て避難？そりゃねえよ…

「来い！鉄騎尖！」

銀龍の前で武器を出すつもりだったんだけど…戦える証明をしないとイケなさそうだったので、武器を出す。いつもの鉄騎尖だ。

「虚空から武器を出現させただと…まさか、あなたは…」

「月の英雄…らしいけど、文句あるか？」

「まさか月の英雄だとは…」

「さて、銀龍をどうにかしたいんだろ？案内してくれよ」

「ああ、わかった」

「どうやら、俺は月の英雄として有名らしい。月の英雄として伝わってるのが能力だけなのは悲しいけどな…というか、この能力をどこで知るんだ…」

「……だ」

「爽やか神に案内され、銀龍がいるというところまで来た。」

「さっきも言ったが、今は姉さんたちが全力で結界を張って止めてる。今から姉さんに『月の英雄が来た』って言って、結界を解除させてくるから待つてくれ」

「大丈夫かそれ？」

「おそらく大丈夫だ。今まで俺たちは『月の英雄』と『宵闇の銀龍』を血眼になつて探してきたんだ…むしろ、疑わずに喜んでくれるさ…まあ、今回の銀龍騒動はだいぶ堪えてるみたいだけど…」

「銀龍…あいつも銀龍って呼ばれてるんだな…」

「さて、俺は行ってくるぜ？」

「わかった」

そう言って、爽やか神は奥に行ってしまった。

「どうなることやら…」

信じてもらえるとは思っていない。だが、もし急に銀龍が出てきたらやばいので警戒は怠らない。「さて…」

どちらにせよ、銀龍との対決は…近い…

第34話

アマテラス side

「銀龍は…抑えられないのでしようか…」

私は今、暴れ出した銀龍をみんなと共に結界で抑えています。いつも『宵闇の銀龍』が、『月の英雄』が復活することを望み、その二人を象徴にしてこの天下を統一しようとしています。この銀龍の暴走は、その報いなのでしよう。死んだはずの存在を蘇らせ、それを利用しようとした私たちへの…

「姉さん！『月の英雄』が！『月の英雄』が生きていた！」

「何ですって！それは本当ですか！」

入ってきた私の弟、スサノオが素つ頓狂なことを言う。『月の英雄』が生きているわけがないでしょう。

「間違えじゃない！俺はこの目で見た！虚空から武器を出す男を！」

「なっ！」

虚空から武器を出す…簡単にできることはありません…

「それに、武器も伝承にあったものと似通っている！」

「それが本当だと信じられる証拠は？」

「なら、そいつをここに連れてくる！」

「わかりました……」

スサノオはそう言い残して、元来た道に戻っていった。

「あり得るはずが……」

言葉ではそう言いながら、期待している自分がいる。

「スサノオ……お願い……」

『月の英雄』なら……銀龍を……

アマテラス side out

臨人 side

爽やか神が奥に入った後、銀龍とどう戦うかを考えていた。蛇(?)を倒したことはあるけど……龍はな……それも銀龍か……

「竜也……」

銀の竜と言われるかと思いきや出してしまう。早く探しに行かなくては……

「待たせたな！向こうで姉さんが待ってる！」

「わかった」

爽やか神が戻ってきて、姉さんとやらのところへ案内してくれるようだ。

さあ、銀竜の元へ向かおう…

「連れてきたぜ！姉さん！」

爽やか神の案内で銀龍のいる場所に来た。銀龍の前でめっちゃ光を放ちそうな女の人が他の人？神？たちとともに頑張ってる。

「スサノオ！本当に『月の英雄』なのですか!？」

女の人がそう言って爽やか神に確認を取る。こいつスサノオだったのか…

「ああ！本物だ！」

爽やか神改め、スサノオの言葉に続いて名乗りを上げる。

「俺は川神臨人。『月の英雄』って呼ばれてるらしい」

「本当に月の英雄がいるとは…」

「あんたは？って、そんな場合じゃないか…」

結界維持に意識を持って行ってるため、話せる状況じゃないよな…

「とりあえず、他の神を避難させてくれ」

「わかりました。スサノオ！協力しなさい！」

「わかった！結界維持は任せろ！」

「念のため、ツクヨミも一緒にやってください！」

「わかりました…」

アマテラスがツクヨミの名を呼ぶと、銀髪の超クールそうな佇まいの男が現れた。

「あなたが私の大事な民を守ってくれた英雄ですか…と、話したいことはありますが、後にしましょう」

そう言い残すとツクヨミと呼ばれた男はスサノオとともに結界の維持を始めた。

「皆…ここは私達に任せて離れなさい！」

その号令のもと、神々が一斉に離れる。

「くっ…」

「厳しいですが…英雄の前で諦めるわけにはいきません…」

スサノオとツクヨミの顔が曇る。結界にもヒビが入り始めている。

「手伝いますよ？臨人君…」

まさか…この声…

「大和の神が揃ってもこれとは…相当強いんでしょうね…この銀龍は…」

全身青に包んだあの男が現れる。

「結界の維持はお手の物ですよ…？」

そいつがツクヨミ達が張ってる結界に触れると急に強度が上がり、入っていたヒビが消える。

「全く…なぜ竜也君に会う前に銀竜に会ってるんですか…」
「亮！」

神薙亮が、駆け付けた。

「さて、残っている皆様も避難したほうが賢明ですよ？」

亮は残っているスサノオ達に言うように避難勧告をした。

「それと、入口から覗いてるその小さな神様…あなたも避難しては？」

「なっ…！」

まさか…諏訪子が!?

「無関係な臨人が頑張ってるのに…私が何もしないのは…」

「ですが、あなたの力では…」

「なら、私が力を貸そう！」

力強い声がこの場に響く。

「軍神・八坂神奈子、見参！」

「軍神ですか…」

「銀竜に直接攻撃することはしないよ。私じゃ届かないからね…でも、攻撃を防ぐぐら
いなら、できないことはないよ！」

八坂神奈子が俺たちに言い聞かせるように言う。

「そうですか…まあ、自分の実力はわかっているようですね…わかりました」
亮が静かに了承する。

「俺たちも残ろう！」

「神奈子にそこまで言われては、私も残るしかありませんね…」

「弟たちが残ると言って、姉である私が残らないわけにはいきません…」

「どうやら、みんな残るようだ。」

「なら、銀龍との戦いを始めますよ？」

亮はそう言うと、結界を解除した。

「グギャアアアアアアア！」

銀竜の咆哮が響く。さあ、開戦だ！

第35話

亮が結界を解除したとともに、自由になった銀龍が暴れ出した。

「ガアアアア！」

「うおわつと」

銀龍は自由になるや否や俺めがけて突進してきた。

「気の早い奴だ……」

銀龍の動き出す速さを見て眩く。

「グオオオオオ！」

銀龍は綺麗に旋回して俺の後ろから突っ込んでくる。なんでわかるかって？もの凄い空気の音がしたら誰だつてわかるでしょ。

「おつ……と」

銀龍の連続突進を避けて、体勢を立て直す。

「喰らえっ！銀龍よー！」

俺が体勢を立て直している間に、おそらく天羽々斬であろう剣を振りかざしてスサノオが突っ込んでいく。

「ガアアアアア！」

「なっ……！うわっ！」

銀龍がスサノオに向けて咆哮を放つと、スサノオが吹っ飛ばされた。

「マジかよ……」

スサノオを吹っ飛ばすってどんな威力だよ……

「スサノオが吹き飛ばされるとは……」

ツクヨミも動揺している。まあそうだよな。自分より強そうな奴があんなに簡単に吹き飛ばされれば不安にもなるよな……

「おいスサノオ、大丈夫か？」

「ああ……だが、まさかこの俺が吹っ飛ばされるなんてな……」

スサノオの声に動揺が出る。

「喰らいなさい！」

ツクヨミが俺たちの後ろから細い光線を放つ。

「ガアアアアア！」

「なっ……月の英知の結晶が……」

ツクヨミの放った光線は、さつきスサノオに放った方向と同じものを受けて消え去ってしまった

「スサノオ！ツクヨミ！」

アマテラスの悲痛な叫びが響く。肉親二人が全く齒が立たないってわかったら辛いよな…さすがに…

「アマテラス様！絶望してる暇はありません！」

神奈子がアマテラスに呼びかける。

「スサノオ様もツクヨミ様も死んだわけじゃありません！それに、我らには『月の英雄』もいます！」

「そうだ！私たちには『月の英雄』臨人がいる！負けるわけがない！」

神奈子に続いて諏訪子も叫ぶ。『月の英雄』か…大変なもの背負ったな…

「俺は…」

銀龍が相変わらず向かってきているのをかわしながら呟く。俺にあの龍は…殺せない…竜也の姿がちらついてしまう…

「臨人君！みなさんは君に期待しているようですよ！」

亮が珍しく大声で言ってくる。

「でも…」

「アレと竜也君は違います！なぜためらう必要があるんですか！」

亮が俺の迷いを断ち切ろうと言葉を紡ぐ。

「第一、あれを竜也君と思う時点でおかしいでしょう！」

「……………」

「貴方の知っている竜也君はどんな人でしたか!? あんなものではなかったでしょう！」

「……………」

「あれを竜也君と思うなんておかしいですよ！ 竜也君はもつと優しかったでしょう！」

「……………」

「もつと『親友』を信用しなさい！」

「…わかったよ！」

亮の呼びかけで目が覚めた。あれは『竜也』じゃない…ただの『銀龍』だ…

「行くぜ！ 『五月雨突き』！」

鉄騎尖を振るい、目にも留まらぬ速さで突きを放つ。

「ギャアアアア！」

銀龍の大きな図体に槍が突き立てられる。だが、銀龍が怯むことはなかった。

「ガアアアア！」

「くっ…！」

ひるまずに向かつて来た銀龍の突進をまともに受けてしまう。

「負けるかあ！」

吹っ飛ばされながら体勢を立て直し、瓦礫を利用して再び銀竜に突撃する。

（連続攻撃では駄目：：なら、一撃でケリをつける！）

「『至高の一閃』！」

銀龍の眉間（あるの？）を狙い、今出せる最大速度で突きを放つ。その突きは、寸分
違わず銀龍の眉間を貫いた。

「グギャアアアアアアア!!」

銀龍が苦しみもがく。結構深々と刺さった感触があつたため、相当深くまで刺さつた
のだろう。

「でやあああー！」

銀龍がもがいてる間に銀龍に刺さっている鉄騎尖を引き抜いた。

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアア!」

銀龍の断末魔が辺りに響き渡り、その大きな体が地面に倒れ伏した。数秒で断末魔は
聞こえなくなり、銀龍は動かなくなった。

「勝った…のか?」

俺たちの向こう側で見ていたスサノオが呟く。

「銀龍は…どうなったのですか…?」

スサノオの隣で見ていたツクヨミが続いて呟く。

「これは…私たちの勝利…ですか…？」

二人より後ろで見ていたアマテラスも二人に続いて言葉を漏らす。
「終わりましたね…」

他の神とは違う場所から見ていた亮が、俺に近づきながら言う。

「そうか…俺は…勝ったのか…」

亮の言葉を聞いて、無意識のうちにその言葉をつぶやいていた。

(竜也…)

横たわる銀龍の死体を見て、親友のことを思い出してしまう。

「臨人君…さつきも言ったでしょう…」

「お前…心読むなって…」

「顔に出ていましたよ…」

亮が俺の心を察してこの龍は竜也じゃないと念押ししてきた。

(そうだよな…これはただの銀龍だもんな…)

そう思い、心に整理をつける。

「さて、どうしますか？」

「何が？」

「そろそろ大和の神の注意が銀龍からそれますよ？」

ちなみに今、俺たちはちようど銀龍を挟んでスサノオ達と分断されている。スサノオ達からは俺と亮のことは見えていない。俺たちからもスサノオ達が見えないわけだけど。

「大和の神に見つかれば、祭り上げられて自由に動けなくなりますよ？」

「そうか…厄介だな…とはいえ、どこかに行くあてがあるわけでもないんだよな…」

「ですが、竜也君を探すのには自由な方がいいのでは？」

「確かにそうだな…」

「私はここに残りますので、臨人君はここから離れて竜也君探しに行ったらどうですか？」

「だが、情報がないぜ…」

「なら、諦めますか…？」

「諦めるわけねえだろ！」

「ふふふ…そう言うと思いましたよ…」

「情報なしがなんだってんだ！やってやるよ！」

俺は行く当てもなく大和を離れ、旅に出た。

第36話

俺は行く当てもなく旅を続けていた。正直、魔界で竜也と別れたのだから、簡単に見つかるはずがないのだ。

「やっぱりダメか…」

陸続きのところは大体探した。山だろうと森だろうと樹海だろうと探せるところはすべて探した。やはり魔界に残って待つてるのだろうか…

「魔界…どうやっていけばいいんだ？門どこにあるのかわからないし…」

竜也に案内してもらったあの門の場所と今いる場所が一致するわけがないのだ。

「まあいいか…魔界の門を探しながらこの世界でも竜也を探していこう…」

どうあがいても仕方がない。俺は転移系の能力を持ってないから、こうして探すしかないのだ。

「海を越えるかあ…」

正直、望みはかけてないが海の向こうというわずかな可能性にかけることにした。

現在俺は海の上を飛び続けている。方向もわからなくなってきたし、元来た方向を見ても陸が全く見えなくなるぐらい飛び続けていた。

「どこだ……」

どこを見ても水、水、水。陸が全く無い。

「どうしよう……陸が無いと休めないんだが……」

人間、陸がないと足がつかない。水の上で歩くみたいな感じで浮くことも考えたが、いくらなんでも水が冷たいのでそれはしたくない。

「さて……陸が見つからないものか……」

一人で愚痴りながらも陸を探して飛び続ける。

「あれ？もしかして……」

愚痴り続けながら数時間？飛び続けてたら視界の先に陸っぽいものが見えた。

「行ってみるか……」

とりあえず野宿でもいいから休みたい。飛び続けるのは疲れるって……

「よっ……と」

陸に近づいて着地する。ここに来るまでずっと休まずに飛んでたからもうクツクツだ。

「さて……ここはどこだろうか……」

着地したはいいものの、ここがどういふ場所なのかが全くわからない。周りを見ても森ぐらいいしか見つからない。

「これは…森暮らしかな…？」

「家もなさそうだし…森に秘密基地的な作ってそこで生活かな？」

「仕方ないか…」

「そう呟いて、森の中に入っていった。」

「さて…」

森の中に入ったわけだが、まずは水を探そう。人は水を飲まないでいると三日で死ぬというしな。まあ、俺は転生特典で死なないけどね。え？さつき水辺にいただろつて？海水は飲めないんだよ！飲んだらむしろ体の水分抜けるわ！とにかく、水を探さないことには辛い生活になるのは確定だ。

「さて…水～水～…」

だが、そう簡単に見つかるものじゃない。結構こういう場所の水は貴重なのだ。

「おっ…」

少し先から水の音が聞こえてきた。運がいいな…すぐに水を発見できるとは…

「ラッキー、水みつけ」

水を飲んでみると、赤くてめっちゃやかいかい鳥がこっちに向かっていた。

その鳥は俺の隣に降り立つと、強烈な威圧感を出しながらこう聞いてきた。

「見知らぬ顔だな…私の領地で何をしている…」

えつと…鳥の…領地？俺はとんでもないところに来てしまったのか？いや、魔界に行った手前驚くこともないか…

「えつと…その…水が欲しくて…」

「なら、私の領地でなくともよかろう」

「あ…俺この辺りに来たばかりだったんで、そういうの知らなくて…」

「ほう…この辺りに我を知らぬ者が来るとはな…」

そんなにこの辺りでは有名なやつなのか？この鳥つて…

「仕方ない…特別に名乗ってやろう。我が名は朱雀。この国の南方を守る神である」

「朱雀…？」

ヤツベエ…マジヤベエよ…朱雀つてあの朱雀？無双で体力上げるアイテム『朱雀翼』の元になったあの朱雀ですか？

「それに、私の領地に人は来ることはできぬのだが…なぜここに来ることができた？」

「それは…」

どうすればいい…相手は神だぜ？明らかに下級じゃない、めっちゃ上位のやつだろあれ。下手に戦いになると絶対消耗する…

「わからない…」

「わからないだど？」

「ああ。気がついたらここにいた」

「ふむ…すぐには信じれぬが、そう思うよりほかはあるまい。我に気取られることなくここまでたどり着いた者は貴様が初めてだからな」

「え？」

「ここまで来ようとした人間を我は何人も見てきた。だが、大体の人間はここまで至ることなく死んでいった。自然の脅威とやりに敗北してな…」

そんな危険な場所だったの…？海からすぐに侵入できたんだが…

「今この国は非常に荒れておる…貴様を安全な場所に送ろうとしたが…安全な場所はこの国には無いな…」

「なら、ここにいさせてくれよ」

「何だと？」

「その争いを終わらせれば平和になるんだろ？だったら、俺が協力してやるよ」

「人間ごときに我らの争いを終わらせれるとは思えぬが…」

「安心しな、戦の腕には自信があるんだ」

「ふむ…なら、試してやろう。我を倒せたなら、他の神も倒せるであろう」

マジか…戦闘か…

「仕方ない…」

小さく眩きながら、いつも通り武器を出す。

（来い！双極星！）

長い柄の両端に刃の付いた広範囲をなぎ払って、前方も後方も攻撃できる特殊なものだ。

「ほう…虚空から武器を出す…人々の伝承にある『月の英雄』の如き力だな…」

「月の英雄…か」

（本人なんだよなあ…）

朱雀の言うこの国にもどうやら俺の過去は伝わっているらしい。

「英雄の如く力を持つ者よ！見極めてやろう！」

朱雀はそう言って突っ込んでくる。

「さて…やるぜ！」

朱雀に対して俺も突撃する。さあ、戦闘開始だ…

第37話

どうも、臨人です。朱雀と戦闘になっちゃいました。鳥と戦うのは面倒なんだけど……
「ハアッ！」

掛け声とともに朱雀の爪が俺の体を襲う。

「くっ……」

突っ込んでくる朱雀をいなす。爪鋭すぎだろ……しかも、いなした時に軽く熱を感じたぞ……

「油断するでないわ！我はそこらの鳥とは格が違うぞ！」

「わかつてるっての……」

朱雀はすぐに方向転換して大きな隙を作ることなく迫ってくる。

（銀龍ほど威力は無いが……速さが厄介だな……）

朱雀について分析する。鳥だから力は強く無いだろうけど、速さと熱は明らかに厄介だ。糸のような切れ味皆無のものでも、とんでもない速さでぶつければ凶器になる。朱雀のソレは糸のような弱いものではなく、明らかに切れ味がやばそうな爪だ。それに、熱も持っている。それをあの速さでぶつけられたらただで済むはずがない。

(せめて速さを殺せれば…)

速ささえ殺してしまえば、最大の武器は無くなるはずだ。

「どうした英雄もどきよ？攻めねば負けるぞ？」

「攻め時を…探してんだよっ！」

相変わらず朱雀の攻撃をいなしながら、思考を巡らせる。

(クソツ…埒があかねえ…)

このまま防戦一方では、本当にどうしようもない。どうにかして傷の一つでもつけな
いと…

(相手は速い…なら、それを利用できるんじゃないか?)

相手がそれだけの速さで動くなら、こっちの刃が止まっても触れてさえしてしまえば大きなダメージをあたえられる!

「これならどうだっ！」

突っ込んでくる朱雀の脚に触れるように刃を構える。あのスピードだ…避けられるわけがない

「ぐあああー！」

狙い通り、朱雀の脚に双極星の刃がヒットした。ダメージを受けた朱雀は、さつきま
でと比べて格段にスピードを落としている。

「これで戦えるようになったな」

小さく呟く。

「人の身でありながら我に傷をつけるとは…やるではないか」

「伊達に色々経験してないでねっ！」

今度は俺から攻める。双極星の片方の刃を朱雀に向け、突っ込む。

「だが、傷つけた程度で勝った気になるのは甘いぞ！」

朱雀はあろうことか俺に向けて火柱を撃ってきた。

「うわっ！危ねえ！」

即座にサイドステップで火柱を躲す。

「良い判断だ。だが、いつまで避けられるかな？」

朱雀が俺に向けて幾つも火柱を飛ばしてくる。

「避け続けるのは無理か…なら…」

火柱に向かって突っ込んでいく。よく戦記物とかで見ていたアレをまさか自分でや

る日が来るとは…

「オラオラア！道を開けろ！」

持っていた双極星を風車のようにものすごい速度で回し、火柱をかき消しながら突っ込んでいく

「なぬう!？」

朱雀が驚きの声を漏らす。まあそうだよ。まさか火柱をかき消して進むなんて誰も思わないよね。

「これで終わりだああああ!」

朱雀に刃が当たった距離になった瞬間に回転を止め、双極星を構え直して朱雀に向けて振り抜いた。

「グハッ……まさか人間如きにここまでやられるとは……」

振り抜いた刃は見事に朱雀の体に突き刺さった。

「見事だ……貴様ならあの戦いを終わらせれるやもしれんな……」

こうして、俺は朱雀に認められた。

第38話

あれから、朱雀が回復した後背中に乗せてもらって朱雀が住んでいるという場所に運んでもらった。そして、今この国がどうなっているのかを教えてもらっている。

「現在この国はある者に狙われておる」

「狙われている？」

「うむ、そやつは我らを従えてこの世界を従えるのを狙っておる」

「相当な野心家もいたもんだな……」

この世界を従える……ねえ……

「そういえば貴様の名を聞き忘れておったな。貴様、名を何という？」

朱雀が名前を聞いてくる。

「自己紹介がまだだったな。ここまで連れてきてもらっておいて、俺としたことがすっかり忘れてたぜ」

さて……驚かせてやるか。

「俺は川神臨人。『月の英雄』なんて呼ばれてるようだが……まあ、普通に人間だ」

「なんと！本物であったか！」

俺の読み通り朱雀が驚く。やっぱ『月の英雄』ってすごいんだなあ…

「だが、本当に『月の英雄』なのかどうか確かめさせてほしい」

「どうやって確かめるんだ？」

「四神皆と戦ってもらおう。本当の『月の英雄』なら我らも打ち倒せよう？」

「なるほどね…」

「どうやら、相当『月の英雄』を強いものと見ているようだ。四神と戦うなんて…あと三回さつきと同じ戦いを繰り返さなくてはいけないのだ。」

「青龍も玄武も白虎も皆、この地を守るという意志は備えているのだが…どうも皆は己のみで対抗しようとしておる…我は皆が足並みをそろえずそれぞれで戦えども意味がないと思うておる」

「まあそうだよな」

「我はこの地を守りたい。だが、奴に勝つには我のみでは足りん」

「だから、皆に俺を認めさせて説得をしろ…」

「神が人にものを頼むなど恥ずかしい話だが…」

「なるほどね。任せな」

「よいか？」

「ああ」

朱雀の語りから朱雀が本気でこの地を守りたいというのが伝わってくる。これを聞いて動けないようじゃ、俺は『英雄』と呼ばれる資格なんて無い。

「でも、朱雀にも協力してもらわなきゃならないことがある」

「協力？」

「その、青龍や玄武、白虎の居場所は俺知らないから連れてって…」

「そうであつたな…」

「こうして、俺は朱雀と協力して四神を倒すことになった。

現在、俺は朱雀の守る地を見て回っている。

「そういえばさ、さっき言つてた『国を狙うもの』つて？」

「説明し忘れておつたな。今、『古代より生存した復讐者』に世界が狙われておる。なんでも、復讐を果たさねば死ぬぬと言つておるらしい」

「また厄介な…」

「だが『月の英雄』もこちらに來た今、我らと貴様が力を合わせれば恐るるに足らんであらうな」

「あまり油断すると痛い目見るし、油断はしないようにしないとな」

朱雀と話しながら歩いてみると、朱雀とは別の神々しきさを含む声が聞こえてきた。

「ほう、珍しいこともあるものだな」

「貴様は……」

声のする方を見ると、巨大な白い虎がいた。

「朱雀よ……あまり姿を見ぬと思つたら下等な人間とともにおつたのか」

「白虎……この者は下等では……」

「たかが人間一人など、我ら神の前では無力だ」

朱雀と白虎が神同士で話している。

「人間……悪いことは言わぬ。今ここから立ち去れば命だけは取らずにいてやろう」

白虎が挑発してくる。だが、俺としては好都合だ。四神が一匹向こうから来たんだ

し。

「立ち去らねえよ。朱雀と約束したからな。この国を救うと」

「人間ごときが……この国を救うとほざくか……」

「ああ。救つてやるさ」

「気が変わった。人間、貴様はここで殺してやる！」

「やれるもんならやってみやがれや！」

（来い！虎撲殴狼！）

長さが自分の身長ほどもある双鉄鞭を構え、白虎との戦闘が始まった。

第39話

現在、白虎と戦闘中だ。向こうの爪とこつちの武器を打ち合いながら言葉を交わす。

「武器を虚空から出現させる…『月の英雄』のような力を持つのだな…」

「本人だつつかの…」

「本人はもう古の存在よ！ここにいるはずがあるまい！」

「神つてみんな戦わねえと信じねえのかよ…」

白虎との打ち合いが続く。俺としてはまだ余裕があるが、一撃一撃がルーミアとかとは比べ物にならない威力だ。

「守つてばかりでは勝てぬぞ人間よ！」

「だったら攻め入る隙をもらえませんかねえ…つと！」

白虎の爪を弾くように武器を振るう。

「胴が隙だらけだ人間！」

「いや、狙つてたんだよ」

爪を弾かれた白虎が牙を突きたてようと噛みついてくる。

「おらよっ！仕返しだ！」

バックステップで嘯みつきを躲し、目の前に来た頭に鉄鞭を叩きつける。
「ぐぬああ！」

「もう一発！」

「ぬおああ！」

何発も何発も叩きつける。

「さっさと認めやがれ……」

いい調子で攻撃が入る。だが、白虎もただでは終わらない。

「調子に……乗るなあ！」

白虎が咆哮を放つ。咆哮が衝撃波となり、軽く吹き飛ばされてしまう。

「うわっ、つとと……」

「ここまで我を侮辱するかのよう叩き続けたのは貴様が初めてだ……我の怒り……受ける

がいい！」

そう言うのと、凄まじい勢いで白虎の爪が振り下ろされた。

「ぐっ……」

鉄鞭を構えて爪を防ぐが、さっきまでと比べ物にならないくらい威力が高い。

「ここまで力を解放したのだ……簡単にくたばってくれなよ！」

「だったら手加減ぐらいしろよ……」

爪を防ぎながら軽口を叩く。

「手加減などせぬわ！我の全力を注ぎ込んでくれようぞ！」

威力がだんだん重くなる。

やっぱり白虎の力は伊達じゃないな……ゲームでも牙を使ったアクセサリ（白虎牙）で攻撃力アップ、秘石（白虎秘石）も昔レアアイテムで出てきて一定数敵を倒すごとにキラクターの基礎攻撃力を2上げるとかいう超攻撃的な象徴だったし……

「ま、負けないんだけどね」

油断せずに力を込める。

「ほう、やるな」

「お褒めいただき光栄です……と言つところか」

「だが、負けはせぬぞ！」

「残念ながら、お前に待ってるのは敗北だ」

さらに力を込めて弾きかえす。

「なっ……」

「じゃ、これで止めか。おつかれさん……つと！」

虎撲欧狼を両手でしっかりと構え、ガラ空きの頭に全力で叩き込む。

「ぐわあああああああ！」

白虎が叫び声をあげながら倒れる。

「さて……これどうしようか朱雀？」

今まで蚊帳の外だった朱雀に声をかける。

「どう……と言われても、とにかく白虎の住処に案内する。そこで考えようではないか」

「じゃ、案内よろしく頼むわ」

こうして白虎に勝利し、朱雀との約束に一步近づいたのだった。

第40話

朱雀とともに白虎を住処に連れて行って白虎が目覚ますのを待っている。

「しかし…容赦の無い一撃であったな…」

「容赦とかしても相手のプライドとかが崩れるだけだからな。必要無いと思った」

「そうではあるが…白虎が気を失うとは思わなかったぞ…」

「そういう話しているうちに白虎が目覚めました。」

「む…」

「お、やっとお目覚めかい？」

「何故我の住処に？」

「朱雀に頼んで運んでもらった」

「あのまま放っておけばよかったものを」

「ほつとくのも申し訳ないし、それに俺はまだあんたに認められてないからな。認められるまで勝負に勝ったとは言えんよ」

「人間…貴様は不思議だな」

「不思議でもないさ。『英雄』なんて呼ばれちまつてんだから、目の前の危機を救うのは

当然だろ」

「我を打ち倒すほどの膂力とその器量の広さ……貴様が『月の英雄』であることは真であつたか」

「まあ見た目普通の人間だしな」

「よかろう、貴様のことを認めてやろう」

「よかつたぜ。これで認められないとか言われたらどうしようかと」

「正面から戦つて打ち合つた相手を認めぬなど性根が曲がつてる者のすることであるからな」

「じゃ、俺たちに協力してくれるつてことでいいな？」

「うむ、我の力存分に役立てよ」

現在、朱雀とともに白虎と別れて朱雀の住処に向かつている。

「なあ朱雀、四神つてみんな血の気が多いのか？」

「本来はこのようなことはありえぬのだが……復讐者に警戒をしているせいであろうな……」

「復讐者……復讐……か」

「む、どうしたのだ？」

「いや、俺も復讐関係は嫌な思い出があつてね……てか、今回の復讐者はなんとなく予想が

ついでしてし」

「本当か？」

「ああ。きつとそいつの狙いは俺だろう」

「英雄を狙う復讐者……か」

「確定したわけじゃないからはずきり言えないけど、もしあいつだとしたらあまり悪く言わないでくれ。あいつだって譲れないものがあつたんだ」

「人間も楽ではないのだな」

「ああ、人間も楽じゃねえよ」

話しながら飛んでいるうちに朱雀の住処にたどり着いた。

「臨人よ、貴様に復讐したものは何故その行動を起こしたのだ？」

朱雀に聞かれ、答える。

「……本当は、あいつが俺の立場に立つはずだつたんだ」

「どういうことだ？」

「俺は、本当は古代都市の外の人間だった」

「なんと、古代都市の外で生きておつたのか……」

それから、過去の話を話し始めた。

「それで、外を歩いている間に古代都市の名家の娘を救つたんだ。そしたら、古代都市に

住むことになって、それから妖怪を倒し続けたら都市の重役についてたんだ。俺は自分のことばっかり考えて生きてた。でも、それでそいつの立場を脅かしてしまった」

「立場など、気にするものなのか？」

「人間、そういうのを気にする奴もいるのさ」

「そ…そうか」

「今度はしつかり向き合って全力で戦ってやらねえと…」

せめてものけじめだ。

「優しいのだな」

「優しくなんて無いさ」

「優しい。優しすぎる。己に楯突き、不相応な野心を持った者に向き合うなどと」

「俺のせいであんなったんだ。俺が終わらせてやるのが筋だろ」

「ふ…やはり貴様は英雄よ」

「そ、そうか？」

「うむ、我が保証しよう」

「…ありがと」

「気にするで無い。それより、次は玄武と青龍どちらを認めさせるのだ？」

「どっちにしようか…」

玄武は明らかに堅いし、青龍は朱雀以上に突っ込んでくるとかなさそうだからな…
「まあ、ゆつくり決めるが良い」

「わかった」

朱雀はそういうと住処の奥に入っていった。

「さて…どつちと戦おうか…」

そう考えながら、意識が闇に落ちていった。

第41話

朱雀の住処で寝ていたようで、朱雀の声で目が覚めた。

「疲れているようだな、臨人よ」

「ああ、朱雀か。流石に四神の半分と戦えば疲れもするさ」

「何を言うか、まだ全力ではないのだろう？」

全力…ではないけど必死ではあるな。

「精神的にはきついんだよ。神相手つてのはその辺の雑魚妖怪の相手とは訳が違うからな」

「だが、まだあと青龍と玄武が残っておるぞ？」

「キツイな…」

「だが、英雄なら勝てるであろう？」

「まあな。救うと決めたら絶対に諦めねえし」

しばらく話をしていたが、ここで朱雀がこれからについて聞いてきた。

「さて、英雄よ。次は青龍と玄武、どちらを認めさせるのだ？」

「次は…青龍かな」

青龍。一筋縄じゃないかなだろうけど、銀龍との経験もあるし苦戦はしないだろう。

「青龍か…なら、こちらだ。征くぞ」

朱雀に連れられて、青龍の住処に向かう。

朱雀と並走ならぬ並飛行し、青龍の戦術などを聞いている。

「なあ朱雀、青龍はどんな戦い方をするんだ？」

「青龍は、我ら四神の中でも強力な神術を扱う。並の者では近づけもせぬよ」

「遠距離型か…」

俺の戦い方はほとんど近距離だから相性は悪いかもしれない。だが、簡単に諦めるわけにはいかない。どうにか対策を考えないと…

「どうしたのだ？」

「いや、俺つてあんまり遠距離戦やったことないんだよね…弓は扱えるけど、青龍に通じるかどうか…」

「青龍に弓など非力な武器は通じぬよ。奴も龍であるからな」

「だよなあ…生半可なものじゃ鱗に阻まれるよなあ…」

「まさかとは思うが、怖気づいたのではなからうな？」

「いや、怖気づいちゃいないけど今までの戦い方じゃ厳しいだろうなって」

「そうか」

「まあ、やるだけやってやるさ」

そういう言っているうちに青龍の住処に到着したようだ。

「さて、ここが青龍の住処だ」

「やれやれ…いかにもつてところだな」

目の前には岩に囲まれた巨大な洞窟がある。先は暗くなっており、この場所からじゃ見えない。

「さて、洞窟に入…」

「我が領域は渡さぬ！」

洞窟に入ろうとすると、呻くような重く低い声とともに水の弾が飛んできた。

「うわっ…と」

急なことで反応が遅れたが、ギリギリで躲す。

「復讐者に与するものよ…この青龍が滅してくれよう！」

水弾を躲して着地した先の地面が泥濘む。

「なっ…」

泥濘む地面を蹴り、強引にその場を離れる。その場を離れて数秒後、水の柱が地面から『生えた』。

「おい朱雀、これじゃ認めさせるも何も…」

朱雀の方に振り返ろうとしたら、朱雀はそこにいなかった。

「英雄よ、我では青龍に手出しできぬ」

空から朱雀の声が響く。

「おい朱雀、何逃げてんだよ！」

「我とて青龍の水を受ければただではすまぬのだ！」

「だとしても、説得にはお前が必要だろ！せめて洞窟から引きずり出すぐらいはしてくれよ！」

朱雀と言ひ争いをしている間も水弾や水柱は俺に牙をむく。

「ほう…朱雀…我らを売ったか…」

「違う！我は仲間を売らぬ！」

「問答無用！」

俺に向かっていた水球や水柱が朱雀にも襲いかかる。

「危ねえ！」（来い！光耀碎波棍！）

棍を出し、朱雀に向かっていた水球を叩き壊す。すると、朱雀が驚いた顔で俺を見る。

「なっ…」

「朱雀、露払いは俺がする。だから、どうにか青龍と俺が真つ当に戦える状況を作つてくれ！」

「だが、どうすれば良いのだ：奴はもう我の声すらも…」

「話し続けてみやがれ！やりきる前から諦めんな！」

しよぼくれた朱雀に喝を入れる。こいつら四神は外部である俺だけじゃ救えねえ。仲間じゃねえと無理な話だ。

「お前の本心をぶつけろ！仲間を、この国を救いてえんだろ!? だったら、その心をぶつけりゃいい話じゃねえか！」

「だが…」

「じゃあこのまま裏切り者扱いされていいってのかよ！お前はそれでいいのかよ！」

「…」

俺の言葉に朱雀がおし黙る。今こうして朱雀に喝を入れている間も絶え間なく水の弾幕は襲いかかってくる。

「藁にもすがる思いで本物かどうかもわからない俺を試して、本物かどうか自分自身で確かめて、他の奴にも認めさせるためにここまで来たんだろうか！」

「臨人…貴様という男は…」

「それなのに、ちよつと話聞いてもらえなかっただけで諦めんのかよ！」

「我はそんなつもりでは…」

「だったら、お前の気持ちちよつとやつをぶつけてみるよ！神だろうがなんだろうが、魂から

語り合えば心の奥が見えるはずだろ！」

朱雀に喝を入れ続けていると、水弾が急に来なくなった。

「朱雀と共にいるお主、どうやら貴様の心…悪には染まっていないようだな」

洞窟の奥から最初と同じ声が聞こえた。

「青龍…？」

朱雀がつぶやくような声で言う。

「朱雀よ、その男の清らかさに免じて話ぐらいは聞いてやろう」

その言葉が終わると同時ぐらいに、荒々しくも美しい巨大な蒼龍が出てきた。

「これが…青龍…」

ゲームでは無双ゲージ（いわゆる必殺技ゲージ）を上げるアイテム『青龍胆』や関羽の愛武器『青龍偃月刀』なんかがある。あまり青龍胆使ったことはないが、青龍偃月刀はバカみたいに使ってた。なんならレプリカ作って竜也と組手してたぐらいだもの。白虎や朱雀もそうだが、まさかこの目で四神を見てるとは今でも信じられないところがある。

「して、朱雀よ…貴様が我ら売ってないとするなら、その人間は何者ぞ？」

「こやつは…」

朱雀が答えようとするのを止める。

「それは俺自身から言わせてもらう。俺は川神臨人。『月の英雄』でお前たちと、この国を救う男だ！」

「ほう…悪には染まつておらぬが酔狂が過ぎるようだな…」

「酔狂かどうか、確かめてみるかい？」

青龍に挑発をかける。白虎も朱雀も気が短かった。青龍も引つかかるだろう。

「よかろう…ただの人間ごときが英雄を名乗り、この国を救うなどという妄言…この青龍が潰してくれるわ！」

「かかってきやがれ！仲間も信じれないやつに負ける気はねえからよ！」

手に持ってた光耀碎波棍を消し、新たな武器を出す。

（来い！青龍偃月刀！）

相手が青龍なら、これで相手するのが熱い展開ってやつだろう。

「虚無から武器を…」

「俺は、負けない！」

青龍との戦闘が今、始まる…

第4 2 話

現在、青龍と戦闘中だ。

「むうん！」

「くっ…そが！」

青龍は神術系使いかと思つたが、龍だけあつて力も強いようだ。尻尾を叩きつけてくるだけでもかなりの威力だ。

「我を侮るなよ？」

「悪かつた…なあ！」

そう言いながら迫り来る尻尾をはじき返す。偃月刀みたいな長柄武器だから助かっているものの、これを刀とか斧でやるのは厳しそうだ。

「今度はこつちから行くぜ！」

弾いた勢いを利用して青龍に斬りかかる。狙いは…ガラ空きの胴体！

「でやああああああ！」

「甘いわ！」

流石に狙いがバレたのか、水で刃の勢いを殺される。

「くそっ…そういう使い方もありかよ…」

水を防御に回されるとは…

「まさか、もう手詰まりとは言うまいな?」

青龍が余裕綽々な態度でこちらを煽る。

「…」

こっちの攻撃手段は直接攻撃しかない。正直に言うと、厳しい状況だ。刃とは、得物の鋭さも大切だが使い手の『技量』と『勢い』も大切だ。どれだけ鋭利な刀であろうと、素人が振っても役に立たない。逆にどれだけ鈍（なまくら）な刀であれど、極めた者が振れば人の命を奪えるだけの武器として機能する。

『月の英雄』はこの程度なのか？貴様の力量を見てやろうと貴様の領分に入ったというに…英雄もどきめが!」

青龍の体にまわりついてこちらの攻撃を受け止めていた水が弾け飛ぶ。その勢いで俺も飛ばされてしまった。

「ガハッ…!」

「英雄と信じた我が愚かであったわ…一思いに潰してくれようぞ!」

そう言うと、青龍は俺の周囲に水柱を展開してそれをこっちに放ってきた。

（…）まで…なのかよ…）

どうにか逆転しようにも、俺一人では水に阻まれてまともな攻撃を与えないのがオチだ。

(せめて…あの水だけでも突破できれば…)

不意打ちで居合いを決めれば突破できるだろう。だが、ここまで余裕の無い戦いじゃ簡単に居合いを決めることができない…それに、偃月刀じゃ居合いなんて到底不可能だ…考えをまとめている間にも、水柱は迫ってくる。

「所詮本物など死んでおる…か」

青龍の呆れた眩きが聞こえる。正直、それに応える余裕も無い。

「ぬええええええい！」

諦めかけたその瞬間、迫っていた水柱が『蒸発』した。

「なっ…」

その光景に俺は絶句した。あれだけ苦労していた水が一瞬にして無効化されたのだから。

「…英雄よ。この朱雀の目を覚まさせていただいたこと、深く感謝する。許されるのであれば、参戦させていただけよう…」

声のする方を振り向くと、朱雀がいた。諦めかけていた朱雀が立ち直ってくれたのは嬉しいが、正直相性が悪いと聞いてしまったので不安の方が大きい。

「ほう…朱雀よ。貴様もこの偽物を庇うか…」

「この者は…本物だ！」

朱雀の炎が青龍に向かう。青龍も負けじと水を放ち、迎撃する。

「朱雀よ！目を覚ませ！」

「青龍！貴様こそ目を覚まさぬか！」

朱雀と青龍の凄まじい打ち合いが発生する。人間である俺は余波で吹き飛びそうだ。

（これが…本当の神の戦い…）

朱雀と青龍の戦いに思わず惚けてしまう。人間である俺がどうかできるのか…？

「臨人！我が術を抑える！貴様は青龍の目を覚まさしてくれ！」

「そんな言われたって…」

さっき全力が弾かれたばかりなのに、何かできるのか…？

「ふん！所詮偽物は偽物よ！我らを、国を救うなどできぬ！誰も守れず愚かに死にゆくのみよ！」青龍の言葉が刺さる。だが、意気消沈してしまった俺はその言葉を聞いても動くことができなかった。その時、二人の声ではない声が洞窟に響き渡った。

「その者が偽物かどうか、この戦いで見極めるが良い！」

朱雀の裏に白い影が現れる。

「朱雀だけでなく白虎までもが信じるとは…」

「青龍！随分と疑り深いではないか！まさか、怖いのか？」

「ほざけ！我に恐怖などあるものか！」

白虎：…まさかここで来てくれるなんて…

「英雄！貴様にこの白虎の力を与えよう！」

白虎がそういうと、首回りに見覚えのあるチョーカーがぶら下がった。

「貴様にこの我、白虎の力を与えた！」

そう言われ、首に下がったチョーカーを見る。

（ウオアアアアアアア！これ、白虎牙じゃん！マジモンの白虎牙じゃんか！）

生前はゲームでしか見たことなかったが、俺の体に白虎牙が装備されている。

「これで青龍など怖くないだろう！」

正直、白虎牙がどれだけ効果があるのかわからないがここでもらったら戦わなきゃ

男じゃねえ。

「やってやる…やってやるさ！」

青龍VS朱雀戦の余波を避けつつ青龍の元に向かう。

「今更偽物に何ができる！」

青龍の水柱が俺の目の前に立つ。だが、不思議と今の俺は怖さを感じなかった。

（今ならいける！）

躊躇いなく水柱に向けて横薙ぎの斬撃を放った。すると、その斬撃は水柱を超えて洞窟端の大岩を切り裂いた。

(まさか、これって！)

生前漫画で読んだ技の中の一つ、『空破斬』のような物ができた。

「青龍！人つてのはな！神から見ればちっぽけかもしれねえ！でも、人は何かと力を合わせりや神をも超えられるんだよ！」

朱雀、白虎、お前たちがチャンスを作ってくれたから青龍にコレを当てれる！

「喰らえっ！『空破斬』！」

青龍偃月刀の刃から空気の刃が放たれる。その刃は不意を突かれた青龍の角に直撃し、その角を切り裂いた。

「…まさか、角を切り裂かれようとはな」

「どうだ青龍、少しは話を聞く気になったか？」

「…これ以上角を切り刻まれては堪らぬ。話を聞こう」

「こうして、俺たちは青龍の沈静化に成功した。」

竜也の転生

特別編 1 話

俺は星影竜也。今日も学校から帰ってきていつも通りの生活を送ろうと思ったら、いきなり俺のスマホが鳴り出した。

「ん、なんだ？」

スマホを手に取り、画面を見る。そこには、

《宇佐見 蓮子》

『臨人知らない？ちよつと聞きたいことがあるんだけど』
と書いてあった。

このメッセージを送ってきたのは、宇佐見蓮子。俺と臨人が一緒に通っている大学で秘封倶楽部というサークルをマエリベリー・ハーン（メリーと呼んでいるが）と共にやっている。俺と臨人も、よく蓮子に引つ張られて秘封倶楽部に参加している。

臨人は俺の親友で、フルネームは川神臨人という。

「蓮子か……どうせテストの日程とかだろ……」

ちなみに、俺とメリーが同じ日程で講義を取っており、臨人と蓮子が同じ講義を取つ

ている。そのため、こういったメッセージはよく来るのだ。
(またテストの日程か…)

何回目になるか分からない無視を決める。
すると、数十秒後にまたスマホがなり、画面には

受信

《宇佐見 蓮子》

とあった。いつも通りに応答ボタンを押し、通話に出る。

「もしもし、私よ」

「蓮子、どうしたんだ？またテストの日程教えてとかじゃないよな？」

「ちがうわ。まあ、テストの日程も知りたいけど、今回はそれじゃないの。」

「じゃあ何さ」

「秘封倶楽部の活動日を伝えようとしたのよ。」

「それでどうしたんだ？」

「メリーがどれだけ連絡しても臨人に繋がらないって言ってる。」

「嘘だろ!？」

「本当よ。十回ぐらい電話したりメッセージを送ったりしたのに、まったく反応が無いのよ。」

「マジかよ……」

数週間前には臨人と普通に駄弁っていたのでいまだに信じられない。臨人とは幼稚園のころからの付き合いだが、あいつは家族からの連絡以外はきっちり受ける奴だ。なのに繋がらないってことは、割とヤバいかもしれない。

「竜也のほうに何か連絡来てない?」

「いや、数日前には普通に遊んでたけど?」

「それから今日まで臨人としやべった?」

「いや、全く」

「そう……」

「ちよつと待っててくれ。臨人に通話かけてみる。」

「わかったわ。」

「じゃあ、また後でな。」

そう言つて電話を切つた。切つた後、いつも通りに臨人に電話をかけた。だが、「おかけになつた電話番号は、現在電波の届かないところにいるか、電源が入っていないため電話に出ることができません」

と聞こえてきた。電源切つてるのかな?でも、授業無いときは家で暇してるあいつがスマホの電源切つてるわけが無い。

とりあえず、蓮子に報告するためにメッセージで

《竜也》

『駄目だ。繋がらない』

と送った。すると、またスマホが鳴り出し、

受信

《宇佐見 蓮子》

と表示されていた。

さっきと同じように電話に出て、

「駄目だったのね…」

「残念ながらな。」

「どうしたのかしら?」

「知らん。だが、心配だ。」

「なら探しに行ってみない? 臨人のこと。」

「そうするか。そういえばメリーには?」

「もう言つてあるから心配しないで。」

「分かった。なら集合はどうする?」

「明日の朝十時にいつもの場所でもいいだろ。」

「決まりね。メリーにも言っておくわ。」

「頼んだ。」

「じゃあまた明日。」

「ああ、またな。」

そう言って電話を切った。

こうして、俺たちはいなくなったメンバー臨人を探すことにした。

臨人…どうしたんだ…

特別編 2 話

俺は臨人を探すまえに集合のため、いつもの公園に来ていた。

「あら、竜也。早いわね。」

そういいながら軽い金髪？の女が声をかけてきた。

「おお、メリーか。」

「久しぶりね。」

今話しかけてきたのはメリー。秘封倶楽部のメンバーの一人で、結界の境目が見える程度の能力を持っている。メリーのおかげで秘封倶楽部の活動ができているといっても過言ではない。

「だいぶ早く来たのね。」

「まあな」

「しかし、臨人はどこに行ったのかしら？」

「さあな。あいつは一回いなくなると帰ってくるまでどこにいるか分からんからな。」

「本当ね。」

そんな話をしながら三十分以上が経った。ちなみに集合時間はとつくに過ぎている。

「しかし蓮子は相変わらず遅いわね。」

「今に始まったことじゃないんだろ。」

「それもそうね。」

蓮子の遅刻癖にも困ったものである。

「あなたと臨人が初めてきた時もこうだったわね。」

「あの時は臨人もいたがな。」

俺と臨人が初めてきた時も蓮子は遅刻してきた。

「そうね…」

「すまん。無神経だった。」

「いえ、大丈夫よ。今日探して見つければいいんだから。」

「そうだな」

そんなことを話している間に話題の人物がやつときた。約50分の遅刻である。

「ごめん！遅れちゃった！」

「やつと来たわね。置いていこうかと考えていたわ。」

「置いていくのは勘弁して頂戴。」

「ふふっ、冗談よ。」

「冗談キツイわよメリー…」

「いつものことじゃない。」
「うう〜」

メリーが蓮子の遅刻をネタに弄る。もう何度も見た光景である。
「竜也も何か言つてよ!」

「毎回遅刻してゐることは弁護できんな。」

「酷い! 助けて臨人〜…つていないんだつた…」

蓮子が臨人に泣きつこうとするが、今日あいつはいない。

この流れももう何回も見えてきた。だが、今回は臨人がいないので不発に終わる。

「さて、臨人を探しに行きましようか。」

蓮子がまとめるようにそう切り出す。ほんとにこいつは…

「でもどうやって探すのよ? いそうな場所も分からないのに。」

メリーがそう返す。残念だがメリーの言う通りだ。さすがの俺でも臨人の居場所などさっぱり分らない。

「最初は臨人の家に行つてみましょうか。」

蓮子がそんな提案をしてきた。

「いや、無駄だと思ふ。」

俺は蓮子の提案を否定する。

「そうね。竜也の言う通りだわ。」

メリーも俺に賛同する。

「何ですよ？何か手がかりがあるかもしれないじゃない？」

蓮子が反論してくる。

「臨人は一人暮らしただぜ？」

「鍵が閉まってると思うわ。」

俺、メリーの順で発言する。

「とりあえず行ってみましようよ。もし鍵が閉まったら別の場所を考えましよう。」

蓮子がそう言う。

「そこまで言うならいつてみるか」

俺は仕方ない、といった形で同意する。

「仕方ないわね。なら、行ってみましようか。」

メリーも渋々同意する。

そうして俺たちは、公園から臨人の家の前に来た。

「久しぶりに来たな…」

俺はつい小さく呟く。

「とりあえずドアを開けてみましようか。」

蓮子がそんなことを言いつつドアノブに手をかけた。すると、鍵が開いていたらしく、扉が簡単に開いた。

「あら、開いてたじゃない。」

蓮子が俺たちに向けてそう言いつつ中に入る。

「珍しいな……臨人が鍵を閉めないなんて……」

「そうね……」

俺とメリーは怪しみながら蓮子に続く。いつもは蓮子がドアを開けようとして臨人が出てきて中に入るといふ流れなので、不自然に感じる。

三人で臨人の家の中に入り、中を搜索する。

不法侵入に思われるかもしれないが、近所の人からしたら割といつもの風景だ。そのため、通報されることは無い。

「しかし、臨人の家は相変わらず綺麗だな。」

「そうね。蓮子とは大違いだね。」

「ちよつとメリー！それどういふこと!?!」

なんて話しながら探していた。

しばらく探索していると、机の上に一通の手紙を見つけた。

「なんだ？これ？」

手紙をよく見てみると、『最高の友人へ』と書いてあった。

「メリー、ちよつといいか?」

近くにいたメリーに話しかける。

「何かしら?」

俺はメリーにさつき見つけた手紙を見せる。

「これ、俺たち宛てかな?」

「どうなんでしようね?」

そんなことを話していると、蓮子がやってきて、

「あら、手紙?ちよつと読んでみましようか。」

と言つて、手紙を俺の手から引つ手繰つていった。

「えーと、何々…」

蓮子は俺から手紙を引つ手繰ると、手紙を読んでいった。

『おう、俺だ。臨人だ。あんたらがこれを見てるとき、俺はあんた達の前にいないんだろ
うな。簡潔に言うとう、俺つて秘封倶楽部で仕事が出来てないなく、と思つて一人で神隠
しが起きた場所とか人気の無い心霊スポットとかまわつてオカルトについて勉強?し
てたんだが、その最中に事故が起きてな…あえなく死んじまった。死んでるのに手紙が
かけてるのは、オカルトでは結構有名な転生つてのをしたからだ。会えなくなるのに、

皆に別れの言葉も言えずに別れるのは嫌だからな。最後に別れの言葉を書いておく。最後つて言うか軽く死後だけど。つて関係ないか。とりあえず、一人ずつ書いておく。

蓮子。お前はいつも明るくて、あまり貢献できてない俺のことを邪険に見るようなことをせず、仲間として接してくれたこと、本当に感謝してる。おかげで、秘封倶楽部にいる時、すつげえ楽しかった。それに、お前のおかげで、夜なのに時間と場所が分からなくなるってことが無いから安心して活動できた。でも、遅刻したりテストの日程聞いてくるのは勘弁してくれ。

メリー。お前は蓮子のストッパーをして、周りに迷惑がかからないようにしたり、俺らが見えない境界を見つけて、俺たちの活動の中心になつてくれた。正直、メリーがいなかったら俺は秘封倶楽部で何もできずに、ただただ時間だけを潰すことになつてたと思う。ただ、蓮子と俺をまとめて弄るのはやめてくれ：結構恥ずかしかったんだぜ？

竜也。お前とは物心つく前から一緒だったな。いつも一緒に、腐れ縁つて言うのか？ そんな言葉が似合うくらいに同じ道を進んできたな。正直、竜也にはどんだけ助けられたか覚えてねえや。ははっ。正直竜也のおかげで今まで生きてこれたつつつても過言じゃねえ。そういや、秘封倶楽部に誘ってくれたのも竜也だったっけ。お前が「面白そうなサークル見つけた！」つつつて俺に向かつて言つてきて、俺に有無を言わさず活動場所に俺を連れてつたんだよな。懐かしいなあ。おかげで俺は大学生になつても童心

に帰れる場所を見つけた。もつとお前と過ごしたかったぜ。今までいろんなことがあつて、いろんな奴と出会ってきたが、やつぱ竜也は最高の親友だな。死ぬ寸前にそう思った。じゃあな。親友。あと、異世界探しはほどほどにな。

この手紙に書くことも最後になつたか：

最後に、三人に一言だけ言わせて：いや、書かせてくれ。

【ありがとう】

』

手紙にはこう書いてあつた。最初のほうは蓮子も、いつも通りのテンションで読んでいたのだが、メッセージの部分では、だいぶ泣きそうになつていた。実際のところ、俺もメリーも泣きそうで限界だった。読み終わるころには、三人とももうボロ泣きで、手紙を見るのも必死だった。

「臨人：…なんでだよ…」

「あんまりよ…臨人…」

「何で…何でよ…」

俺、メリー、蓮子の順で小さく呟いた。

しばらく三人で泣いていると、蓮子が吹っ切れたような声で「帰りましょう。ここにいっても仕方が無いわ。」

と言った。

それに続いてメリーも

「そうね。帰りましょうか。」

と言った。

メリーがそういった後に、蓮子が

「竜也はどうするの?」

と聞いてきた。

俺はその問いに対し、

「俺はもうちよつと残るよ。」

と答えた。

「そう…」

蓮子はそういい残して帰っていった。

蓮子たちが帰った後、俺は臨人の家で痴呆のように立ちすくんでいた。臨人が死んだのが今でも信じられない。でも、実際ここには臨人は死んだって書いてある。この手紙がイタズラだとは思わないが、俺は臨人はこの世界のどこかで生きてるんじゃないかつ

て心のどこかで思っていた。

「探しに…行くか…」

こうして、いるはずも無い俺の親友、臨人を探すことにした。

特別編3話

臨人の家であの手紙を見つけた日から数日が過ぎた。俺は転生についての情報を集めていた。冷静に考えたら転生なんて想像上のものではないのだが、俺は冷静に考えることもできなくなっていた。

「くそっ！ まともな情報が無い…」

まともな情報など見つかるはずが無い。想像上の話が現実になる時点でおかしいのだ。

「仕方ない…：神隠しで有名な場所を片っ端からあたってみるか…」

転生で異世界に行ってるのなら、神隠しでも異世界に行けるのではないかというふうに考えてもおかしな考えに至ったのだ。

「そうと決まれば準備するか。」

これからは長い旅になりそうなので、しっかりと準備をしていく。食料や水、資金が途中で尽きては話にならないので、持ちきれない限界まで持っていく。

「これでいいか…」

持ち物の確認を終えてから家を出る。学校のほうは蓮子とメリーの二人に、前もって

数日の間休むと連絡してあるので問題ない。

「さて…行きますか…」

もうここに帰ってくることは無いかもしれない。そう思い、この台詞を言う。

「行つて…来ます…」

なんともいえない気持ちになりながら家を出た。家を出てから駅に向かう。駅に着くと、後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。

「あら、一人でどこに行くのかしら。」

「私達も同行していいかしら？」

声に反応して後ろを振り返ると、蓮子とメリーの二人が旅支度をして立っていた。

「お前ら…」

思わず声が出てしまう。何でここにいるんだろうか？

「この蓮子様を差し置いて長期旅行なんていい度胸ね。」

「そういうことなら私と蓮子も呼んでほしかったわ。」

二人とも…

「二人とも良いのか？この旅行についてはメールで言っている筈だが？」

この旅行はいつ帰つてこれるかわからないものになる。俺一人ならなんも問題ないが、二人はどう考えているのだろうか？

「二人とも、親とか心配しないのか？」

「一応聞いておく。もしものことがあったら大変だ。」

「大丈夫よ。私達の親、もういないから…」

嘘…だろ…

「すまん。失言だった。」

「いいのよ。言つてなかった私達も私達だわ。」

俺の謝罪に蓮子が答える。

「それよりも！謝罪してほしいのは、私達に黙って楽しそうなことしてることよ！」

楽しそうなことって…

「今回の旅は臨人を探しに行くものだ。もしかしたら死ぬかもしれないんだぜ？」

半ば脅迫のようなことを言う。これで身を引いてくれれば良いが…

「臨人探し!?何で言つてくれないのよ！」

「どうして私達に言つてくれなかったのかしら？」

あゝ…たぶんこれ地雷踏んだ…

「メリー！これは大きなチャンスよ！私達、秘封倶楽部の力、竜也に知らせてやりましょう！」

「そうね。竜也は私達のことを甘く見すぎよ。危険な事なんて気にしないわ。それに、

今更危険なんて、もう慣れたわ。」

ほらな…

「そうと決まれば行くわよ竜也！」

「行きましようか？ 竜也。」

「しやーない。行くか？ 二人とも。」

「ええ！」

こうして、俺たちは本格的に臨人を探し始めるのだった。

特別編4話

三人で馱からいろいろオカルトスポットを回ってから、博麗神社に向かった。

「ここで最後か……」

「そうね……」

「これで何も無かつたらどうしましょうか……」

「ここまでできて、何も無いのは悲しい。ここに来るまでに行ける距離の神隠しで有名なスポットやオカルトスポットは全部回った。これで駄目だったら八方塞だ。行った場所としては、富士山や蓮台野、鳥船神社といった有名どころから辺境の神社までまわった。」

「行きましょうか……」

「そうね……」

「そうだな……」

何かあつてくれと思い、博麗神社の境内に足を踏み入れた。

「……」

「こんな感じなのね……」

二人とも、廃神社のような見た目に怯えたような声を出す。

「嫌なら帰っても良いんだぜ？」

「何言ってるのよ。私がビビるわけじゃないでしょ！」

「ビビってるわけじゃないわ。少し珍しいな、と思ってるだけよ。」

「そうよ！」

二人とも元気だな…

「しかし…何も無いわね…」

「そうね…」

二人の言うとおり、完全なる廃神社で何か特別なものがある気配は無い。あるのは賽銭箱と井戸ぐらいだ。

「あれ？竜也ーちよつと来てー。」

「蓮子か。どうした？」

「私も行くわ。」

蓮子に呼ばれ、メリーと共に蓮子のほうへ向かう。

「これ…入っていいのかしら？」

「なになに…」

蓮子の前に看板があった。そこにはこう書かれていた。

『この先、裏山』

「行ってみようかしら…」

「どうする？行ってみるか？」

「ええ、そうしましょう。」

三人して看板の前で少し話す。話した結果、行く事にした。

「裏山って言っても…」

「何も無いのね…」

裏山に入ったが、変化は無い。

「!？」

「どうした？メリー。」

「この気配…境界？」

「嘘!?メリー!どこにあるの!？」

「こつちよ。」

「おい!?メリー!?!どうしたんだ!?!」

蓮子とメリーがテンションに任せて奥に入ってしまった。

「おい!待てよ!」

蓮子とメリーに追いつくために全力で走った。

「はあ…はあ…二人ともどうしたんだよ…」

「はいよ。」

「境界は！どこにあるの!?!」

「あそこよ。」

メリーはそういい、洞穴のようになってい場所の入り口を指差した。結構オカルトっぽい雰囲気あるな…

「いかにもな場所ね…」

蓮子が小さく呟く。

「あそこに何があるんだって言うんだよ…全く…」

蓮子とメリーの言葉を聞き流し、メリーが指差した方向に向かう。今思えば、この行動が間違いだったのだろう。

「ちよつと！竜也！」

「危ないわよ！」

二人が何か言っているが、無視して歩く。入り口を通り過ぎ、中に入ったところで光が少なくなかった。

「何が…」

後ろを振り向くと、入り口だったところが塞がれていた。

「竜也！大丈夫!？」

「すぐに助けを呼んでくるわ!」

二人が俺に呼びかける声が聞こえる。

「こっちは問題ない!そっちは大丈夫か!？」

俺は自分より、二人の心配をする。

「こっちは大丈夫よ!」

「問題ないわ!」

二人とも大丈夫らしい。

「ちよつと待ってて頂戴!すぐ助けを連れて戻ってくるわ!」

「必ず助けるから!待ってて!」

そう言う二人の声が聞こえた後、足音が聞こえた。どうやら、二人とも助けを呼びに

行つたらしい。

「本格的にヤバいな…」

二人がいなくなつた事を確認した瞬間、俺の意識は無くなつた。

特別編 5 話

意識を失う寸前、俺はあることを考えていた。

(クソツ……)まで……なのかな……)

そうして、意識を失って少しした後、風が吹いたのを感じ、目が覚めた。

「風……？」

おかしい。洞窟の中に閉じ込められたのだ。隙間風ぐらいは吹いたとしても、目が覚めるくらい量の風が吹くことはありえないのだ。

「助けが来たのか？」

助けが来たかどうかを確認するため周りを確認する。

「あれ……」

洞窟にしては妙に広いな……

「ん？なんだ？」

ズボンのポケットに違和感を感じ、中を探る。

「なんだこれ？」

中から手紙が出てきた。

『竜也へ』

こつちに来ちまったみたいだな。全く…これだから神隠し関連はやバいつて言つたのに…まあいいや。来たからにはしゃあない。単刀直入にいう。お前は死なずに転生しちまった。転生の時は死なないと特典が選べないらしい。でも、死ななかつたお前は勝手に特典が決まっちゃったらしいんだ。それだけは一応伝えとく。特典は以下の奴だ。

・属性を操れる

・孔明＋龐統レベルの頭脳

・不老不死

・『消す程度の能力』

・戦闘術

まあ、こいつらを使つてうまく合流してくれ。待つてるからよ。

臨人より』

「マジか…」

死なずに転生つて…マジかよ…

「どうしよう…」

手紙をしまつて、周りを見渡してみたが、見渡す限り木だ。

「あら、こんなところに人間なんて、珍しいわね。」

状況確認をしていると、女の人の声が聞こえた。

「あなたは？」

「私？私はルーミア。宵闇の妖怪よ。」

「妖怪…ですか…」

失礼ながら妖怪には見えない。

「信じられないって言う顔ね。いいわ。証拠を見せてあげる。」

そう言うところルーミアは、闇の翼を展開した。

「どう？信じてもらえたかしら？」

「あ、ああ、まあ。」

あまりの衝撃に言葉を失ってしまふ。

「それにしても、人間がここにいるなんて珍しいわね。自殺志願者かしら？」

「おいおい…だいぶ物騒な事を言うな…」

「あなた、名前は？」

「星影竜也だ。」

名前を聞かれたので名乗る。すると、ルーミアは首をかしげる。

「竜也…どこかで聞いた名前ね…」

え?!おかしいつて!?!俺ここに来たの今日だし!?

「まあ良いわ。あなたは何しにここに来たのかしら?」

「いえ…これと言った目的は無いんですよ。ただ、気がついたらここにいたんですよ。」
嘘は言つてない。

「へえ…珍しいわね。アイツの仕業かしら…」

「あいつ?」

「ああ、説明する必要があるわね。アイツつて言うのは隙間妖怪の事よ。あの妖怪は遠くから人を攫つて来るの。」

「へえ…」

まあ、ある意味遠くから攫われてきたな。

「まあ良いわ。」

良いんだ…

「この辺りに人の集落つてありますか?」

「あるけど、そこには入れないと思うわ。」

「そうですか…」

シヨックだ。このままだと妖怪に食われてしまう。

「安心して頂戴。あなたを食べるような真似はしないわ。」

「読まれたっ…」

「あなた、顔に出てるわよ。」

「そうですか…」

「どうやら、不安が顔に出ていたらしい。」

「あなたを見ていると、臨人を思い出すの。」

「今、臨人って…」

「臨人って？」

「ちよつととぼけてみるか…」

「最近、都に現れた人間で、私と戦っても一歩も引く気配が無いのよね…」

「そうですか…そいつの苗字は？」

「川神。川神臨人よ。」

「噴出しそうになるのを堪え、聞き返す。」

「そいつの特徴は？」

「髪の色は紫で、ちよつと癬つ毛つぽかったわね。目は青かったわ。肌はうらやましいくらいに白さだったわ。背は…低くは無かったわ…」

「そうですか…」

「髪の色と目の色以外は俺の知ってるあいつと同じだ。」

「いろんな武器を使ってきたわ。槍を使つてるときは手ごわかったわね。」
槍…：か…益々親友を思い出すな。

「何か知つてそうな顔ね。」

「いえ、親友に似てるな〜つて思つただけです。」

「そう…」

ふう、何とかごまかせたか…

「そういえば、あなたはこれからどうするのかしら？」

「そうだった…どうしよう…」

これからなんて考えてない。今日生きるのも精一杯だ。

「私と一緒に来ないかしら？」

「え…」

「どうせ今日生きる術も無いのでしよう？」

「ぐっ…」

凶星なせいで言い返せない。

「月移住計画が始まるまでなら暮らしは保障してあげるわ。」

「本当ですか!？」

「ええ。あなたといれば、臨人と多く会えそうだし。」

こうして、俺は宵闇の妖怪ルーミアと共に生活する事になった。

亮君編

1話

私は神薙亮。機音神なんて呼ばれてる、音ゲーマーです。携帯端末で目の前に画面を表示させて情報を集めています。

「またアップデートですか、今度はどんな曲がくるでしょうか…」

「どうやら、私のやっている音ゲーのアップデートがくるそうです。」

「彼らもいなくなつた今…私には音ゲーしなくなつてしまいましたからね…」

私が胸を張つて友人と言える川神臨人、星影竜也の二人…また皆で遊びに行こうとか言っていたのに…臨人君は死に、竜也君は行方不明…

「はあ、次はこの曲ですか…」

正直、情報を見ているでも楽しいと思えません。私には記録なんて簡単に出せますし、記録を出してもゲーム仲間…いや、仲間とも言えませんね。界限での立場を求めてすり寄ってくる人々には見せる気にもなりません。

「ささっとクリアして、行方不明の竜也君を探しましょう…」

友人が居ないとつまらないですからね。

ゲームセンターでさきさつと記録を出して、集まったオーデイエンスをかき分け外に出る。

「私を神と崇めたところで貴方達の実力は変わらないでしょう…」

つい、オーデイエンスに対して愚痴がこぼれてしまいます…自身の立場が惜しいなら自身を鍛えればいいはずですよ？

「さて…私のやり残したことも終わりましたし、私もオカルトとやらに手を伸ばしてみましようか…」

竜也君の居なくなった原因は秘封倶楽部から聞きました。どうやら、臨人君が死んだと断定できてなかった時に臨人君探しをしている最中に行方をくらませてしまったそうです。

「それにしても、異世界…ですか」

この世界にも飽き飽きしてきましたし、異世界行きも面白いかもしれませんがね。「とりあえず、竜也君が行方をくらませたという博麗神社に行きましょうか…」

一番有力なところから、実績あるところから回るのは当たり前のことですよ。

博麗神社の場所を調べ、交通手段を用意して向かう。

「博麗神社…どんなどころでしょうか…」

私も実際初めて行くのでどんなどころかなんて実際の情報は無いに等しいのです。

「何か収穫を持って帰ることが目標ですね…」

何も得られるもの無しで帰るわけにはいきません。最有力候補に行って何も無しでは打つ手がなくなりませす。

しばらくして、博麗神社に到着しました。

「ここが博麗神社ですか…皆で月見をした栃木の社と似たようなものを感じますね…」
(※リハビリ話参照)

博麗神社に入り、社の方へ向かう。社の前には、紫のドレスに身を包んだ金髪の女性が立っていました。

「あらあら、一人でここに来るなんて勇気があるのね」

「貴女は？」

「私は八雲紫。妖怪よ」

「妖怪が本当にいるとは…竜也君が聞いたら飛んで喜びそうですね…」

「あら、あの子のお知り合い？なら、悪いことしたわね…」

「…なんだと？」

どうやらこの女性、いや妖怪は私の友に手を出したようです。

「そんな怖い顔しないでちょうだい。興味があつたからちよつと借りただけよ」

「道楽のために人に手出しするとは…」

「妖怪なんて道楽ぐらいしか無いのよ」

妖怪がそう答える。それを聞いた途端、私の中の何かが切れた。

「少し、説教が必要なようですね」

「人が妖怪に説教なんて、何様かしら？それに、あなたもあの子の関係者で面白そうだから使わせてもらおうわね？」

「何を言って…」

妖怪の言葉が終わるやいなや、自分の足元に大穴ができていた。

「しまっ…」

足場を失ったことにより、重力にしたがつて体が落ちていく。

「私はどこへ向かうことになるのでしょうか…」

落ちていく中でそんなことを考えていた。

S i d e 紫

あの人間が穴から落ちた後、私は小さく呟いた。

「あの世界から幻想郷を生み出すために重要な人間が揃ってきたわね…」

幻想郷計画…妖怪と人間が利用し合う事無く共存する世界を作る…その為には、強い力を持った人間が必要なの。

「ここまでは順調ね…しかし、この世界には優秀な人間が多いわね。目をつけて正解だったかしら」

あの亮とかいうのも、立ち姿や振る舞いからして何かしら特殊な生活をしてきたのだろう。

「後は、転生扱いにしちやっただけだから転生特典がどうなるかによつては怪しいわね…」

私のスキマはまだ不完全だから、暴走して転生扱いにしちやうことがあるの。特典も勝手に決まっちゃうし、あまり乱発したくないのよね…

「まあいいわ。優秀な人間が集まればそれに越したことは無いもの」

そう呟き、スキマで元の世界に帰った。

紫Side Out

2 話

あの妖怪、八雲紫に落とされた先は平野でした。

「あの妖怪め…竜也君に飽きたら私まで使うとは…次あつたらお灸を据えてやる必要がありそうですね…」

まさか落とし穴とは…

「それはそうと、ここはどこでしょうか…全く知らない景色ですし、建物一つないとは…」

辺りを見回してみても、何も見つからない。

しばらくそうしていると、『上から』声がした。

「あらあら、魔界に何か用かしら？」

声色を聞くに女性みたいだ。

「人間が魔界に足を踏み入れちゃダメ…いや、貴方は純粹な人間じゃないわ」

「いきなり声をかけて、非人間と言うとは…失礼じゃないですか？」

「あら、そうかしら？」

「それに、姿も見せずに話すのは些か変な話かと」

「それはそうね〜」

声の主は私の裏から前に『降り立った』。その人(?)は、銀髪でアホ毛が飛び出ている、『6枚の禍々しい翼が生えた』女性だった。

「さて、面白い貴方の名前を聞かせてもらえないかしら?」

「…私は神薙亮と申します」

「亮ちゃんね〜、よし、覚えてわ」

「貴女は?」

「私? 私は神綺って言うの。この魔界に暮らす神よ」

「どうやら、信じがたいですがこの方は魔界神のようですね。」

「神…ですか」

「あら、何か感じたの?」

「いえ、別に…」

神…か。機音神と言う私の称号を思い出しますね…

「貴方、私の手伝いをしない?」

「神の手伝いなんて、人間にはできませんよ」

「貴方も神よ?」

「いえいえ、人間ですよ」

普通に生活してた私が神なわけがない。

「信じてもらえないわね〜…」

信じてもらえないと言われましても、人間ですから。

「そうだ、貴方の力を教えてあげるわ」

「私の力を私に教えるとは、意味がないのでは？」

「あるわよ、貴方は自身の力を理解してないもの〜」

「どういうことですか？」

「とりあえず貴方、これに強く念じてみなさい。貴方の力がわかるわ」

神綺にそう言われて、ガラス球のようなものを渡されました。

「この玉はね、気を取り込んだ相手の能力を浮き出させる力があるの」

「なんですかそれ…」

「これはね、一定以上気を取り込むとその気の主に宿る力を浮き上がらせる力があるの」

「随分都合いい道具ですね…」

「普段ならここで会う相手にぶつけて相手の力を知るためのものなのよ〜」

「なるほど…相手の手の内を知れる…と」

「というわけで、気を込めて見てちょうだいな」

「何も無いと思いますけどね…」

神綺さんから渡されたガラス玉？に意識を集中させる。すると、ガラス玉？から文字が浮かび上がってくるではありませんか。

「なっ…」

「やっぱり只者じゃないと思つてたわ〜」

浮かび上がってきた文字の内容が多すぎて混乱しています。

「あらら…さすがに多すぎたわね〜」

「どうするんですかこれ…」

「一旦まとめさせてもらうわね〜」

神綺が手を上げると暴れていた文字達が多まり、文章になりました。

文章が多まり、形作られたと同時に神綺が感嘆の声で私の方を見ました。

「やっぱりあなたは神のようね」

文章をまとめると内容はこうでした。

『名前：神薙亮

種族：機音神

性別：男

能力：音を力にする程度の能力

属性などのイメージを音にすればその音の力を使える。創造から破壊まで、余程の事

でない限りは力の汎用性が強い。

気質：水

武力知力魔力共に高水準であり、並の者では太刀打ちできない。信仰がどこから来ているかわからないので、消滅させることは理論上不可能』

「…えつと、これは」

「もう隠せないわよ?」

「隠すものにも、自分ですらわからなかったのですが…」

「そんな神いるのかしら」

「いるんですよここに」

「まあいいわ、あなたも神とわかったんだし協力しましょう」

「どうやら、勝手に協力すると決められてしまったようです。」

その他

特別短編

俺は川神臨人だ。今日は竜也の誕生日ってことで皆を呼んで俺の家で誕生日パーティーをしようと思っっている。呼んだメンバーは竜也、蓮子、メリーの三人だ。まあ、いつものメンバーだ。

しばらく待っていると、部屋のインターホンの音が鳴った。受話器を手に取り、

「はい、川神です」

「臨人か。俺だ。竜也だ」

「おお、竜也か。ちよつと待ってろ」

どうやら、竜也が来たらしい。竜也を出迎えるために玄関のほうに行く。ドアを開けてみると、竜也がいて、

「よっ。誕生日おめでとう」

「おう。サンキュ」

「まあ上がってけよ」

「おう」

軽くお互いに喋って部屋の中に入る。

「さつきも言ったかも知れないけど、誕生日おめでとう」

「おう。ありがとう」

さつきと同じ内容の会話を交わす。

「しかし、誕生日パーティーか：何するんだ？」

「まあまあ、こつちでいろいろ考えてあるから心配すんなって」

「お前の考えは結構壮大だからな：心配だ：」

竜也が心配してくる。

失敬な。今までやったことといえば、俺と竜也とクラスメイト数人で俺の部屋をつかったパイ投げ大会（掃除は竜也以外の全員でやった）とか、クラスの楽器ができる奴を集めて演奏会したぐらいだろ。

「今年も期待してな」

「まあ、期待しとくさ」

そんな感じで三十分ぐらい話をしていると、またインターホンの音が鳴った。

「お、来たか」

「そうみたいだな」

そう呟いて受話器をとる。

「はい、川神です」

「やつほく、蓮子様だよ」

「遅くなつて申し訳ないわね。メリーよ」

「二人とも来たか。ちよつと待つててくれ」

竜也が来たときと同じように玄関に行く。そして、玄関のドアを開けると、

「あ、臨人じゃなくい。もう準備できたの？」

「臨人のことだから、蓮子みたいに準備不足は無いと思うわよ？」

「うう、何よメリー、あのことをまだ根に持つてるの？」

「あら、私は事実を言ったまでよ？あのことについては何も言つてないわ」

二人の言う「あのこと」とは、蓮子がメリーの誕生日に俺の真似をして壮大なサプライズをしようとしたのだが、準備不足で失敗したということである。内容はここでは言わないが、結構大きなものになる予定だったらしい。

「まあまあ、立ち話もその辺にして、二人とも上がつて上がつて」

「そうね。お言葉に甘えさせてもらうわ」

「そうしましょうか。ここで喋つても竜也を待たせるだけだしね」

そう言つて三人で部屋の中に入る。

「それじゃ、ちよつと待つててくれ。今いろいろと持つてくる」

そう言つて俺はその場をいったん離れ、キッチンへ向かった。

別室のキッチンに着き、いろいろ準備していたものを探す。(とはいつても、ここでは料理ぐらいいだけど)

「えつと、あれとこれと、これか」

用意してあつた料理を大きめのトレイに乗せて運ぶ準備をする。

(あれは……後でいいか……)

とりあえず、トレイに乗つてる料理を運ぶ。

「おまたせ〜」

料理を運ぶと三人が

「相変わらず凄いな。お前は」

「臨人の料理つて話は聞いてたけど凄いのね」

「臨人〜これから私専属の料理人にならない?」

上から竜也、メリー、蓮子である。

「そりや、一人暮らししてりやこの位は普通だろ」

「いや、一介の料理人レベルだろこれ」

今、竜也の目の前には、俺と竜也の高校の修学旅行で泊まったホテルで出されたコーヌ料理と同じものが並んでいる。(全部臨人一人で作りました。)

「これは…普通じゃないわね…」

「何か…女子として負けた気がするわ…」

蓮子とメリーの前にも同じものが並んでいる。

「全部並んだか？」

俺は全部並べた後に、しっかりと確認を取る。

「大丈夫よ」

「ええ、問題ないわ」

「ああ、揃ってる」

三人とも問題ないと返事か来た。

「しまった。ちよつと待っていてくれ。今飲み物とつて来る」

「わかった（わ）」

三人揃って返事が来る。何か面白いなこれ。

再びキッチンにきて、冷蔵庫の中にあるシャンパン（ノンアルコールです）を二本取り、食器棚にあるコップを4つ持ち、皆の元へ向かった。

「ほい、飲み物」

「サンキュ」

竜也にコップを渡し、シャンパンを注ぐ。

「ほい、お二人さんも」

「ありがとう」

「ありがとう」

蓮子とメリーにコップを渡し、メリーにシャンパンのビンを渡す。二人が注ぎ終わるのを待って、

「全員準備は良いか？」

「俺は大丈夫だ」

「私も大丈夫よ」

「私もOKよ」

全員から準備完了の返事か来る。

「じゃあ始めるぜ？Happy Birthday 竜也！乾杯！」

「乾杯!!!」

こうして、竜也の誕生日パーティーが始まった。

パーティーが始まって数十分後に俺は、ある物を用意するために自分の部屋へ向かった。

「ん？どうしたの臨人？」

無言で立ち上がった為か蓮子に怪しまれてしまった。

「ちよつとな」

「何かするの？」

「まあな。ちよつと待つててくれ」

蓮子と軽く喋つてから自分の部屋に着いた。

「あれは何処にあつたかな…つと」

自分の部屋においてあつた「あるもの」を探す。

「あつたあつた。これだ」

「あるもの」を取り、皆がいるリビングへ向かう。

「お待たせ」

リビングからは見えない場所で皆に声をかける。

「あ、臨人だ」

蓮子が声に気付き反応する。

「何が起こるのかしら。楽しみね」

メリーが楽しみそうに呟く。

「今度は何をするつもりだ…臨人…」

竜也が諦めたように呟く。

（三者三様の反応だな…）

そう思っただけでリビングの中にパソコンとプロジェクターとベース（楽器）とアンプを持って入る。

「今年はどうでもなさそうだな」

竜也が安心半分残念半分に呟く。だが、安心するのはまだ早い！

「臨人はあれで何をするつもりかしらね？」

メリーが不思議そうに呟く。

「ライブ？でも、今楽器を持つてるのは臨人だけだから無理じゃないかしら？だったら弾き語り？でもそれはギターよね？そしたら…」

蓮子は俺の意図を測れないのか、ぶつぶつ何かをいつている。

俺はというと、皆の反応をよそにプロジェクターをモニターに向け、立体映像が出るようにする。今の技術ではできないと思う方もいるかもしれないが、竜也と二人で高校生のときに卒業製作で頑張った開発したのだ。プロジェクターをセットした後でパソコンをつなぎ、自分の前に置く。そして、ベースを持ったままパソコンの操作をする。パソコンをセットし終えたら、再生ボタンにカーソルを合わせ、そして、再生ボタンを押し、ベースを構える。すると、俺の近くに楽器を構えた立体映像の竜也、蓮子、メリーが出てきた。ちなみに、メリーはギター、竜也はドラム、蓮子はマイクを構えている。

「すごい！メリー、私たちちよー！」

蓮子が興奮した声でメリーに話しかける。

「さすが臨人ね…」

メリーが感服したように呟く。

「マジか…」

竜也が呆れたような声を出す。

皆の反応が終わるや否やある曲が鳴り出した。

♪Bad Apple feat. Nomico

立体映像を交えたライブが終了して、三人のほうを見ると、

「すごいわね…」

「ええ…」

「やるな…」

三人ともおんなじ様な反応をしていた。

しばらくして、料理もなくなりかけてきて、皆も「もう終わりか？」と思い始めたであらうところに、最後の一手を打つためにキッチンへ向かおうとして、

「ちよつと良いか？」

と竜也に対して言った。すると、竜也が、

「どうしたんだ？まだなんかあるのか？」

と俺に対して言ってきた。

「誕生日といえぼ？」

「成る程な」

これだけでも皆さんもうお分かりだろう。そう。「ケーキ」である。

「皆、ちよつと待っててくれ。最後にケーキ取ってくるわ」

すると、蓮子が

「待ってました！」

と期待通りの反応を返してくる。

「じゃ、行って来る」

そうして、本日三度目のキッチン到着である。そして、冷蔵庫から直径24cmぐら
いあるケーキを取り出して、最初料理を運んでいたものより大きめのトレイに乗せてリ
ビングへ運んだ。

「お待たせ〜」

本日何度目になるか分からない「お待たせ〜」を皆に言ってリビングにケーキを運び
込む。

ケーキをテーブルに置き、席に着き皆の反応を見てみると

「ちよつと…大きすぎないかしら？」

メリーが心配そうに呟く。

「これ…四人用じゃないわよね…」

蓮子が半分引きながら呟く。

「やっぱ日にちにかけてきたか…」

竜也がこつちの思惑を見抜いたように呟く。

「さ、切り分けるぞ」

そう言つて俺はケーキを切り分けた。(余談だが、ケーキを切り分ける前に蓮子とメリーがケーキの写真を撮つてましたw)

切り分けたケーキを食べ終わり、パーティーも終わりを迎えた。その後、竜也以外で、ある程度片づけを終わらせてから

「ふう、今日は楽しかったわ。じゃあ、また秘封倶楽部で会いましょう」

そう言つて蓮子は帰つていった。

「蓮子も帰っちゃったみたいだし、私も帰るわね。」

メリーもそう言つて帰つていった。

「二人ともまたな〜」

帰つていく二人に俺は大声でそう言つた。二人を見送つた後、家に戻ると竜也が、

「臨人、今年もだいぶやつてくれたな」

と言ってきた。なので、

「毎年のことだろW」

と答えといた。

「それもそうだなW」

と竜也も答えた。

少し間が空いて、

「あく今日は楽しかったぜ。臨人、また来年もよろしくな」

「おう。川神臨人の名に懸けて来年もでっかい花火を上げてやるぜ」

「頼もしい奴だな。お前は」

「そうでもないさ」

などと軽く話してから、

「じゃ、俺も帰るわ。じゃあな」

「おう。じゃあな」

といつも通りの台詞を言っただ竜也も帰っていった。

「さ、明日の準備でもするか…」

こうしてまた、いつもと変わらない日常が始まる。

リハビリ話

現代（平成）の東京が田舎と呼ばれるくらい未来の京都にて

俺は川神臨人。高校生だ。今日は学校の秋休みなので、いつも駄弁っているメンバーで月見をしようという話になった。今は駅前で友達待ちをしている。そうこうしているうちに友人が来たようだ。

「お待たせ」

「なんだそのイケてる風の登場の仕方は…」

「なんだよく乗ってくれてもいいじゃんか」

こいつは星影竜也。幼稚園の時から親友で、高校でもいつも一緒に行動している。こいつの特徴としては、いつも突拍子も無い事を考えては俺と一緒に実行するところだ。そのため、俺も竜也も人生経験がとんでもないことになってしまった。

「乗るってお前…そういうのは彼女にやれよ…」

「彼女とかいるわけねえだろ」

「お前なら出来てもおかしくは無いと思うけどな…」

その突拍子も無い考えがなければな…

「それより、今日の月見楽しみなな！」

「張り切ってんなあ……」

「当たり前だろ！ 秘境と言われる栃木に行くんだぜ！ こういうのが好きなのやつなら絶対俺と同じ思考になるって！」

そう。こいつはこういうのが好きなのだ。秘境とかオカルトとかいうのにすぐつられる。これのせいでどれだけ苦労したか……まあ、俺も多少は興味があるから全く嫌というわけじゃないんだけどね。

「それに、今日は亮も来るって話じゃねえか。あいついっつも静かだし、少しぐらい騒がせてやろうぜ！」

こいつの言う『亮』とは、神薙亮というクラスメイトのことだ。クラスの中でも天才と呼ばれているやつで、いつも怖いくらい物静かで冷静沈着、それで成績優秀と絵に描いたような神童だ。そんなやつだが、なぜか俺たちとよく話をする。

「亮が来るって珍しいよな……あいつは勉強と音ゲーは積極的だけど、他は消極的だもんな……」

亮はクラスでもあまり話さない方だ。クラスメイトには、話しかけられたら応じるぐらいの応答しか見たことがない。

「お待たせしました」

「おつ。来たか！」

「おう、亮か」

「二人とも早いのですね」

今来たこいつが神薙亮。話するとき、なぜか敬語になるらしい。

「さて！三人集まったことだし、出発しますか！」

「そうするか」

「ええ。行きましょう」

こうして、俺たちは男三人で秘境・栃木に向かうことになった。

駅内で切符を買って、栃木行きの電車に乗り込んだ。切符に書いてあった席に座って、出発を待つ。

「いよいよ栃木に行くのか……」

「どんな場所でしょうか……気になりますねえ……」

「あれ、亮もこういうの好きなの？」

「ええ。あまりイメージを崩したくないから言つてませんが、こう見えて自然とかが好きなんですよ。まあ、京都ではあまりそういうのは見れませんが……」

「マジか！」

俺と亮は同時に叫んだ。まさか亮にこんな一面があつたとは……

「それより、栃木はどんなところなんですか？」

「さあ？」

亮の問いかけに竜也が答える。

「おい！よくわかんないのに行こうとしてんの!？」

思わず竜也にツツコミを入れる。まじかよ…情報をまともに持たずに秘境行きとか…不安でしかないわ…

「まあいいじゃん。自然豊かってことと秘境であるってことはわかってんだから」

「おいおい…」

それでいいのか…？

「と、とにかく、行ってみてからどうするかは決めましょう。もう行ってみるしかないんですから…」

亮が俺たちに言う。

「そうだな！せっかくの秘境行きだし、気楽にいこうぜ！」

そうして時間は過ぎていった。

しばらくして、栃木に到着した。

「ここが栃木かく…なんか、草木ばかりだな」

「まあまあ、京都のようにビルばかりで人が勝手に作った景色よりは綺麗じゃないです

か

「そうだけでも…なんかこう、不気味な感じがしねえ？」

「秘境ですから当然でしょう」

「そうは言ってもよく、ここまでとは思わんだろ…」

亮と竜也の会話が続く中、俺も電車を降りた。

「さてつと…秘境・栃木に来ちまったわけだが？どうするんだ？」

「どうするも何も…楽しむしかないっしょ！」

「相変わらず切り替え早いなお前は…」

「考えるの苦手だし、行動するほうが早いしさ」

そう言つて竜也は俺と亮を置いて歩き出す。

「おいおい…あいつはいつもこうだ…」

「楽しくていいじゃないですか。こういうのも嫌いじゃないですよ？」

「亮…お前そういう感じだったか？」

「学校では隠しているだけですよ」

「そ…そうか」

「それより、竜也君を追いかけないとはぐれてしまいますよ？」

亮と俺も竜也を追いかけて駅を出た。

駅を出てしばらく歩いてみると、階段の上に大きな鳥居があるのが見えた。

「今時高所に鳥居つてのも珍しいな。さすが秘境だ……」

「今では見なくなりましたからね……昔はそんなに珍しくなかったそうですが……」

「早速行ってみようぜ！」

言うが早いか竜也は走り出し、階段を上っていった。

三人で階段を上りきり、鳥居をくぐる。奥には、草木が生いしげり人の手が加えられていない社が佇んでいた。

「お……これはまた随分と」

「京都にはもうこんなものは無いですからね……」

「月見場所、ここにすつか！」

「いいなそれ、ここならビルも無いし人工の光も少ないからよく見えるだろうし」

「じゃ、決定つてことぞ！」

そう言うとき竜也はバッグの中に入れてあった月見セットを取り出す。

「じゃ、開始といくか！」

三人で月を見る。人工の光が溢れる京都じゃもう見れない光景だ。

「夜空つてこんなに綺麗なんだな」

「やはり、人間の手で作られた景色もいいですがオリジナルである自然もいいものです」

ね……」

「昔の人々はこんな綺麗なのを毎日見ててずるいぜ全く」

「ですが、今より娯楽やオカルトは少なかつたみたいですよ？」

「うげ……耐えられる気がしねえや……」

「竜也は娯楽とかオカルトが大好きだもんな」

「俺からそれを取られたら何も残らねえぜ……」

「いやいや、残るだろ」

「娯楽とオカルトのためにいろいろやってるだけなんだよなあ……」

そうやって話し続けていると、月見団子と飲み物がなくなってきた。

「あ、団子も飲み物も打ち止めか……」

「たまにはこういうのもいいかもしれませんね」

「俺はもうちよつと刺激とか欲しかったけどな！」

三者三様の感想がでる。

「また、こういう機会作って駄弁るか」

「だな！ やつぱ気心知れた友人とこうして特殊な環境で話す機会は貴重だわ！」

「その時は、またご一緒してもよろしいですか？」

「勿論」

二人揃って答える。こうやって気心知ってる友人を誘わないなんてありえないし。

「ありがとうございます…」

「固苦しくせずにありがとうございますでいいんだよ」

「俺たちや友人だろ？」

「そう…ですね」

「おいおい、固苦しくなるなって」

「仕方ないでしょう、私はこういう性分なのですから」

「なら仕方ないってことにしてやるけど…でも、固苦しくしてて疲れたら普通にしてみたいんだからな？」

「わかりました…その時は検討します」

「ならばよし！…んじゃ、そろそろ帰るか？」

「そうしましょう」

竜やが最初に歩き出し、俺がそれを追う形になる。

「おい、亮！早く来いよ！」

立ち止まっている亮に竜也が声をかける。

「…わかった、今行く」

「亮…今…」

亮の口調の変化に竜也が戸惑う。

「気まぐれですよ。さ、帰るのでしよう？」

「なんだよ亮もうちよい続けてくれてもいいじゃんか」

「気まぐれですから、そんなに続きませんよ」

「ちえゝ…せつかく録音してやろうと思つたのに」

「まあまあ、また何かしらでそういう気まぐれは来るだろうよ」

「しやーねえなあ…」

「ほら、行くぞ」

「へいへい…」

三人で駅に向かい、帰りの電車に乗る。

「しつかし、秘境つてだけあって凄かったな」

「そうだな…まあ、俺は最後の亮の言葉遣いのインパクトでほぼ吹っ飛んだけど！」

竜也が笑いながら言う。

「気まぐれですし、またあるかも知れませんか？」

「そう言われてもなあ」

「どうせ俺たち三人でどっか行く機会はまだまだあるからいいじゃねえか」

「そうだけだよ」

「また栃木でもどこでも行こうぜ。そうすりゃきける機会も増えるし」
今日の思い出話をしているうちに京都に着いた。

「さて、帰って来ちまったな」

「何故か落ち着きますね…生まれ育った場所は」

「さて、明日は学校だし早く帰って寝ようぜ」

三人とも別々の帰路につき、家に帰った。

キヤラ設定

名前：川神臨人

種族：人間

能力：出す程度の能力

記憶している物を実際に出す能力。主に武器を出す事に使用している。

二つ名：異常分子、月の英雄、地上最強

異常分子↓高校の時に竜也と二人で破天荒な生活をしていて、現実の高校生らしくない行動（町の便利屋みたいな事）ばかりしていたからつけられた二つ名。今は本人たちと神薙亮ぐらいいしかその二つ名とその由来を知るものはこの世界にいない。

月の英雄↓この小説を読んでもる方は、「ああ、またあのネタか…」と思うかもしれないが、月移住計画の際に妖怪から人間を守った存在として歴史に残ったため、この二つ名がついた。

地上最強↓魔界でサラに言われた二つ名。魔界では有名。（多分）

見た目：i b に出てくるギャリーをちよつとたくましくした感じ。

性格：真面目だが、少し大げさ

人間友好度：高

危険度：中

備考：この作品の主人公。大学に通っていたところ、転生者となって東方Projectの世界に来た。転生した際にゲームの格闘術や剣術などの戦闘術を使えるようになったため、近接格闘に関してはかなり強くなった。また、料理もやっており、特別短編ではその腕前を披露した。

武器は三国無双に登場したものを能力で出して使う。その中でも好きな武器は暁だが、一番使える武器は鉄器尖らしい。

名前：星影竜也

種族：人間

能力：消す程度の能力

あらゆるものを消す事ができる。能力で歴史や存在、世界さえも消す事ができるが、転生する際に力が抑えられたのか、意思のあるものが消せなくなるぐらいまでその力はなくなっている。

二つ名：異常分子、宵闇の銀龍

異常分子↓臨人のところに説明が載っているので、そちらをご覧ください。

宵闇の銀龍↓魔界で神綺が裏で流した二つ名。ルーミアが《宵闇の妖怪》なので、そ

こから宵闇を取り、銀髪で竜也なので、銀龍ということのでつけられた。地上最強よりも後に広まったが、知名度は上。本編ではあまり出てこない。

見た目：髪は銀髪で癖っ毛。顔立ちはまだまあ整っている。目の色は茶色。

性格：楽天家

人間友好度：高

危険度：高

備考：臨人の親友。元の世界の博麗神社に秘封倶楽部で臨人を探しに来ていたところ、死なずに転生というかなり珍しい形で東方Projectの世界に来てしまった。転生前からかなりの楽天家で、感情が顔に出やすい。戦闘力を特典で貰っているが臨人とは違い、格闘術ではなく、遠距離から攻撃する術を使えるようになった。（銃器の使い方や魔法など）

臨人と仲良くしているうちに料理ができるようになっており、ルーミアに重宝された。

名前：神薙亮

種族：人間？

能力：音を力にする程度の能力

炎や風などを音としてイメージすると、実際に魔法のように使えるというもの。神薙

君の場合、こっちの世界（物語の世界）に来る前に覚えていた曲を力にできる。

なので、いろいろな力を使う事ができる。これにより魔界を創るときにだいぶ楽に出来たという。

二つ名：機音神、魔界の祖

機音神は前世で音楽ゲームを極めていたため呼ばれた物。魔界の祖は、魔界の一部で呼ばれている物である。

見た目：髪は青で、服も青が基調。

性格：冷たい感じもするが、実は優しい。口調の割には面白い事を言ったりする。

人間友好度：高

危険度：低

備考：魔界を神綺と共に作り上げた実力者で、臨人の高校の同級生。音楽に関しては誰にも負けない。戦闘も能力でしっかりこなせる上に、頭も良い。いつもは落ち着いた話し方をしている。音が無いところでも自分が曲を覚えていれば能力を使えるらしい。ここから先、蛇足になります。ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

いいですか？本当に蛇足ですよ？

見るだけ無駄かもしれませんよ？それでもいいんですか？

始めちゃいますよ？

では、スタート！

名前：黒崎竜司

種族：人間

能力：無し

二つ名：作者

ちよくちよくこの作品に出てくるかもしれない『作者』という人間であるため、『作者』というのが二つ名である。

性格：気分屋

人間友好度：高

危険度：低

備考：この作品の作者。ノリとテンションでこの小説を書いているという駄目人間。やってみたい事にはとりあえず手を出し、気分でやめるといふ迷惑極まりない人間。気分が変わるまでは徹底的にやるので、いつこの小説が終わるかわからない。

これを書く前にチャートを考えてものの、一切活用しないという駄作者。そのため、その時の考えで次の話を書いている。そのせいで本編の文字数や質がバラバラになっ

ている。

最近、リアルがいろいろあつて意欲があつてもかけない日が続いている。